喫水

変革者

げんじあきら

目次

○梅岡玄蕃と美鈴千賀子
組み立てはじめて

○部品在庫のコンピューター処理

○金曜の夜土曜の夜

○会計伝票

○部品在庫と会計

○現金で払うからコストを下げてくれ

○肉を切らせてみる

○セッケン

○西条朋子の凄さ

○静岡の男

○経営会議

○８月に入って固定資産

○輪島クレンジングと輪島セッケン

○網ノ目三郎を襲う男
喫水

○渋谷の娘10人

○ドラックストアーのバイヤー

○喫水

○三枝伸治を迎えて

○ 9月末日

翻弄される

○引越し

「追試だけど」
「受けられそうもない」
「もう諦めようと思う」
「準備ができないわけ？」
「それもある」
「卒業することにたいして意味はないけど」
「せっかく夜も学校に通ったのに」
「ここのところ学校にも行けない」
「忙しそうだからね」
「わたしが準備するから３日待って」

網ノ目三郎は、佐原友子に感謝している。網ノ目三郎は、電気の技術者である。もともと、会計だの経営だのといったことには、何も興味はない。ただ、どういうわけだか、経営管理室に転勤になってしまった。サイコロを転がしたら自分に当たったとしか思えない人事である。
仕方なく、夜間の学校へ３年行くことにした。会計と経営を学ぶためだ。ところが、極端に忙しかった。コンピューターを使わなければ、経営管理などできない。コンピューターの勉強もしないといけない。せっかく電気技師になったのに、何も役にたたない。
転職しようと思ったが今はまだ会社にいる。
そして、また転勤である。
３月下旬だった。今日は、静岡の子会社に出かける日である。自分がなぜ子会社に行くことになったのか、よくわからない。またしても、サイコロの目のような気がする。誰かが必要だったのだ。パソコンのようである。パソコンが１台足りないがどこかに余ってないか。それが自分である。なんとも情けがない。

佐原友子に連絡したが、返事がない。彼女には感謝しないといけない。もし彼女がいなかったならば、夜の学校を卒業できていない。卒業はどうでもいいとしても、会計や経営といったことに、興味が拡がらなかったと思う。

寮のおばさんとおじさんに、挨拶して、掃除して、引越しのトラックに一緒に乗り込んだ。ホントに、パソコンと同じだ。今度は、静岡の子会社にパソコンが足りない。

マンションとは言えない。アパートである。引越しといっても、家族がいるわけではない。荷物で大きいのは書物くらいのものだ。最近は、自分が何屋さんかわからなくなってきている。電気の書物もあるし会計の書物もあるし、何やら、わけがわからなくなった。経済にも興味が出てきている。

近所のスーパーマーケットを探しに行くことにした。網ノ目三郎は、自分でごはんをつくろうと思っている。これまで、寮のおばさんのごはんを食べていた。これからは、自分でごはんをつくらないといけない。

スーパーマーケットの隣の大型電気店で、冷蔵庫も洗濯機も炊飯器もガス台も買った。電灯も買った。みんな小さなものだ。大きいものでは、アパートに入らない。自分でごはんがつくれるのかどうか、疑ってはいない。フライパンなるものもはじめて使う。包丁とまな板もはじめてだ。何から何まではじめてである。寮住まいというのは便利だった。

米もはじめて買った。5 キロの米袋はけっこう重い。

夕方になって、冷蔵庫もやってきて、洗濯機も来て、炊飯器もきた。ガス屋さんも来て、ガスが使えるようになった。電気屋さんも来て、電気がついた。シャワーも使えるようになった。水道はもう使える。

アッという間に、生活ができるようになる。

ごはんの炊き方がわからない。インターネットに教えてもらう。おかずをどうしよう。醤油と味噌と塩と砂糖を買って来なければどうにもならないらしい。ダシも必要だ。少し前に、寮のテレビでタケノコごはんをやっていた。

インターネットで調べてみる。

またもやスーパーマーケットに行く。豆腐と納豆を買う。味噌汁を調べてくればよかった。タケノコととり肉と、タマネギを買う。ほうれん草も買っておこう。

インターネットのレシピのとおりに、タケノコごはんをやってみる。味噌汁はほうれん草だ。ほうれん草は煮るとダメらしい。最後にちょっと入れるだけでいいらしい。
いろいろわかって興味深い。
とり肉とタケノコごはんがすごくおいしい。こんなにおいしいとは思わなかった。豆腐もいいし納豆もおいしい。ほうれん草の味噌汁もおいしい。
すべてがはじめてなのに、なぜこれほどおいしいのかわからない。
インターネットがなければ、こうはいかない。これから毎日、このようにして晩ごはんを食べようと思った。

○チェリー株式会社
「おはようございます」
チェリー株式会社というかわいい名前だった。化粧品を製造販売している。
網ノ目三郎は、転勤といっても、出向である。子会社に出向である。資本が42％入っている。中途半端な出資だとは思うが、これも、サイコロを転がしたようなものなのだろう。
「網ノ目三郎さんですか？」
「人事総務の有吉里子です」
とりあえず、人事総務に行くのがフツウだろうと思ってやってきた。有吉里子は、30を過ぎているとは思う。独身なのかどうかわからない。
「課長はすぐにまいりますから」
人事総務課長は部長も兼務している横辰八郎だと聞いていた。50前の人らしい。
「しばらく机はここです」
有吉里子の隣らしい。
「８時30になったら朝礼しますからあいさつをお願いします」
まだ８時10分だった。
次々に出勤してくる女性は、化粧品の会社らしく、化粧が厚い。美人が多い。しかし、男性社員に若者が見当たらない。
「網ノ目三郎と申します」

「チェリー株式会社の経営近代化のために来ました」
「しばらくは、みなさんの仕事を手伝わせていただくことになると思います」
「どうぞよろしくお願いいたします」
事務部門が大部屋に机を並べていて、そこの朝礼だった。倉庫があることもわかっていたし、工場も、もちろんあるが、今日は、あいさつができないかもしれない。
「山上郁夫です」
「チェリー株式会社は、私が創業以来やってきている会社です」
「経営の近代化が遅れていると指摘されていますが、私は、どうしたらよいのかわかりません」
「網ノ目さんはまだ若そうだが、ガンバってやっていただきたい」
山上郁夫は、チェリー株式会社の創業者社長である。68歳になるようだが、まだ社長をやっている。息子の山上一郎は、営業を担当しているが、今日は出張だそうだ。まだ39歳らしい。チェリー株式会社は、そのほとんどの売上を、通信販売で上げている。最近は、ネット通販が多くなっているらしい。
「経営の近代化などよくわからないからよろしくお願いします」
生産担当の取締役の永田峰雄は、そう言って、すぐに立ち上がった。あまり、網ノ目三郎とは、話したくないようだった。
「お手柔らかにお願いします」
経理担当の取締役は峠下冴子という60歳の女性だった。網ノ目三郎は、会った瞬間に、メンドーなことになると直感した。
「パソコンはどうされますか？」
意味がよくわからない。会社で用意しなくてもいいのかと聞かれているようだ。
「お願いします」
「お昼は食堂ですけどわたしが頼んでおきました」
「どうされますか？」
「お願いします」
「食券を買ってください」
「いくらですか？」

「１食４００円です」
網ノ目三郎は、４０００円を渡した。有吉里子は、どこかに行って、食券10枚を持ってきた。
「お昼を食べる時は９時30分までにわたしに食券をください」
「わかりました」
「パソコンは自分で買いに行きますか？」
ひょっとして、システム担当などという部署がないのかもしれないと思って聞いてみた。
「システムの会社がネット販売をやってくれていますが社内の業務はやっていません」
「パソコンは自分で買ってきます」
「起案書を書きますからちょっと待ってください」
網ノ目三郎には、チェリー株式会社は、何事も新鮮だった。こんな会社もあるのかと思ってしまう。
「食堂に行きますけど」
お昼になって、有吉里子が言った。
「２２８人の社員の全員がここで食べます」
製造ラインもお昼は止まるらしい。みんな一斉にお昼を食べるそうだ。毎日２００人くらいいるようで、ずらっと並んで順番を待っている。ビュッフェ方式で、自分で欲しいものを選ぶ。現金を用意しておかないと、食券を越えることもあるようだ。豆腐や納豆は、先に並んだ人にしか当たらない。今日は、カツカレーだった。
「食券で食べられるのはカツカレーだけです」
網ノ目三郎は、豆腐を食べたかったが、止めた。
女性の多い職場である。網ノ目三郎は、なんとはなしに見られている感じがしていた。しかし、若い男性が１人もいない。不思議な会社である。
有吉里子が水を持ってきてくれた。
「総務人事で歓迎会をやりますけど都合のワルイ日はありますか？」
「お任せします」
カツカレーは、思ったよりボリュームがあって、おいしかった。

「駅までバスが２便出ます」
「朝２便と夕方２便です」
「網ノ目さんのアパートからだとバスがいいと思います」
有吉里子は、網ノ目三郎のアパートを知っている。もしかして、有吉里子がアパートを選んだのかもしれない。今日は、バスで帰ってみようと思った。アパートまで歩いて３分のところに停車するようだ。今日は、25分かけてアパートから歩いてきた。網ノ目三郎には、苦になる距離ではない。歩くのは得意だ。しかし、今日は、バスに乗ってみようと思った。
「バス出ますけど」
有吉里子が言った。
「有吉さんはバスじゃないのですか？」
「わたしはマイカーです」
「慌てて走ってバスに向かった」
驚いたことに、男性が３人しかいなかった。しかも、おじさん３人である。ゼンブ女性である。若いとはいえない女性も多い。
網ノ目三郎は、やはり歩いて帰れば良かったと思った。しかし、雨が降ったら、そうはいかない。
「どうぞ」
空いている席もあったが座りにくかった。
「網ノ目さんですか？」
「そうです」
「購買を担当しています西条朋子です」
「よろしくお願いします」
「網ノ目さんは独身ですか？」
「ええ」
「どこに住んでいるのですか？」
「アパートです」
時々バスに乗るのもいいかもしれないと思った。こうやって、知り合いができる。
「今日見かけませんでしたけど」
「業者さんのところへ行っていました」

西条朋子は40歳くらいに見えた。結婚しているのかどうか、聞かなかった。
バスは10分くらいで、網ノ目三郎のアパートの近くの停留所に着いてしまう。
「お先に失礼します」
「どうぞ」
網ノ目三郎は、インターネットで調べておいた、ロールキャベツをつくろうと思っていた。

○工場実習初日
電子レンジとトースターを買わないといけないと思った。朝のパンは買ったのだが、パンは焼かないといけない。コーヒーも買った。レギュラーコーヒーを煎れる。マーガリンも買っておいた。朝ごはんはそれだけだ。寮の朝ごはんに較べれば物足りない。
今日も歩いて行こうと思った。７時40分にアパートを出て歩きはじめた。バスが止まってくれると所を通り過ぎた。ここにバスが止まるのは、８時だ。
「私は総務人事に配属されているのですが何か仕事はあるのですか？」
網ノ目三郎は、有吉里子に聞いてみた。
「何も聞いていません」
「１カ月くらい工場で作業したいのですが」
有吉里子は、驚いたようだった。
「どうすればいいですか？」
「横辰課長に話してください」
網ノ目三郎は、ここで有吉里子の隣に座っていても、経営の近代化のために来ましたということばが、遠のいてしまうと思っていた。まずは、実態を掴まないといけない。経営の近代化について、自信があるわけではない。経営や会計などは、やっと夜の学校を卒業したに過ぎない。
ただ、なんとなく、現状を掴まないといけないと思っていた。
「今日は火曜日ですから、来週からにしてください」
「工場の方も準備があるでしょうから」
横辰は、意外にすっきり了承してくれた。

「工場事務をやっています阿仁屋と申します」
「午後からいらっしゃっていただけますか？」
11時に、工場事務の阿仁屋という男性から電話があった。工場事務の課長だと言った。来週４月１日からの工場作業について、相談したいらしい。
「わたしお弁当ですからお昼を食べに行ってください」
12時になって有吉里子が言った。
網ノ目三郎が、チェリー株式会社の社員に、どのように見られているのか、よくわからない。有吉里子も、網ノ目三郎の近くにいてよいのか、遠くにいないといけないのか、よくわからない。
網ノ目三郎は、食堂で１人でごはんを食べる。
１人でいることには、網ノ目三郎は慣れている。なんでもない。３年間、夜学校へ通ったが、会社が終わって、学校の駅で立ち食いそばを食べることが好きだった。貧乏サラリーマンだし、立ち食いそばだって、倹約することもあった。常に、１人で行動することが多かった。佐原友子とは、簿記で一緒だった。税理士になるのだとガンバっていた。ほとんど、状況さえもよくわからない網ノ目三郎の様子を見ていて、帰りに、佐原友子が聞いた。
「簿記のことはわかりにくいですか？」
いきなり話しかけられて、網ノ目三郎はとまどった。
「はじめてだから」
古びた喫茶室で、佐原友子は、網ノ目三郎に、いろいろのことを聞いた。そして、時々、帰りが一緒になると、簿記のことを、教えてくれた。網ノ目三郎は、忙しくなると、10日くらい学校へは行かないが、佐原友子は、学校が主だったようだ。
３年間で、友達になれたのは、佐原友子１人だった。
いつもいつも、網ノ目三郎は１人でいた。孤独という意識はない。
こうやって、チェリー株式会社の食堂で、１人でごはんを食べていても、なんともない。

「よろしくお願いします」
工場事務室は、工場の一角を仕切ったようにつくられていた。４人で、机をならべていた。生産の手配をやっているらしい。部品在庫の管理も担当して

いるようだ。工場は、機械の稼働が重要だ。生産ラインに人を配置することも大事だ。
「どうしますか？」
「作業される方と同じように作業します」
「わかりました」
阿仁屋は、男用の作業服を持ってきてくれた。
「今から見学しますけど、男の作業員はラインにつきません」
「部品の調達や通い箱を運んだりします」
「生産ラインがスムースに流れるように手配します」
網ノ目三郎は、工場を見るのははじめてだった。電気の技師である。どこでこういうことになったのか、よくわからない。誰も、網ノ目さんのご専門は何ですか？とも、聞かない。
カミサマがいるのだとしたら、網ノ目三郎を翻弄しているように思える。網ノ目三郎の考えたこととは、全く違う時間が流れている。化粧品会社の工場の作業員など、イメージにもなかった。そもそも、経営の近代化など、どうしたらよいのか、わからない。

「土屋次郎です」
４月１日に、工場のロッカーで着替えをしていると、若い男性があいさつしてきた。
「よろしくお願いします」
「しばらく私が指導するように、阿仁屋さんから言われています」
「ありがとうございます」
真新しい作業着が、ゴワゴワして、なんか着心地がよくなかった。シューズは、昨日帰りに買って来た。運動靴である。
「シューズはこれを履いてください」
「決まっていますから」
聞いていなかったが、用意してくれてあったらしい。
工場へ入るのに、洗浄が必要だった。化粧品工場として、定められている。これをクリアしなければ、化粧品の製造はできない。この前見学した時には、ここは通らなかった。

「こっちへ来てください」
「おはようございます」
「今日から作業を手伝ってくれる網ノ目三郎さんです」
「よろしくお願いします」
化粧品の充填と箱詰めラインの女性達に紹介してくれた。
ラインがいくつもあった。
「今日はこのラインでお願いします」
30人くらいの女性が働いているラインである。みなさん、帽子をかぶっていて、顔がよくわからない。化粧品の工場はキレイである。
12時になると、釜は動いているが、箱詰めのラインは止まる。
「お昼に行きましょう」
「充填は動いていますけど」
「充填は止められませんので男の社員がシフトでついています」
「溜めておくのですか？」
「箱詰めのラインは２つありますので」
ラインから出るとメンドーである。ロッカーで作業着を脱いで着替える。シューズも着替える。ラインの作業着は白いツナギだが、工場に中は青い作業着だ。
女性たちも、全員着替えているのだろう。
今日も２００人くらいが一斉にお昼ごはんを食べる。ものすごい騒がしい。これでいいのだろう。やはり、ラインに入りっぱなしだと緊張する。
「チェリー株式会社の経営の近代化をするために送り込まれたと言われていますが」
「何をするのですか？」
土屋次郎は、サバの煮つけのごはんを食べながら、網ノ目三郎に聞いてきた。
「そのために工場も作業させてもらってるし、工場を把握したいと思っています」
いかにも自信あるげに言っている自分のことを、不思議に思った。
多分、そうではなくて、パソコンと同じだろう。経営管理する人材がいないがどこかにいないか。グループを見渡して、網ノ目三郎にサイコロが転がっ

ただけだろうと思う。それを、経営の近代化などと、大層な大義をつくって送り込まないといけないのが、本社というか、グループの要会社というものだろう。送り込まれた方も、何をすればよいのかわかってもいないのに、経営の近代化のために来ましたと言ってしまう。おかしなものだ。
だいたい、何もできずに、またどこかへ行くのがフツウだろう。

実習

○部品倉庫

１週間が過ぎた。
「今日は部品倉庫を手伝ってください」
つなぎに着替えなくて、倉庫につながって建てられている部品倉庫に向かった。
「工場事務から明日の生産予定と部品の使用予定が部品倉庫に渡されます」
「朝から部品倉庫から部品を出して準備します」
「夕方には所定の場所に部品を揃えます」
「あまり早く部品を出すと今日のと混在してわからなくなります」
「部品台帳に書かれている残高も時間があれば確認してください」
土屋次郎は慣れている。網ノ目三郎に、的確に指示する。
ボトルや化粧箱は、数えやすいが、化学薬品もある。網ノ目三郎にはよくわからない。化学薬品の部品の倉庫は、別になっていて、専門のスタッフがついていた。
「危険な場合もあるから、専門のスタッフに任せてください」
「出されたものを所定の場所に運ぶだけでいいです」
網ノ目三郎は不思議に思っていた。部品台帳を渡されているんだが。手書きの台帳だった。チェリー株式会社では、コンピューターは使っていないのだろうか。
ここのところ、お昼は、土屋次郎と一緒である。子どもがいるとはいえ、まだ若い土屋次郎と網ノ目三郎が２人でお昼を食べていると、たくさんの女性達の目を意識することになる。
「慣れない肉体労働だから疲れるでしょ？」
確かに疲れる。毎日アパートに帰ると、グッタリしている。それでも、お腹が空いているので、ごはんの用意をする。外食をすれば簡単なのだが、ガンバって調理をしている。少しづつ、包丁の使い方も慣れてきている。昨日は、マーボ豆腐をやってみた。お店で食べるほどおいしくはないのだが、

けっこう食べられると、自分では思う。どこまでやれるかやってみようと思っている。けっこう楽しい。
「部品台帳はコンピューターではないのですか？」
「前にコンピューターを使ってやったのですがグチャグチャになって止めました」
「そんなに部品の数が多くはないのにカッコだけでコンピューターを使ったんです」
「グチャグチャってなんですか？」
「数がグチャグチャになって」
「手で管理した方が正確ですか？」
「ええ」
「伝票もないのですか？」
「前はあったのですが整理できなくて止めました」
「今は工場事務がつくってくれる生産予定と部品払い出し予定表ですべてやっています」
「そこに部品残高も書かれていますし」
「部品の発注はどうしているのですか？」
「工場事務が部品在庫に注意していて購買に知らせます」
網ノ目三郎はお昼からも部品を倉庫から運び出す作業を行った。多分、今日は筋肉痛になる。
帰りにちょっと気になって、バスに乗ってみることにした。西条朋子の仕事は部品倉庫とどう繋がっているのか知りたくなった。
「いいですか？」
今日も、西条朋子の隣の席は空いていた。多分、工場の女性たちは、西条朋子には近づきがたいのだろうと思った。だから、隣の席が空いている。
「今日は部品倉庫から部品を現場に準備する作業をやったのですが」
「西条さんの仕事とどう係っているのですか？」
「わたしは部品の仕入れ価格を１円でも安くすることが仕事だと思っています」
「メーカーさんにお伺いして、コストダウンなんかの相談もします」
「西条さんがゼンブやっているのですか？」

「課長ですから」
「部下の方が何人かいらっしゃるんだ」
「そうです」

○千鶴
翌日は、工場の棟が違って、セッケンをつくる棟だった。
「今日は網ノ目三郎さんが手伝ってくれますのでよろしくお願いします」
朝礼の時に、このラインの責任者が、土屋次郎に、網ノ目三郎を紹介するように促して、土屋次郎が網ノ目三郎を紹介した。
「どうぞよろしくお願いします」
網ノ目三郎は、言葉少なくあいさつをした。網ノ目三郎のことは、うわさがたくさん流れていて、あまり、自分で宣伝する必要がないことをわかっていた。
土屋次郎は、この棟でも、顔が効いていた。そして、網ノ目三郎にいろいろ指示をした。網ノ目三郎は、土屋次郎がいなければ、自分が何をすればいいのか何もわからない。
「すみませんこっちを手伝っていただけますか？」
まだ10代ではないかと思われるような女性が網ノ目三郎に言った。
「どうぞ」
土屋次郎が手伝うように言った。
セッケンは、最後の仕上げは、人の手でキレイに仕上げることになっている。
「チズルさんのようにはできないけど」
土屋次郎が言った。
「今日はここに１人足りないから１日やってもらっていいですか？」
チズルと呼ばれる女性が、網ノ目三郎に言った。
仕上げはチズルと呼ばれる女性がやるのだが、その前に、粗い仕上げをする担当である。
「チズルさんお昼を案内していただけますか？」
網ノ目三郎がチズルという女性に言った。

「わかりました」
網ノ目三郎は、チズルという女性の案内がなくても、食堂でごはんは食べられる。どう言っていいのかわからない。そのままにした。
鳥肉そばだった。
「あなたキレイだな〜」
網ノ目三郎は思わず言ってしまった。工場の中にいる時からキレイだと思ってはいたが、食堂に来て帽子を脱いだりすると、更にキレイだった。
聞こえているのかいないのか、よくわからない態度だった。
「おそばが大盛りなので少し移していいですか？」
チズルは、網ノ目三郎のことばを待たずに、自分のおそばを網ノ目三郎のザルのような器に移した。
「網ノ目三郎さんは独身ですか？」
「ええ」
「何歳ですか？」
「27です」
鶏肉そばがおいしかった。
「チズルさんは苗字はなんというのですか？」
「苗字です」
「千鶴です」
千鶴みみと言うらしい。
「まだ10代にしか見えないけど」
「去年高校を卒業してここで働いています」
19歳だと言った。
「仕事は楽しいですか？」
「仕事ですから楽しいとかありません」
「何か楽しいことが他にあるんだ」
「わかりません」
網ノ目三郎には不思議だった。工場の大部屋事務室の隣に、化粧品開発室のような部屋があって、スーツ姿のキレイな女性が何人かいた。モデルのようなこともやるのだろうか。美容指導もやるのだろうか。
千鶴みみの方がキレイだと思った。

「網ノ目三郎さんはチェリーの社員ですか？」
「親会社から出向しています」
「エライんだ」
「ゼンゼン」
「何をしに来ているのですか？」
「わたしの手伝いじゃないでしょ？」
「チェリー株式会社が立派な会社になるように」
「指導に来ているのですか？」
「私が勉強してるのかもしれないけど」
「千鶴さんはバスで見かけないけど」
「わたし車が好きなので」
網ノ目三郎は、その日は、終日千鶴の手伝いをした。仕事中はあまりしゃべらない。

○品質
「早くに来てもらってすみません」
山上一郎は８時に社長室で待っていた。秘書から８時に待っているから来てくれないかとの伝言があった。工場実習をしていることを知っている。
「何か困っていることはありませんか？」
「チェリー株式会社は、一時のような勢いがなくなっていて、儲けも少なくなってきています」
「いま何かをしなければならないと思うのですが、誰もそれがなにかわかりません」
「コンサルタントもたくさん入れてみたのですが、うまくいきませんでした」
「はっきり言って、網ノ目三郎さんが、打開してくれるかどうか、わかりません」
「チェリー株式会社に骨を埋めるつもりでガンバっていただきたいと思います」
網ノ目三郎は、親会社の経営管理室にいた。チェリー株式会社の経営実態

は、自分なりに、分析をしていた。ここ５年くらい、売上は、徐々に減っている。利益も徐々に減っている。親会社からの界面活性剤の仕入れも少なくなってきている。
どこかで活気を取り戻さないとこのままでは難しい局面を迎えそうである。
山上一郎には、はじめて会った。39歳である。悪人には見えない。経営センスがないようにも見えない。経営学を学んだばかりの網ノ目三郎には、経営のセンスなどということばは、まだ使い慣れないのだが。

１週間後、工場事務室の隣にある、品質管理室を手伝うことになった。多分、山上一郎が指示したと思う。なぜ品質管理なのか、よくわからない。
「佐藤寛治です」
品質管理の課長である。60歳だ。どうしてチェリー株式会社は、高齢の管理者が多いのだろうか。
「峰永俊夫です」
45歳くらいの、現場での品質にウルサそうな男の社員に連れられて、現場を回って、品質管理の作業を手伝った。
「ロット別にシャンプーであったら、何を検査するか決まっています」
峰永俊夫は、その一覧表を見せてくれた。一覧表は、エクセルだった。品質管理では、パソコンが使われている。チェリー株式会社の品質管理が優れていることは知っていた。山上一郎は、それを網ノ目三郎に見せようとしたのだろう。
「４時から品質管理の勉強会をやります」
若い女性が４名いた。峰永俊夫が講師だった。もちろん、網ノ目三郎は品質管理のことはよくわからない。統計学の世界なのだと思いながら聞いていた。確率を計算して、このロットの不良の判定をしている。いいではないか。
着替えをしている時にバスが出た。バスに乗るつもりはなかった。歩いて帰ろうと思っていた。
４月の中旬である。25分くらい歩くことになるが、なんでもない。
10分くらい歩いたところで、クラクションが鳴った。
千鶴だった。女性らしい軽自動車に乗っていた。

「送って行きます」
なぜだか、断れなかった。ホントは、歩いていたかった。
「歩くの好きなんですか？」
「ええ」
「ジャマしました？」
「そんなことありません」
「曲がるとこあったら早目に言ってください」
「次の信号左です」
「スーパーマーケットに寄って行くからここでいいです」
「自炊しているのですか？」
「ええ」
「買物に一緒に行ったらジャマですか？」
千鶴は、入口に近い所に車を止めて、一緒に、スーパーマーケットに入ってきた。
「ずっと自炊しているのですか？」
「まだ１カ月にもなっていません」
「今日は何をつくるのですか？」
「お好み焼き」
こんなところを知っている人に見られたらヤバイのではないかと、網ノ目三郎は考えてしまう。網ノ目三郎がヤバイのではなくて、キレイな千鶴がヤバイのではないかと思った。
「小麦粉はあるのですか？」
小麦粉など、はじめて買う。
「強力粉と薄力粉を買って半々にして使うといいです」
インターネットを調べて知っていたのだが、「そうします」と言って、強力粉と薄力粉をカゴに入れた。
「それじゃ〜おいしいお好み焼きを食べてください」
そう言って、千鶴は、走り去った。あまり、人目も気にしない人らしい。

○５月の連休明けから営業実習

「５月の連休明けから営業でいいですか？」
横辰八郎から電話がかかってきた。１カ月の工場実習を終わろうとしていた。やはりやってよかった。人を知ったことが、何よりだった。
チェリー株式会社は、工場を運営している。習慣上、長期の休みをとる。11連休になるらしい。網ノ目三郎は、今年は、何も予定をしていない。11日もアパートに籠っていたら、カビが出てきそうである。
親会社の経営管理室から電話だった。まだ工場のラインを手伝っている。
「チェリー株式会社が今月末の支払いをジャンプしてくれと言ってきた」
「１カ月で１億２千万円だ」
「何か気がついたことはないか」
網ノ目三郎には、何もことばがなかった。４月工場実習で、５月営業実習である。まだ、何も掴んでいない。それよりも、何事もなく動いているチェリー株式会社のように思える。今月末に１億２千万円が揃えられないなど、想像もできない。いままでも何度もあったことだろうか。
「せっかく送り込んでいるのだから」
小言を言われたが、網ノ目三郎には、何もことばがなかった。チェリー株式会社でも、ほんの少しの人しか知らないだろう。

４月の後半から、11連休になった。網ノ目三郎は、勉強することにした。全く気がつかなかったが、１億２千万円の都合がつけられなかったのだ。いくらなんでも、親会社でも、急に言われても困る。銀行はどうなっていたのだろうか。何か事故があって、急に異変が生じたとしか思えない。42%も資本が入っているのだ。こんなことがあるようでは信用できない。人が信用できない。山上郁夫と山上一郎の親子が信用できない。
しかし、残念だが、網ノ目三郎は、ほんの少し前に、やっと、夜の学校を卒業した。会計や経営は、まだよくわからない。網ノ目三郎は電気技師である。しかし、電気屋だとは言っておれなくなった。
もっと資金繰りなんかも勉強しておけばよかったと思った。５月は営業実習である。５月に、またジャンプしても、網ノ目三郎は、何もことばがないだろうと思った。
会社というものが、こんなに簡単に手を挙げるものだとは思わなかった。こ

れでは、どうにでもしてくださいと言っているようなものだ。
５月３日だった。必死になって勉強しているのだが、経営などというのは、生き物のようで、掴みにくい。
疲れて晩ごはんを食べに出ようと思った。
大阪風の揚げモノのお店である。少し暑くなってきて、ビールもおいしい。
「いらっしゃいませ」
「これはお店からのサービスです」
網ノ目三郎は顔を見上げて驚いた。千鶴だった。どうしてここでも働いているのか聞きたかった。しかし、忙しそうだった。千鶴のことは、ずっと、浮かんではこなかった。工場実習で１日手伝っただけだ。とてつもなくキレイだと思う。いま来たが、キレイだ。19歳で、チェリー株式会社の工場で働いていて、５月３日に、揚げモノのお店で働いているのだ。さっぱりわからない。
お店は混んでいる。話しもできない。
１回来ただけで、千鶴は店には現れなかった。

この連休はながかった。５月９日になっていた。網ノ目三郎は、ほぼ、アパートに籠っていた。
「１億２千万ジャンプしてくれだけど何かあったのか」
自分がどうすればよいかわからない。とにかく、勉強しないといけない。
「おはようございます」
網ノ目三郎は、８時10分に営業部に行った。大部屋事務室の隣にある。熱海庄司のところに行ってくれと言われていた。熱海庄司は、営業管理課長である。
８時30分から朝礼があった。
「今日から営業部の実習をしていただく網ノ目三郎さんです」
「親会社からチェリー株式会社の経営の近代化のためにおいでになっています」
「ジャマになるかもしれませんが、どうぞよろしくお願いいたします」
網ノ目三郎は短いあいさつをした。みんな、網ノ目三郎のことを、よく知っているようだ。

「チェリー株式会社の売上のほとんどは、通信販売ですが、一部は、工場施設を使って、ＯＥＭ商品もやっています」
「これは前期の売上実績です」
網ノ目三郎は、親会社の経営管理で、過去のチェリー株式会社の実績は、ゼンブコピーしていた。しかし、知っているとは言わなかった。
「ここ５年の販売実績は、このように、横ばいというか落ち込んでいます」
「あとで、マーケティングの部屋にも案内します」
「新製品がことごとく失敗しています」

○マーケティング
「前野元治と申します」
「マーケティングの責任者をやっています」
マーケティングの課長である。45歳くらいだろうか。
「化粧品の製造販売をしているので研究とか開発とかあるのかと思いました」
「昔はあったのですが失敗ばかりして止めました」
「いつからマーケティングになったのですか？」
「７年前です」
営業成績が横ばいになったのは５年前である。マーケティングになってから成績が良くないことになる。網ノ目三郎は、マーケティングのことなど、さっぱりわからない。もちろん、研究や商品開発のことなど、ゼンゼンわからない。それでも、マーケティングになってから営業成績が良くないのだと、わかる。
「山上一郎さんは、マーケティングが得意なのですか？」
前野完治はムッとしたようである。親会社から来ているとはいえ、網ノ目三郎が、Ｎｏ２の山上一郎を、さんづけにしたからだと思った。
「山上専務は、マーケティングでは、業界でも著名な方です」
前野完治は、山上一郎の配下であることがわかる。どう考えても、マーケティングが良くないのに、山上一郎を褒める。営業やマーケティングに経験のない網ノ目三郎にも、このおかしさがわかる。

網ノ目三郎は、自分の意見は何も言わなかった。
「お昼から新しい化粧品のパッケージを手伝ってください」
須藤百合子がやってきた。20代の前半だろうか。パッケージデザイナーぽい服装をしていた。マーケティングの人は特別に、制服ではなかった。
「一緒でいいですか？」
千鶴がお盆を持ってやってきた。ニンニクの入らないギョーザライスを持っていた。
「どうぞ」
「揚げ物おいしかったですか？」
「あなたがどうしてあそこで働いているか不思議でした」
「お母さんと２人だから働かないと食べていけません」
「お母さんは働けないのですか？」
「今は入院しています」
千鶴は、こんな話はしたくないという顔をした。
「今日ピザを自分でやってみようと思って昨日研究したんだけど」
「やったことあります？」
「何を自分でやるのですか？」
「生地とピザソース」
「まだ自炊はじめて少しなんでしょ？」
「そんな難しいことやらなくても」
「インターネット読んでたらおもしろくなって」
「じゃ〜帰りに玄関のとこで待っててください」
「買い物だけ一緒に行きます」
千鶴のことがまだよくわかっていなかった。
「パッケージがどのようにできているか話した方がいいですか？」
「メンドーでしょうけど実習なので」
須藤百合子は、パッケージのでき方を話してくれた。パッケージを手伝うことになっていたのだが、網ノ目三郎には、須藤百合子を手伝うことなど、何もできそうもなかった。せいぜい、コピーを頼まれるくらいのものだと思った。
「印刷会社に行きますけど一緒に行きますか」

「デザインはゼンブ自分でやっているのですか？」
「わたしが担当している商品は自分でやりますけど、あとは、ゼンブ外部のデザイナーです」
「須藤さんしかデザイナーはいないことですか？」
「いるけど専門のデザイナーじゃないと難しいです」
須藤百合子は、会社の車を運転して印刷会社に出向いていた。
「さっき須藤さんのデザインを見ましたけど素晴らしいと思いました」
「まだわたしの案ですから」
「どういうことですか？」
「熱海課長と山上専務がお決めになるから」
「修正を指示されるのですか？」
「コンセプトが変わったりします」
須藤百合子と網ノ目三郎は、少し遅れて帰ってきた。玄関で待っててくださいと言われていた。網ノ目三郎が玄関に行った時には、バスは出ていた。すぐに、千鶴の軽自動車がやってきた。
「少し遅れて帰って来たので心配しました」
「向こうから見てました」
千鶴は、網ノ目三郎が少し遅れて須藤百合子と帰るのを見ていたらしい。
「強力粉と薄力粉はあるのですか？」
「あれから使ってないので」
お好み焼きを食べた時に使って以来である。ごはんに豆腐や納豆などというごはんが簡単でよい。ピザなど、確かにメンドーだ。
「ピザ生地だって売ってますけど」
「せっかく研究したから」
網ノ目三郎は、メモを取り出して、見ていた。
「ドライイーストはこっちです」
網ノ目三郎は、インターネットからメモしていた。網ノ目三郎はプリンターを持っていない。お金がないのではなくて、ペーパーレスをやっているのだ。ドライイーストをどう使うのか見ていた。
「どれがいいんだろう」と聞こうとした。
千鶴は、さっさと、網ノ目三郎が持っていたカゴに、ドライイーストを入れ

た。選択もしなかったように思う。トマトを買おうと思った。
「トマトはこっちにあります」
野菜売り場とは違うところへ行った。缶詰で98円だった。
インターネットはトマトになっていた。缶詰ではおいしくないかもしれないと思った。
「缶詰の方が安くておいしいんです」
「バジルがあった方がおいしいから」
「ソーセージも」
千鶴は、自分で勝手に買物カゴに入れていった。
「このチーズ腐っちゃうから使わないものは冷凍室に入れてください」
「もしうまくいきそうもなかったら電話をしてください」
簡単にケータイの番号を網ノ目三郎に伝えた。
電子レンジでピザなどが焼けることなど知らなかった。粉の計量などもキチンとやった。生地を放置する時間も、書かれてあったとおりにした。これからは、日曜にやろうと思った。生地を放置しないといけない。生地が膨らまないらしい。21時になって、やっと、焼くことができた。ピザソースは、意外に簡単だった。ニンニクを忘れたと思ったのだが、買い物袋には入っていた。千鶴が入れてくれたのだろう。
生地は一度につくって冷蔵しておけと千鶴が言った。４００ｇになった。３００ｇを３袋に分けて冷蔵して、１００ｇをピザにした。正直、お店のピザの方がおいしいと思った。しかし、そんなに劣るものではない。なによりも、安い。千鶴がどんどんカゴに入れていったものゼンブを加えても、たいした金額にならない。
「おいしくできました、どうもありがとう」
網ノ目三郎は、千鶴にお礼の電話をした。千鶴の状況がわからない。お礼だけ言って、電話を切った。

○通販外注先
５月16日になった。マーケティングから、通信販売をやっている部署の実習になった。ここは、外注先である。チェリー株式会社ではない。どういうわ

けで全部署が外注先になっているのかわからない。
「前川芳則と申します」
「ご存じかも知れませんが、山上専務の大学の後輩です」
網ノ目三郎は、ゼンゼンご存じではなかった。
「山上専務の大学の後輩です」
ずっと、こう言って暮らしているのだろう。確かに、山上一郎は、次期のチェリー株式会社の社長と目されている。しかし、42%もの株を親会社に握られている。そんなに簡単でもないだろう。
「しばらく、お客さまとの対応を手伝っていただきます」
前川芳郎は、そう言って、安藤静子を呼んだ。多分、40歳代の女性である。前川芳則の名刺には、社長と書かれてあった。安藤静子の名刺には部長と書かれていあった。
この外注先とチェリー株式会社の決済はどうなっているのだろう。誰に聞くべきなのか迷った。
「わたしたちはチェリー株式会社の通信販売を代行していますので、名刺をもう１つ持っています」
そう言って、安藤静子は、もう１枚の名刺を出した。チェリー株式会社安藤静子になっていた。課長である。
「電話を受ける時も、チェリー株式会社の社員のつもりで受けます」
網ノ目三郎はパソコンも得意だった。売上実績の資料をつくるように言われた。けっこうタイヘンな作業だった。黙って、終日作業をした。
夕方、歩いて帰った。歩きながら、柳株式会社は、どうなっているのか調べないといけないと思った。
網ノ目三郎は、隠し事のない人である。自分がそうだから、他者のことも、あまり気にせずに、なんでも聞いてしまう。しかし、柳株式会社のことは、なにか、聞きづらい。なんだろうと思った。
「ちょっと教えていただきたいのですが」
「チェリー株式会社はどうして自分で通信販売の仕事をやらないで柳株式会社にやってもらっているのですか？」
８時10分に来て、前川芳則に聞いた。
「チェリー株式会社が通信販売もはじめようとした時にノウハウがゼンゼン

なかったので、我々に代行してくれと言ったのです」
「７年前です」
「チェリー株式会社は一般店での販売を止めましたので、チェリー株式会社の営業を、柳株式会社がやっている状態になったのです」
「柳株式会社はどうなっているのですか？」
前川芳則は、柳株式会社の会社案内を出してきた。
１００％山上一郎の出資だった。資本金は３０００万円と少ない。
「山上専務のセンスです」
「通信販売専門になってチェリー株式会社は生き残れました」
前川芳則は、多分、チェリー株式会社が、４月末に、親会社に１億２千万円のジャンプを申し入れたことなど知らないのだと思った。柳株式会社は安泰なのだ。チェリー株式会社への功績も大きい。
網ノ目三郎は、パソコンの資料をつくりながら、これは、けっこうメンドーなことになると思った。親会社は、このことを、どのくらい知っているのだろう。ひょっとして、通信販売など難しいので外部に委託していると思っているかもしれない。
これは、そういうことではない。柳株式会社がチェリー株式会社のキモである。チェリー株式会社が柳株式会社にいくら手数料を支払っているのかわからない。この手数料次第では、おかしなことになってしまう。山上一郎に資金をキチンと残せるようになっているのだろう。チェリー株式会社は、親会社に支援してもらえばグッドである。現に、網ノ目三郎も、親会社に派遣されて来ている。チェリー株式会社の経営の近代化を図ろうとしている。
前川芳則は簡単に答えてくれた。
多分、良いことをやってきているという感覚が、前川芳則にはあるのだろう。もし、柳株式会社が通信販売を請け負っていなければ、チェリー株式会社は潰れていたかもしれないと考えているだろう。
営業の責任者は、山上一郎の下に、営業部長がいる。一般店で売っていた化粧品の時代に、一般店への営業をやっていた奥野道夫である。営業部長だ。
「私の時代は終わりました」
「もし通信販売に乗り出さなかったらチェリー株式会社は危なかった」
奥野道夫の空いている時間に、話しを聞いた。奥野道夫も、山上一郎のやっ

た通信販売への移行に、感謝をしている。
しかし、ここ５年も売上が低迷していることは、また別の話しだろう。今月１億２千万円をジャンプしてくれと親会社にお願いするのも、別の話しだろう。もう、通信販売の会社になって７年も過ぎているのだ。

○商品倉庫
「明日から１週間、商品倉庫の手伝いをお願いします」
熱海庄司から電話がかかってきた。
工藤保という課長のところへ行ってくれであった。商品倉庫は、営業部にあった。ほとんどは、通信販売用の商品をピッキングしやすいように保管しているのだろうと思っていた。
夕方、工藤保のところへ出向いた。
50歳くらいの口数の少なそうな男だった。
「作業着は、これにしてください」
「重労働になるかもしれませんが」
「１週間の予定です」
雨宮伸治を呼んでくれた。
「よろしくお願いいたします」
翌日の朝礼で、雨宮伸治は、網ノ目三郎をみんなに紹介してくれた。雨宮伸治は45歳くらいのガッチリした身体をしている。
「今日から１週間商品倉庫を手伝ってくれる網ノ目三郎さんです」
「よろしくお願いいたします」
網ノ目三郎のあいさつは、ますます短くなっていった。
網ノ目三郎は驚いてしまった。
チェリー株式会社は、そんなに大きな化粧品の会社ではない。しかし、自動倉庫になっていた。工場の少し老朽化した建物と比較すると、いかにも、新しい感じがする。少し違和感がある。
網ノ目三郎は、今日は、生産した化粧品を、自動倉庫に納める仕事を行うことになっていた。多分、自動倉庫の管理者がいて、これはどこに納めてくれと指示が来るのだろう。その指示に従って、エレベーターのように、自動倉

庫を呼び出して、商品を納める。
「はじめまして斎藤倉庫のものです」
網ノ目三郎は、一瞬、なんのことかわからなかった。
「商品倉庫の管理は、斎藤倉庫がやらせていただいています」
「斎藤幸雄と申します」
65を越えているだろうか。実直そうな男だった。
「チェリーさんの商品倉庫は、自動倉庫に納めるまでです」
「その後の自動倉庫の管理や販売のための商品のピッキングは斎藤倉庫がやらせていただいています」
網ノ目三郎は、おかしいと思っていた。朝の朝礼では、４人しかいなかった。４人で、この自動倉庫を運営しているのかと思った。
「斎藤さんの資本ですか？」
「山上一郎さんです」
「資本金はいくらですか？」
「８千万円です」
「私は倉庫会社を定年退職して山上一郎さんに引っ張られました」
「ノウハウは持っています」
斎藤幸雄が誇らしげに網ノ目三郎に話すのを聞いていて、ヤバイと思った。
これは、親会社にとって、多分、まずいことだろう。
親会社が、チェリー株式会社に資本を入れるきっかけになったのは、界面活性剤などの、化粧品の原材料の支払いができなくなったからだと聞いている。資本金で補った。
３日後だった。網ノ目三郎は、斎藤倉庫の事務所に行った。今日から、自動倉庫の管理や、商品のピッキングを手伝うことになっていた。作業着もチェリー株式会社のものである。
「おはようございます」
大野貢という25歳くらいの若い男がやってきた。
８時30分になって朝礼があった。
「網ノ目三郎さんです」
「今日から商品倉庫と商品出荷を手伝ってくれます」
「よろしくお願いします」

網ノ目三郎のあいさつは、ますます短くなる。
「これは、今日出荷する商品の合計です」
柳株式会社のハンコが押してある。コンピューターで集計されてある。チェリー株式会社は、化粧品のメーカーである。商品の数が、そんなに多いわけではない。こんな立派な自動倉庫が必要なんだろうかと思ってしまう。しかし、これは、チェリー株式会社の資産ではない。
今日出荷する商品を、すべて自動倉庫から出してしまう。そして、隣の出荷作業場へ運ぶ。出荷作業場は、また工場のようになっている。通信販売である。１人１人、注文いただいものが異なる。送付箱を使用する。さっき朝礼の時にはいなかったが、女性たちが７人もいる。手詰めである。これは、終日作業になるらしい。
食堂でお昼を食べている時はわからない。柳株式会社と斎藤倉庫株式会社で47名の社員がいる。全員、チェリー株式会社の作業着を着ているので、よくわからない。

○販売促進
「販売促進の仕事も営業部にあるのですが実習してみますか？」
熱海庄司から電話があった。商品倉庫の仕事に疲れたころだった。
「明日から１週間お願いします」
「南良子を訪ねてください」
ひょっとすると、販売促進の部署も、チェリー株式会社ではないかと思った。
翌日、８時10分に、南良子の机に向かった。
「おはようございます」
「はじめまして」
販売促進の部屋は、全く異なった色彩をしていた。制服も黒っぽいスーツだった。デパートの１階で、化粧品を販売している女性たちのようである。南良子は40は過ぎていると思うが、よくわからない。独身かどうかもよくわからない。
「今日から１週間ほどわたしたちの仕事を手伝ってくださる網ノ目三郎さん

です」
「よろしくお願いします」
「あいさつはそれだけですか？」
「ひょっとしてみなさんのジャマになるのではないかと怖がっています」
「よろしくお願いいたします」
女性ばかり７人のチームである。
こういう仕事は、網ノ目三郎は苦手である。１週間どうやって過したらいいのか気が重い。
「電話で美容相談をされることが多いのですが、出かけて美容相談をする場合もあります」
「お昼から一緒に行きますか？」
浜松のお客さんらしい。固定客で、チェリー株式会社の化粧品のファンらしい。
「車で行きますから１時に玄関で待っていてください」
「お昼まで美容器具がありますから説明を受けてください」
肌の水分を計測する測定器らしいものがあった。
「最近の化粧品は、科学的にやらないと納得してもらえないことがあります」
「どうですか？ピザおいしくできていますか？」
千鶴がうなぎドンブリを持ってやってきた。
「ラーメンが簡単なのでラーメンばかり食べています」
「晩ごはんですよ？」
「ラーメンとうどんが多いです」
「今日玄関で待っていてください」
「お昼から浜松に行くから遅くなるかもしれない」
「そしたら電話をください」
「ラーメンにうどんばっかりだと身体おかしくなります」
確かにそうだと思う。ピザはおいしいのだが、生地をつくるのがメンドーだ。ピザソースもメンドーだ。
「ピザソースどうしたのですか？」
「冷蔵庫です」

「まだ生きていたらナポリタンにするといいです」
「生きていたらって何ですか？」
「ダメになってるかもしれない」
何日も経っている。
「ごはんは炊かないのですか？」
「炊けます」
千鶴は、笑ったように思えた。
高速を飛ばすと、浜松まで、そんなに遠いわけではなかった。
パン屋の奥さんだった。
「いきなりいいオトコに来られちゃうと困るな〜」
肥り気味の奥さんは、冗談を言いながら、近所の奥さんを電話で集めた。南良子の美容教室のようなことがはじまるらしい。
４人の奥さんが集まって、南良子の話しを聞きながら、おしゃべりをはじめた。網ノ目三郎には、よくわからない。専門用語ではないかと思われることばも平気で出てくる。
「南さんはチェリー株式会社の社員ですか？」
帰りの車の中で、聞いてみた。
「私たちは、柳株式会社の社員ですが、こういう仕事の時は、チェリー株式会社になります」
「名刺を２枚持っているんだ」
「そうです」
やっぱり、予想通りだった。販促のような仕事は、チェリー株式会社には似合わない。お客さんではなくて、チェリー株式会社の社員は、そう思っている。
困ったことになったと思った。
「また少し遅くなりました」
「向こうから見てました」
「電話がないから多分遅くはならないと思ってました」
千鶴は、どういうわけか、兄にでも話すように、網ノ目三郎に、気軽に話す。誰にでも、こうなのかもしれない。すごいキレイである。これでは誤解される。網ノ目三郎だって誤解しそうだ。

千鶴は、どんどんスーパーに入って行って、鶏肉を買った。そしてタケノコを買った。包装されたのを買うのだと言った。今の時期は、生のタケノコも出ている。
「茹でないといけないから」
買ったものは、それだけだった。
千鶴はメモ用紙を取り出して、調理の仕方をメモした。
「ごはん炊けるんですよね」
「フツウのようにごはん炊けばいいから」
「塩忘れるとおいしくないから」
「醤油も」
「出来上がったらよく混ぜて」
「ダシありますか？」
干しシイタケの袋を買った。
「手で小さくちぎって入れるんです」
網ノ目三郎は、メモした。
「豆腐買ってきてください」
「豆腐も入れるのですか？」
「そうじゃなくておかずです」
「お味噌汁はどうしているのですか？」
「自分でやっています」
「ダシ入り味噌買っています」
千鶴は乾燥ワカメを買った。
「お味噌汁がおいしいとごはんがおいしいから」
なるほどとは思った。
「なにかあったら電話をください」
千鶴は、そう言って、網ノ目三郎を車から降ろした。お茶でも飲んで行かないかと言いたいのだが、急いでいそうだった。いつも千鶴は急いでいる。確実に断られる。
「もしもし」
「タケノコごはんおいしくできました」
「どうもありがとう」

「どういたしまして」

会話は、それだけだった。

山上一郎の誘い

○経理

「今月もジャンプしたんだけど何かあるのか」
網ノ目三郎に親会社の経営管理室から電話があった。
網ノ目三郎には、なにもことばがない。表面上は、平穏に流れている。多分、支払いを延ばしてもらうことなど、誰も知らない。売上が極端に落ちているということでもない。
このまま気の利いた返事をできなかったら、交替の話しになるかもしれない。送り込んでいる意味がない。
網ノ目三郎は８時10分に西野八郎田の机に向かった。西野八郎田は経理部長である。今日から１週間、経理の仕事を手伝うことになっている。
「今日から１週間経理の仕事を手伝っていただける網ノ目三郎さんです」
「よろしくお願いします」
網ノ目三郎のあいさつは短くなってきている。
「先に取締役がお話があるようですから」
もともと。網ノ目三郎はこの部屋に座っている。有吉里子の隣に座っている。
「実習しているようだけど」
「経営の近代化をどうするのですか？」
「提案させていただこうと思っています」
「お金がかかるんですか？」
「先月も今月も１億２千万円のジャンプをお願いしていて苦しくなっています」
網ノ目三郎は、峠下冴子が、自分からジャンプのことを話すとは思えなかった。
峠下冴子は、網ノ目三郎がこれからやろうとしていることに、お金がかかることを警戒している。経営の近代化など、すごいお金がかかると思っている。

「だいたい、何をしようとしているの？」
峠下冴子は、60歳だと思うのだが、センスの良さそうな衣服に、少し威圧的な話しぶり、どれをとっても、オンナ経営者という感じである。色香もある。
「どういう話しでした？」
西野八郎田は心配なのだろう。
「１億２千万円の話しも聞きました」
みんな聞いている。経理の６人が、１億２千万円のジャンプを知っているのかどうか、わからなかった。
「試算表を見たいのですが」
「どうぞ」
西野八郎田は、試算表を差し出した。３月末の試算表である。
「最新ですか？」
毎月月末しかやっていません。
日付を見た。15日である。
「４月は現在集計中です」
「あなたの親会社がうるさくて」
月次決算を要求しているのだが、15日にならないと、試算表が上がらないのだろう。月次決算も15日ということになる。資金繰りは別の方法でリンクしているのだろう。
「私は経理の実習が終わったらどこへ行くことになっているのですか？」
久しぶりに有吉里子とお昼を食べていた。煮物に漬物だった。
「わたしは何も知りません」
「経理の他にどこがあるのですか？」
「人事総務」
「社長秘書の志村直子ですが」
「３時に時間を空けられますでしょう」
「山上がお話ししたいと申しております」
「わかりました」
社長秘書がいるとは知らなかった。

○三枝コンピューター

「網ノ目さんの経営の近代化が、もっとコンピューターを利用することにあるのだろうと思っていました」
「こちらは三枝コンピューターの三枝伸治社長です」
網ノ目三郎は、全く考えてもいなかった。驚いた。
「社内を回って気がついたと思うのですが、人が多い」
「会社の売上規模に較べて人が多いのです」
「通販や倉庫は別の会社にしてあってコンピューターも駆使しているので効率が保てているのですが」
「チェリー株式会社は昔の雰囲気が残っています」
「つくることが販売の時代のことです」
「一時期、そういう時代もありました」
「ですから、チェリー株式会社にとって、生産は大事にされていじれない雰囲気があるのです」
「もし通販を私がやらなかったらチェリー株式会社は危なかった」
「できる範囲で効率を追求してきました」
山上一郎の話しは、筋が通っていると思った。いくら社長でも、できることとできないことがある。確かに、柳株式会社はコンピューターが有効に使われていると思った。斎藤倉庫も、コンピューターがなければ自動倉庫を動かせない。
「もしチェリー株式会社の経営の近代化でコンピューターの駆使を目指すのでしたら、三枝さんを使ってもらいたい」
網ノ目三郎には、なにもことばがなかった。まだ、コンピューターの駆使という手段さえも思いついていなかった。
「三枝さんはコンピューターの利用のことでは著名な方なので三枝さんに案を提案させて欲しいのです」
「資金のことですが、初期費用は親会社の方で補助していただきたいと考えています」
網ノ目三郎は黙っていた。山上一郎の話しは、筋が通ってはいるが、27歳の網ノ目三郎には、どうしていいかわからない。

５時近くになっていた。現金出納長を見せていただいていた。
「三枝伸治ですが」
「今日はありがとうございました」
「早速ですが、案をつくらせてもらっていいでしょうか」
「山上社長に、網ノ目三郎さんを手伝ってくれと言われております」
網ノ目三郎は黙っていた。
「まだ実習中なので」
ことばを曖昧にしていた。網ノ目三郎は、どうしたらいいかわからなかった。確かに、網ノ目三郎も、このままでは困る。２カ月も支払いをジャンプされても、何も言葉もない。経営の近代化という宿題も、何も案がない。山上一郎に、見透かされているようではあるが、助け舟かもしれないと思った。
久しぶりにバスに乗った。
いつもなのだろう。西条朋子の隣が空いていた。
「どうぞ」
「お久しぶりです」
「社内を回られているようですけど」
「そうです」
「おもしろいことはありました？」
こういう聞き方をする人はいなかった。
「そこのスーパーマーケットに寄って行きます」
そう言って。西条朋子は、網ノ目三郎の降りる駅で、一緒に降りて来た。網ノ目三郎も、今晩の晩ごはんをつくらないといけない。
西条朋子は、カゴを持って、どんどん中に入って行った。そして、野菜の売場に行って、ほうれん草やネギやタケノコなどを次々にカゴに入れていた。野菜を買いに来たらしい。
「野菜はここのが新鮮でおいしいんです」
網ノ目三郎は、野菜について、おいしいなどと感じたことはなかった。つられて、網ノ目三郎も、野菜を買った。野菜サラダに野菜炒めになるのかと思った。
「ちょっと時間があるからそこでお茶しますか？」

網ノ目三郎が言いたかったことを、西条朋子が言った。
「網ノ目三郎さんはどういう立場ですか？」
意外なことを聞かれた。
「親会社の湯本化学の立場ですか？」
「他にどういう立場があるのですか？」
「社長の立場」
「山上本部長の立場」
「チェリーの社員の立場」
「網ノ目三郎さんの立場」
「網ノ目三郎の立場って何ですか？」
「エラクなりたいだろうと思って」

○人事総務

網ノ目三郎は、１週間後、人事総務に来ていた。来ていたといっても、もともと、人事総務に席がある。就業規則などの規約集を見せてもらった。５センチくらいある。網ノ目三郎はチェリー株式会社の社員ではないので、規約集をもらうことはないが、全員持っているのだそうだ。
「これだけの規約の変更とかどうしているのですか？」
「経営会議の議題になります」
有吉里子は、これがあるから、仕事が便利だと言った。午前中に読もうと思ったが、気がすすまない。就業規則など細かくてよくわからない。食堂の規約などもあった。社員の負担金４００円が経営会議にかけられている。細かく記されている。
「給料は手で計算しているのですか？」
「タイムカードの下に計算していきます」
少し長いタイムカードを使っていた。
「柳株式会社も同じ方法ですか？」
「お給料も同じですから」
確かに、いまどき、給与計算を手計算でやっている会社など珍しい。しかも、社員が２２８人もいるのだ。

「今日少し時間をいただきたいのですが」
三枝伸治から電話がかかってきた。
６時から会いたいとのことだった。
網ノ目三郎は、この街を、まだほとんど知らない。言われた場所も、知らない。
タクシーで行った。インターネットも、チェリー株式会社では使えない。
「ここまでお呼び立てして申し訳ありません」
まだ30代だと思のだが、大人びている。イスで狭い個室気味の居酒屋だった。
「気軽なところがいいかと思いまして」
三枝伸治は、自分でお酒をけっこう飲む人だった。網ノ目三郎は、ホットウーロンハイしか飲まない。それも２杯くらいしか飲まない。ホタルイカがおいしい。
「40人リストラしようと思います」
いきなり三枝伸治が言った。
「なんかメリットがないと湯本化学も初期費用を出してくれません」
「40人のリストラができるようなコンピューター化の案をつくります」
「網ノ目三郎さんが湯本化学で軽く見られることのないようにやりますので」
網ノ目三郎の手柄をつくってやると言っている。
翌日からまた総務人事の仕事を手伝った。
「今日社長の話しがあって全員集まるので会議室にイスを並べてください」
総務の仕事はけっこうタイヘンである。
「網ノ目三郎さんはいいです」
有吉里子は言ったのだが、実習している身である。会議室にイスを並べに行った。考えてみたら、総務の仕事なのだろう。

○購買
「おはようございます」
「よろしくお願いします」

どういうわけだか、西条朋子とは話しやすい。今日から購買の手伝いだった。
「今日から購買の手伝いをしていただける網ノ目三郎さんです」
「よろしくお願いします」
「ジャマかもしれませんがガンバリます」
気がつかなかったが、12人もの人がいる。
仕入先ごとに担当が決まっている。仕入先から送られてきた伝票と品物と一緒に送られてきた送り状とを突き合して、仕入れ台帳に記録していく。仕入先との交渉や在庫調整をする人と、台帳の記入や現物のチェックをする人に分けられている。
これはタイヘンな作業である。
「お昼から業者さんに行きますけど一緒に行きますか？」
西条朋子は、網ノ目三郎を誘った。
最大の仕入れ先は湯本化学であるが、そこへは、ほとんど行かないと西条朋子は言った。湯本化学から仕入れ価格は、山上郁夫か山上一郎が決めてくるらしい。
「いくつくらいの商品を生産しているのですか？」
いままで知っていてもいいようなことを、西条朋子に聞いた。
「１３２品あります」
「多品種少量生産で生産効率が良くありません」
確かにそうだ、仕入れの交渉も難しい。
「いつも生産ロットを小さくするように頼むのでイヤがられます」
「ここのところずっと売上が良くないんだけど」
「ダメです」
「娘たちに流行らない化粧品になってしまいました」
「どうしてこうなったのですか？」
「網ノ目三郎さんがどういう立場かわからないから」
うかつに発言はできないということらしい。網ノ目三郎にも、自分の立場を、まだはっきり話すほど、考えを持っていない。
売っている化粧品が流行らない化粧品になっていて、そのまま生産しているから売上が上がらないのだろう。

親会社も湯本化学である。若い娘のセンスを、親会社から受けることもない。
「柳株式会社には販促の人達もいて、お客さんとも直接会っていますが」
「通信販売を請け負っていると思っているから」
「商品のことには口を出しません」
「もっと売れればうれしくはないのですか？」
「いくらやっても手数料は同じですから」
「給料は変わらないからですか？」
車で西条朋子と話している時に、湯本化学の榎本順夫から電話があった。網ノ目三郎の15年くらい先輩である。
「明日行くけど」
「10時から山上さんのとこへ来てくれ」
「何ですか？」
「三枝伸治さんの提案を一緒に聞く」
網ノ目三郎は、驚いてしまった。これはなんだろう。西条朋子と行った先は、化粧品のボトルの生産工場だった。ガラス瓶である。ロットが小さいので、手で吹いている。これだと高くなると思った。ガラス工場の社長も、網ノ目三郎に話しをしたが、あまりよく覚えてはいない。
「なにかあったの？」
西条朋子が、帰りの車の中で聞いた。
「うん」
「話せないのね」
「そうだ」

○三枝伸治の提案

ホタルイカの居酒屋で聞いた通り、40名のリストラを念頭においた、チェリー株式会社の業務改善策だった。部品在庫のコンピューター化が中心だった。当然、仕入れの支払いもである。給与計算もコンピューターにする。
「工場から10名リストラしてゼンブで40名です」
「開発費に３千万円運営費に毎年２千万円かかります」

「開発費は湯本化学で負担しますが運営費はチェリー株式会社が負担してください」
榎本順夫が言った。網ノ目三郎は驚いてしまった。話しができている。３千万円ものお金を、簡単に、湯本化学が出すとも思えない。
「来週の経営管理室の会議の議題にしておきますから、三枝さんの案を具体的にして、網ノ目さんの案にして説明してください」
網ノ目三郎は、返事をしなかった。網ノ目三郎は、この三枝伸治の案には賛成できないと思った。しかし、多分、抵抗できないかもしれないとも感じていた。
「それでは、網ノ目三郎さんよろしくお願いいたします」
三枝伸治は、網ノ目三郎に深々と頭を下げた。
網ノ目三郎は、お昼を１人で食べた。気が滅入っていた。何か良くわからない。しかし、今晩、この案をまとめて具体化しなければ、自分も危なくなる。ある意味では、チェリー株式会社の近代化提案でもある。三枝伸治は、手柄を網ノ目三郎に渡すと言ったが、そういう側面もある。それでも、釈然としなかった。

○チェリー株式会社のうわさ
翌日だった。何かしら、みんなの網ノ目三郎を見る目が違っていると感じた。有吉里子に食券を渡したのだが、返事もしなかった。西条朋子は外出でいなかった。
お昼も１人で食べた。昨日も１人だった。網ノ目三郎は、一人に慣れている。なんでもない。しかし、なにかおかしい。
「今日買い物するからスーパーマーケットで待ってて」
千鶴からのケータイメールだった。
電話すればいいものを、なんでメールなのかわからなかった。どうして車に乗せてくれないのだろう。千鶴は外出しているのだろうか。網ノ目三郎は、バスに乗る雰囲気ではないことを察して、歩いて帰った。そして、スーパーマーケットで、ひき肉を買った。やったことはないが、ハンバーグをつくろうと思った。

千鶴がやってきた。カゴも何も持っていない。
「ちょっと来て」
千鶴は、２階のハンバーガーショップへ連れて行った。吹き抜けになっている一部２階である。話しは聞こえない。
「あなた40人のリストラやるために来たの？」
いきなり千鶴が聞いた。声には、多少怒りがあった。
「経営の近代化とか言うから何かと思ってた」
「みんなそう」
「社員ってこんだけしかいないんだよ？」
「小さな会社なんだよ？」
「もう２回リストラやったんだよ？」
「柳株式会社つくる時と斎藤倉庫つくる時」
「わたしはまだいなかったけど」
「もうあなたに誰も話しかけないわよ」
「いつからやるの？」
「みんな就職探さないといけないから」
「わたしもなの？」
「あなたと会うの最後だから」
「わたしがおかしく見られる」
千鶴は、それだけ話して、コーヒーも飲まないまま、席を立ってしまった。
おかしなことになっている。網ノ目三郎は、この三枝伸治案に、コメントをしたことはない。確かに昨晩遅くまで、三枝案を網ノ目案につくり替えた。パソコンの資料をつくりながら感じていた。当然経営コンサルタントだったら、立派な経営コンサルタントだ。経営改善策だ。親会社が子会社に要求することかもしれない。
コーヒーを飲みながら考え込んでしまう。ハンバーグをつくる意欲がなくなった。
翌日、余計に針のむしろのように感じる。まだ購買の実習中だ。
「業者さんに行きますけど」
西条朋子が声をかけてくれた。
そういえば、誰１人、網ノ目三郎に声をかけなくなった。時々、コーヒーを

煎れてくれる女性もいたのだが、近寄らなくなった。
「今日は紙屋さんに行きます」
パッケージの工場だろう。
「あなた山上一郎にはめられたんじゃないの？」
出発してすぐに、西条朋子が言った。
「あの人は、そういう人なの」
「自分の代わりに誰か泥かぶる人探すのよ」
「都合良く現れたのがあなた」
「はめられたんじゃなくて同じなの？」
「わたしには自分の考えを言っておかないとオンナは怖いんだから」
「はめられたと思う」
「はめられてこれに乗るとラクかもしれないと思っている」
「正直」
「どうしようもないオトコだから」
西条朋子は黙って聞いていた。
「今のウソだったら承知しない」
「オトコってバカだよね」
「知ってて乗っちゃうから」
「エラクならなきゃいいのに」
「オンナ達にこんなにバカにされてもやるんだからオトコはダメ」
チェリー化粧品で、これから話しをできるのは、西条朋子だけかもしれないと思った。みんな網ノ目三郎を無視するだろう。

○経営管理室

オトコはダメだと西条朋子に言われたとおり、網ノ目三郎は、三枝伸治案を、自分の案として、湯本化学の経営管理室の会議で話した。プレゼンテーションをした。本当は、柳株式会社にしても斎藤倉庫にしても、親会社である湯本化学対策であろうと思っている。山上一郎は、そういう男だと思っている。しかし、榎本順夫にうなづいてもらえるわけがない。
網ノ目三郎は、話ながら、この案は、経営効率を重んじる湯本化学株式会社

として当然の案だと、自分でも思っているのではないかと感じていた。
「短い時間によくまとめてくれました」
榎本順夫が言った。
神部五郎が意外な発言をした。神部五郎は経営管理室の室長である。
「こんなフツウの案をつくるために網ノ目三郎さんを派遣したわけではない」
網ノ目三郎は驚いてしまった。てっきり、経営管理室では、出来上がっているものと思っていた。榎本順夫に指示されたとおりにしなければ、自分の存在すらもなくなると思っていた。
「こんなフツウの案とはどういう意味でしょうか」
榎本が聞いた。
「チェリー株式会社では２つのことをやらなければならない」
「１つは、毎月ジャンプを依頼されることだ」
「何かがある」
「２つ目は、会社の活性化だ」
「このままで落ち込んでゼロになる」
「湯本化学が持っている42%の株も資産価値がなくなる」
「今日の網ノ目三郎さんの案は、どっちにも何もプラスにならない。
「ただのリストラ案に過ぎない」
翌日、網ノ目三郎は、チェリー株式会社で、山上一郎に報告していた。三枝伸治もいた。
「申し訳ありません」
「私のチカラが不足していました」
「どういうふうに修正すればいいのかわかりますか？」
「わかりません」
山上一郎は、憮然とした態度になった。
「たいしたことなかったな〜」
この一言で、網ノ目三郎は、もうどこにも自分の居場所がなくなったことを知った。
翌朝、網ノ目三郎は、横辰八郎に電話をした。
「すみません」

「１週間ほど休ませていただきます」

先里万丈『よろい』

○先里万丈『よろい』
「すみません」
「もう１週間休ませていただきます」
網ノ目三郎は、もうチェリー株式会社には姿を見せないといううわさは本当らしいと言われていた。湯本化学でも、もう退職願が出るかもしれないと言われていた。
網ノ目三郎は、この１週間、アパートに籠っていた。何もする元気がない。なにがふがいないのかもわからない。
顔も洗ってないしヒゲも剃っていない。買物も行かない。今日は、もう冷蔵庫には何もない。米もない。
「先里万丈『よろい』」
「玄関見て」
千鶴からの短いメールだった。１行目は意味がわからない。玄関に出てみた。小さな段ボールが置いてあった。乾燥ラーメンとニンジンとほうれん草とタマネギが入っていた。
急いでラーメンをつくって食べた。
「こんなにおいしい塩ラーメンを食べたことがなかった」
しかし、千鶴から返事はなかった。
１行目の「先里万丈『よろい』」がわからない。
ラーメンを食べると元気が出てきて、シャワーを浴びようと思った。ヒゲも剃った。久しぶりだった。おかしなものだ。自分の居場所がないと思ってしまうと、生きていられないと思うのが人らしい。もうあなたとは会わないと言って去って行った千鶴からの短いメールで、やっと自分の居場所を確認できる。
とにかく、何も考えずに買物に行くことにした。ラーメンをたくさん買ってきておこう。鶏肉と豚肉を冷凍庫に詰めておこう。お腹が空くと、人間、良くないことを考えてしまう。

今日が何曜日かわからない。
２度目の洗濯機を回している。部屋中洗濯物になってしまう。しばらく、何もしてなかった。
今日の千鶴の短いメールとラーメンがなかったならば、どうなっていただろうと思う。
夜になって、部屋中洗濯物の中で、ネットを開いてみた。先里万丈『よろい』を検索してみた。
電子書籍の書店のサイトに入った。
その夜から朝の４時まで、先里万丈『よろい』を読んだ。電子書籍からダウンロードして、読んだ。
先里万丈によると、人は、生身の自分を見ることがなくて、外側にかぶっているよろいを見るのだそうだ。よろいの立派さが、自分の立派さだと思ってしまう。他者も、自分の立派さを、よろいで見てしまう。したがって、人は、よろいを立派にすることに一生懸命になる。人に例外はないのだそうだ。
人によろいがない時期は、あかちゃんの時だけで、あかちゃんを過ぎると、次第に、よろいが芽生えるのだそうだ。
よろいの対極には愛があって、こころは、愛とよろいがシェアーしているそうだ。よろいが50だと愛は50になる。一般的に、大人は、よろいが80に愛が20ではないかと書いてある。
人が苦しいのは、よろいがあるからで、よろいの立派さを競うからだそうだ。
あかちゃんは、よろいがないから、生きやすいのだと書いてある。
朝までかかって『よろい』を読んだのだが、いまいち、理解に苦しむ。千鶴が、なぜ先里万丈『よろい』を知らせてきたのか、わからない。
多分眠ったのだと思った。
日が射していた。
先里万丈『よろい』の巻末に書かれてあった。先里万丈『愛が溢れる』をダウンロードして読みはじめた。愛のことなど考えたことがない。
お昼のラーメンを食べていた。千鶴の塩ラーメンである。鶏肉と卵を入れて野菜をたっぷり入れて、どんぶりに溢れるほどにした。

愛は、人が動く押しボタンだと言っている。人はすべて、よろいのボタンか、愛のボタンで動く、よろいのボタンは、常時押されていて、よろいのボタンをさえぎって、愛のボタンを押さなければ、愛のボタンが押されるチャンスなどないと書かれている。
「一般的に、人は、自分が動いたことが、よろいであるのか愛であるのか、理解できない」
網ノ目三郎が、三枝伸治の案を自分の案として、湯本化学の経営管理室の会議で説明したことは、愛なのかよろいなのか。
「愛の動きは生身の人の動きだから、考えて動けば、それはすべてよろいの動きになる」
明らかに、網ノ目三郎は、考えに考え抜いて、三枝の案を網ノ目三郎の案にした。
「人が育つということは、どれだけ愛によって身体が動けるようになるかに等しい」
「人間としての価値は、愛で動いている割合の高さで決まる」
「決して、収入や名誉や地位などではない」
先里万丈という人はおかしい。網ノ目三郎は、幼い時から、必死に勉強した。大学も電気工学だ。電気技師である。今は、おかしなことに、経営管理室にいるので、夜の学校に行って、会計と経営を勉強した。とにかく、必死だった。それがすべてよろいだと言うのだろうか。先里万丈は、自分の行為はムダだと言うのだろうか。
「なんなんだ」

○千鶴の秘密

「あなたはエラクなりたいだけのよろいの人」
「親会社から派遣されているよろいの人」
「だからよろいのためには何でもするダメな人」
「あなたによろいがなくなれば何もない」
夕方になって、先里万丈『よろい』『愛が溢れる』を読んだがいまいちわからないと、千鶴にメールした。夜になって、４行のメールに続いて、次のよ

うなメールが来た。
「わたしのお父さんは５才の時にお酒のケンカで殺人をして翌日自殺した」
「お母さんは働く場所にも困った」
「わたしは学校でいじめにあった」
「ごはんを食べるのにも困った」
「いまわたしを支えているのは先里万丈『よろい』」
「わたしにはよろいがない」
「わたしはラクに生きている」
「あなたのことをバカみたいに感じる」
これは、千鶴の秘密ではないかと思った。なぜこのようなことを網ノ目三郎に知らせてきているのだろうか。わたしにはよろいがないとはどういうことだろうか。
翌日、網ノ目三郎は、富士山にいた。
理由などわからない。千鶴のメールを見て、山の用意をして出た。自分にもよくわからない。５月後半だが雪山である。ピッケルはないがアイゼンはある。まだ午前３時だった。御殿場口から登った。止められるのではないかと思った。誰もいなかった。単独行である。しかし、網ノ目三郎の装備はしっかりしている。登山靴だって、ちょっとしたものだ。しかし、冬山はやったことがない。やったことがないが、今日は、どんなことがあっても、行かないといけない。
網ノ目三郎にとっての山は、ストレス解消の役割が大きかった。どうしようもなくなると、八ヶ岳に入った。しかし、今日は、まだ雪山の富士山である。冬山である。途中の小屋まで一気に登った。一度このコースを登ったことがある。最初に登山をしたのがこのコースだった。もう５年前の大学時代だった。夏の盛りにふざけ半分で登って高山病で苦しんだ。ただ、装備だけは、いつもしっかりしていた。
歩きながら、ずっと考えていた。よろいのことだ。網ノ目三郎は何度も電気技師の試験を受けた。必死になって試験を受けた。今は、電気技師が誇りである。夜眠いのをガマンして、必死になって、会計と経営の学校に通った。そして卒業した。今は、親会社の湯本化学の経営管理室から派遣されて、42％も株を持っている、チェリー株式会社に、経営の近代化のために来てい

る。
これがゼンブよろいと言うのだろうか。自分ではないと言うのか。一体自分とは何なのか。19歳の千鶴は、少なくとも、網ノ目三郎のことをバカにしている。いかにも、自分はよろいがないから人間として立派だが、網ノ目三郎はよろいがあるので、人間としてはダメ人間だと言っている。
この時期の富士山は、こんなに穏やかなのだろうか。多分違う。現に、もう少し先に行けば、雪が見えている。冬山なのだ。雪煙りは見えない。風が舞ってはいない。
不思議と、コンビニで買ったおにぎりがおいしい。お茶もおいしい。ラーメンが食べたいが、持ってきてはいない。まだ懐中電灯が必要な時間だった。知ってはいたが、強烈に寒い。
「よろいをなくすにはどうすればいいのか」
短いメールを千鶴に送った。ギリギリ届く気がした。
もうすぐ明るくなり始めそうだ。
「捨てること」
驚いてしまった。まだ明るくなっていない。いってみれば夜中だ。千鶴から返事が返ってきた。
何かしら勇気をもらった。誰かが見ているような気がした。地獄へ向かっている気がしない。少なくとも、千鶴が見ている。重いザックを背負って、歩きはじめた。アイゼンが必要になるまで、急ぎたい。少し暖かくなると風が出る。今は寒いが無風である。一番寒い時間なのかもしれない。
「捨てること」
何を捨てるのか。報酬や名誉や地位なのか。何がダメだと言っているのか。自分のチカラではないチカラを与えられたいのだろうか。それが地位だったりする。網ノ目三郎だって課長になりたい。何かがおかしい。
地獄に墜ちるかのような窮地に立っているのは、何が糸口なのか。三枝案を自分の案にしたからか。そうではない。糸口が見つからない。多分、道を外れていると思った。踏み跡がなくなっている。右か左かどちらかに行かないといけない。糸口だ。少し下山することにした。どこからか、真っ直ぐ登ってしまった。曲がりくねっているはずである。暗いのでよく視えなかった。ケータイを見た。時計である。５分下った。まだ道に出ない。道などない。

人の踏み跡に出ない。
立ち止まって考えてみた。
多分考えることが良くないのだろう。だから捨てられない。懐中電灯で遠くを照らしてみた。左上に灯りが見えた。確かに灯りである。かなり右に寄っている。
道はないが、思い切って灯りに真っ直ぐに向かうことにした。道がないと勾配が急になる。一挙に息が切れる。灯りに追いつかない。誰かが登っている。
谷を１つ越えたと思った。いきなり踏み跡が現れた。明らかに登山道だ。灯りは、真っ直ぐ上になった。誰かが登っている。汗でビッショリである。ここで休んだら一気に冷たくなる。また歩きはじめた。多分、左に曲がるところを、そのまま曲がらずに右に登ったようだ。かなり右に寄っていた。
ホッとした。あのまま下っていたら、多分諦めただろう。今日は、諦めたくない。
どうして上の灯りに追いつかないのか不思議だった。網ノ目三郎はかなり速く登っている。一向に灯りに追いつかない。少しの岩陰で休むことにした。さっきの汗はひいていた。冷たくもない。少し明るくなってきたような気がした。チョコレート出して食べた。もうすぐ風が出てくると思った。寒いが富士山は平穏だった。気がつかなかったが星がすぐそこにあった。無数にあった。このまま岩陰で眠ってしまいそうである。もうすぐ雪道になる。風も出る。自分には愛がないのではないかと、ふと思った。
ザックを背負った。愛は人が動く押しボタンらしい。今富士山にいるのは愛なのか。それともよろいなのか。
よろいだったら、自慢するだろう。でも網ノ目三郎が富士山にいることは誰も知らない。そしたら、これは愛なのか。
歩きはじめた時、上の灯りが見えなかった。休憩したのだ。先へ行ったのだろう。左へ曲がった。いきなり雪道になった。かなり上に来たことは間違いない。今休憩したばかりなのに、アイゼンを履くことにした。焦ってはいけない。昔、５月の八ヶ岳を甘く見て、アイゼンを持たずに行って、滑落して、危うく死にそうになったことがある。ここは富士山だ。滑落したら止まらない。

１００メートルくらい歩いた時、いきなり、少し明るくなった気がした。星がいなくなっていた。ちょっと前まですぐそこにあった星がいなくなった。天気予報など聞いて来なかった。
山は10分あったら姿を変える。
幸いなことに、踏み跡はしっかりしている。雪道に踏み跡がはっきし刻まれている。もうずっと雪は降っていないようだ。
まるで何も見えなくなった。完全に厚い雲の中に入ったと思われる。足元すらよく見えない。本来なら、太陽が昇っているのだろう。そんな時間だ。何も見えないし暗い。まだ３時間くらいは登るだろうと思った。今何合目にいるのかもわからない。ただ速く歩ける。道はしっかりしている。
よろいのことを忘れていた。
捨てることを忘れていた。
岩山になって勾配が急になった。風に吹きつけられるようにヤッケに水が当たりはじめた。これは雨なのか霧なのか。冷たい。装備は完全だったら。身体に水が当たる感じはない。装備がしっかりしている。こんなところで水に当たれば、凍えてしまう。
かなりの時間が経った。しかし、網ノ目三郎には、怯むという気配はなかった。視界１メートルの中を、雨の中を、怯まず、登った。
ケータイを見た。時計を見た。11時になっていた。いきなり時間が跳んだのではないかと思った。視界がゼロで暗い。時間がわからない。息が荒い。岩陰で休もうと思った。酸素が少ない。何合目なのかもわからない。あまり、わかりたくもなかった。とにかく、今日は、勝負している。ザックからおにぎりを出した。たくわんがおいしい。パリパリのノリがおいしい。２本目のお茶を開けることになった。下までこれしかない。
ひょっとして小屋の横を通っているのかもしれないと思った。何も見えない。ザックを背負って歩きはじめた。不思議なことに、ここにきて、気がラクになった。息はしずらいのだが、気がラクになった。
歩きはじめていきなりだった。
ドンと何かにぶつかった。モノではない。人だった。
「すみません」
「お先にどうぞ」

女性だった。数時間前から上の灯りなっていた人なのだろう。
「１人ですか？」
「ええ」
「ガンバってください」
網ノ目三郎は、ものすごく元気が出た。何かよくわからない。もちろん、視界がゼロである。顔はわからない。しかし声は女性で１人だった。こんな時に富士山に挑むなど、どんな女性なのだろう。
さっきドンとぶつかった感触を確かめていた。確かに女性だった。一瞬、網ノ目三郎は、どうしたのかと思った。平らになったのだ。視界がゼロだ。何もわからない。多分頂上に着いた。ケータイを見た。13時になっていた。時間がかかった。しかし無事でよかった。神社に行きたいのだが方向が分からない。しかも、ここから離れたら、御殿場口への降り口がわからない。
懐中電灯がこちらを照らした。
「下山します」
「気をつけて」
彼女の灯は、すぐに見えなくなった。
網ノ目三郎は、ザックからりんごを出して食べた。食べ終わるまで休憩しようと思った。多分、下りの方が危険だ。道にも迷いやすい。網ノ目三郎も、何度も迷ったことがある。いずれも、下りの時だ。
網ノ目三郎は、何かよくわからないが、晴れやかになっている気がした。千鶴からメールがなかったら、ひょっとすると、固まって死んだかもしれない。それほど落ち込んでいた。今はウソのようだ。視界はゼロだし寒いのだが、網ノ目三郎は落ち着いていた。チョコレートをたくさん買って来た。しばらく、階段になっている最後の一歩に腰を降ろして、チョコレートを食べた。
アイゼンが外せるところまで、慎重に下った。ずっと、視界がなかった。アイゼンを外して、ザックに収めた。ホッとした。りんごがもう１つあった。なぜだか、穏やかだった。しばらく、こんな気持になったことがない。
頂上直下でぶつかった彼女に追いつくことはなかった。彼女は、プロだろう。

○神部五郎への手紙
アパートに着いた時は、夜遅くになっていた。
洗濯をして、寝袋を干して、また部屋が湿っぽくなった。ザックも洗った。自分もシャワーをしてキレイになった。スッキリした。もう０時に近い。網ノ目三郎は、ラーメンをつくった。富士山で、とにかくラーメンが食べたかった。もう、ラーメンならば、短時間でつくれるようになっている。
１杯では足りずに、２杯つくった。満足だった。
「私が見たところ、チェリー株式会社は、山上一郎本部長の、対湯本化学対策が行き届いていると感じます」
「まず、柳株式会社は、通信販売の業務一切を、チェリー株式会社から請け負っていますが、手数料は、販売額の15％で、安定した収入になっています」
「もしチェリー株式会社に、倒産などの不測の事態があったとしても、柳株式会社は商品を通信販売できる状況にあります」
「柳株式会社は、山上一郎本部長が社長を務めていて、株も１００％山上社長です」
「斎藤倉庫も、１００％山上本部長の資本です」
「手数料も10％に決まっています」
「今回の部品在庫のコンピューター化のことも、３つ目の、チェリー株式会社内の社内分断化の１つと考えられます」
「つまり、湯本化学は、チェリー株式会社に対して、42％の株式を持ちながら、事実上、チェリー株式会社を、形骸的に支配しているに過ぎません」
「１億２千万円の支払いのジャンプ依頼も、山上一郎本部長の、湯本化学の利用策だと考えられます」
「私も、山上一郎本部長の、社内リストラ策に利用されています」
「私が、チェリー株式会社のリストラを計画したことになっています」
「私が悪者になるのはかまいませんが、私の考えは、違うところにあります」
「私は、チェリー株式会社が５年も売上が伸びないのは、新製品が、出ないからだと思っています」

「私に新製品を閃くセンスはありませんが、それなりの人を持ってくれば、可能だと思います」
「新製品があれば、一気に人材不足になります」
「チェリー株式会社に、経営企画室をつくって、私を、室長にしていただきたい」
「私は、決して、この前のような過ちを犯しません」
「私は、自分を捨てることができるようになりました」
「私は、チェリー株式会社のために身を捨てる覚悟があります」
１時になるまでの20分で、神部五郎への手紙を書き終えた。一気に、何の迷いもなかった。ワードで書いて、メールに添付した。
これがどうなるか、そんなことは、何も考えなかった。自分の気持そのままである。帰って来いと言われれば帰るし、辞めろと言われれば辞表だと思った。

○梅岡玄蕃
「おはようございます」
有吉里子は返事もしなかった。
誰もが、無視したいという態度だった。
「あんたまだ来るわけ？」
女性たちの身体は、みんなこう言っているように思えた。
有吉里子の隣に、まだ机があった。
不思議に、網ノ目三郎は、こころの中で笑っていた。
「お願いします」
有吉里子に、食券をお願いした。
黙って受け取った。
ひょっとすると、有吉里子とは、もう話しをすることもないかもしれないと思った。
もちろん何もすることがない。
山上郁夫と山上一郎に、２週間も休んだお詫びをしようと思って部屋に行ったのだが、２人とも、出かけているとのことだった。明日もいないようだ。

神部五郎からケータイにメールが来た。短いメールだった。
「経営企画室の案を考えておけ」
「ちょっと出かけてきます」
横辰八郎に伝えて、網ノ目三郎は、静岡駅に向かった。タクシーを呼んだ。
チェリー株式会社のカタログや会社案内などを持っていた。
「すみません急用で出かけます」
「お昼を頼んだのですが」
「すみません」
有吉里子に電話をしたが無言だった。電話は聞いていたと思った。
先里万丈に電話をしたのだが、梅岡玄蕃に話しを聞いてもらえとのことだった。どんな人なのかわからない。商品のセンスのある人なのかもわからない。
神田のカフェだった。
「どうもすみません」
「急に時間をいただきまして」
「先里さんから電話がありました」
「私は湯本化学株式会社から42％株を持っているチェリー株式会社に派遣されているものです」
「経営の近代化が私の務めになっています」
「しばらく前に、私がワルイのですが、チェリー株式会社の事務の合理化計画で40人のリストラをする案に、私が手を貸してしまいました」
「私の本心は、チェリー株式会社は、若い女性に評判の悪くないブランドなので、新製品さえ出せれば、再生すると思っているのです」
「ずっと赤字なのですか？」
「５年連続で売上低下です」
「これがカタログです」
「会社案内です」
「それで私になにをしろとおっしゃるのですか？」
梅岡玄蕃は60を越えていると思った。しかし、目は鋭い。しかし、商品のセンスがあるのかどうか、よくわからない。
「商品の指導をしてくださる人を探しているのです」

「ヒット商品の創れる人ですか？」

「そうです」

「私は通常勤務はできません」

「会社はどこにあるのですか？」

「静岡です」

「１週間に１度も行けないかもしれません」

「かまいません」

「多分、多くのお金を用意できません」

「交通費と月に20万円は用意できますか？」

「それでいいのですか？」

「もし私がダメそうだったすぐにクビにしてけっこうです」

「え？」

「私はプロですから」

「名刺のところにメールすればいいのですか？」

「ええ」

「それから〜この話しはまだ決まりではありません」

「わかっています」

「決まったら静岡へ伺います」

「契約書案をメールしてください」

「決まらなくてもかまいません」

「決まらないからといって私に負い目を抱く必要はありません」

「連絡だけはお願いします」

○経営企画室案

網ノ目三郎は、そのまま神田から静岡に帰って、経営企画室案を書いた。経営管理室にしないところがミソだ。経営管理室では、チェリー株式会社を蘇らせることはできない。キーポイントは、梅岡玄蕃だ。江戸時代の鎖釜の名手のような名前だが、背広にキチンとした60過ぎの男である。オリジナル商品をつくりたい。しかし、そういうつもりで、実習をしていたわけではないので、誰を梅岡玄蕃につければよいのかわからない。マーケティングは、山

上一郎の配下しかいない。網ノ目三郎は考え込んでしまう。
「おはようございます」
まだ経営企画室案が書けないままだった。
「社長がお呼びです」
志村直子が電話をしてきた。
山上一郎も一緒にいた。
「昨日湯本化学の神部さんと３人で相談をしました」
「チェリー株式会社に経営企画室をつくれというご指示でした」
「山上本部長は自分がいるので必要ないと何度も言ったのですが、神部さんは聞き入れませんでした」
「網ノ目三郎さんを経営企画室の室長にするようにという指示です」
「私も本部長も、そしてチェリー株式会社の社員達も、みんな、あなたは信じていません」
「これではうまくいかないでしょうと何度も言ったのですが、神部さんは聞き入れません」
「山上本部長から話しがあります」
「これは、あくまで案ですが、チェリー株式会社の経営企画室の組織です」
Ａ４で２枚だった。
組織図が書いてあった。チェリー株式会社全体組織図である。何も変わったところはない。経営会議の下に、経営企画室があった。人事案も書いてあった。経営企画室室長は山上一郎で、経営企画室の部長が網ノ目三郎だった。
２枚目に、経営近代化目標が書いてあった。三枝コンピュータによる業務改善案が１番に書いてあった。
これを網ノ目三郎案にして、湯本化学経営管理室で説明してださい。
網ノ目三郎は、山上一郎は、自分を、それだけにしか見ていないのだと思った。
「今日、私の案を神部さんにお伝えしますので、神部さんからお聞きになっていただきたいのです」
「検討していただけるようお願いいたします」
「案があるのでしたら今示しなさい」
「今晩まとめますので」

「この案になることはないので、預からせていただきます」
山上郁夫も山上一郎も、キツネにつままれたような顔していた。
「６月から年末にかけて新製品を開発する」
「来年３月新製品を発売する」
「社長直属で経営企画室をつくる」
「経営企画室の室長は網ノ目三郎」
「経営企画室の当面の役割は新製品の開発と市場導入と経営の近代化施策の実施」
「新製品の投入で必要な人材は現在の社内から調達する」
「経営の近代化を行って20名程度人材を新製品の導入にあてる」
「経営企画室の商品開発の顧問に梅岡玄蕃をあてる」
「経営の近代化は毎日のリアルな試算表を社長の机に置くことを目指す」

○人事異動

次の日だった。網ノ目三郎は、依然として誰も話しかけられることもなく、お昼も１人で食べ、ずっと、１人でパソコンで、過去の新製品発売の資料をつくっていた。商品別販売実績は、柳株式会社からもらってきた。チェリー株式会社に、自分の会社の商品別販売実績の資料がないのが、なんともおかしい。
網ノ目三郎は、梅岡玄蕃がすぐに欲しがるだろう資料を揃えておきたいのだ。梅岡玄蕃が、どのくらいのチカラを持っているのか、網ノ目三郎にはわからない。門外漢である。しかし、今は、梅岡玄蕃に賭けるしかない。梅岡玄蕃を紹介した先里万丈に賭けるしかない。先里万丈には会っていない。千鶴に言われて『よろい』や『愛が溢れる』を、電子書籍の本屋からダウンロードして読んでいるだけだ。電話をしたが、会ってはいない。若者なのか老人なのかもわからない。
夕方、湯本化学からメールがきた。経営管理室の後輩からだ。
湯本化学のチェリー株式会社に派遣されている取締役が交替した。神部五郎に交替した。それだけの人事だったが、大きな人事だと網ノ目三郎は思った。多分、いま、湯本化学とチェリー株式会社を救えるのは、神部五郎１人

だろうと、漠然と思っている。
先里万丈の言うところの、よろいの厚さで判断しているだけだ。網ノ目三郎の微妙なメールの意味を汲み取っている。しかも、網ノ目三郎を信じている。
経営管理室のチェリー株式会社の担当だった榎本順夫が、営業課長で大阪に転勤になった。
すごいピッチで何かが動いている。
「梅岡玄蕃さんに会いに行くのでアポイントをとってくれ」
帰り路、神部五郎から短いメールがきた。
「明日なら13時30分から30分で神田のカフェです」
「それでいい」
「もしもし」
「網ノ目三郎ですが、さきほどの件ですが、明日の13時30分に神田のカフェでお願いします」
「承知しました」
「もしもし」
「明日の13時30分に神田のカフェです」
「地図は、パソコンにメールしておきます」
「わかった」
すごいスピードで動いている。
翌日も、誰からも声をかけられることもなく、時間が過ぎた。お昼の食券を有吉里子に頼まなかったのだが、何も言わなかった。聞きもしない。
「東京に出かけてきます」
網ノ目三郎は、横辰八郎に声をかけて、静岡駅に向かった。
「私どもの経営管理室室長の神部五郎です」
「梅岡玄蕃です」
「私に賭けることになるかもしれないことが不安ですね？」
いきなり梅岡玄蕃は、ズバリ、神部が気になっているだろうことを言った。
「商品開発というのは、ほとんど外れます」
「私の成功確率が問題です」
「私の商品の考えはここに書いてありますので読んでください」

電子書籍のブック版だ。『ヒット商品』というバカにした題名である。
「ヒット商品は宝くじではなくて創れますので」
梅岡玄蕃なる人はどういう人だろうと、網ノ目三郎は思った。神部五郎も、同じだっただろう。神部も梅岡も、商品論など自分の分野だと思っていない。
網ノ目三郎は、梅岡玄蕃『ヒット商品』を神部五郎に渡した。網ノ目三郎は、今晩、ダウンロードして読もうと思った。
「明後日チェリーに行くことになっているので、梅岡玄蕃さんの顧問就任の起案書をつくっておいてください」
「経営企画室の起案書をつくっておいてください」
「案は先に貰った骨子を羅列しただけでいいです」
神部五郎は、それだけ言うと、急いで湯本化学に帰った。
「梅岡さんの契約は６月１日付でいいですか？」
「ええ」
「私は、新製品のことでは梅岡さんを助けることはできませんが、どういう人が必要ですか？」
「私の考えを社内やお客さんに伝える人がいるといいです」
「わかりました」

壊さないと変革はない

○６月６日

昨日は、ずっと、梅岡玄蕃『ヒット商品』と先里万丈『よろい』を読んでいた。『よろい』の中の、壊さなければ変革にはならないという文章が、頭から離れなくなっていた。

自分のことも、まだ誰にもわからないだろうが、千鶴から、先里万丈『よろい』を知らされる前の自分と、富士山後の自分は、まるで、違う人間のようだと思う。自分で思ってしまう。前の自分は壊れていなくなっているのではないかと思う。

何が違うかというと、怖いものがなくなった感じがする。一瞬底を見たのだろうと思う。底とは、このまま死ぬかもしれないことだ。そのことを考えれば、仕事を失うことくらいは何でもない。

こんなふうに考えることなど、できなかった。

やっぱり、自分は、壊れたと思う。

チェリー株式会社も、壊さないとダメだと思う。梅岡玄蕃に壊す役をやってもらうわけにはいかない。梅岡玄蕃は、創る人だ。壊すことは自分がやらないといけない。そう思った。

神部五郎が、はじめて静岡のチェリー株式会社にやってきた。

11時から経営会議らしい。網ノ目三郎も、経営企画室案と、顧問の梅岡玄蕃の就任の説明をすることになっている。

横辰八郎には、２つの案の起案書を渡してある。横辰八郎は、経営会議の結論をうけて、起案書に社長の承認印を押すことにしてあるらしい。

山上郁夫と山上一郎と峠下冴子と永田峰雄と神部五郎がメンバーだ。取締役会と同じメンバーである。横辰八郎が進行役をやっていた。今日の経営会議の主たる議題は、もちろん、経営企画室の設置である。それと、顧問の採用である。

「チェリー株式会社はメーカーですから、商品に魅力がなければ、売上も利益も墜ちて行くことは避けられません」「もう５年も新製品らしきものがな

くて売上も低下しています」「まず、なんといっても、みんながガンバって新製品を開発して発売することから始めないといけないと思います」
神部五郎がいるのだ。あまり多くの言葉を必要としないと思った。
「山上郁夫社長と山上一郎本部長の大きな部屋が別々にあるのも不便だと思うので、一緒にしていただいて、山上一郎本部長の部屋を解体して、大部屋の一角にして、ここに経営企画室を持ってくればいいと思います」
神部五郎の提案に、異論をとなえる人はいなかった。
「私の机は必要ありません」
神部五郎は、横辰八郎に言った。
「はじめての経営会議のメンバーなのでお昼でもいかがでしょうか」
山上郁夫が言った。
山上一郎の顔は、青ざめていた。はじめて、資本を42%握られている親会社を感じたのだろう。多分、湯本化学など、どうにでもなると考えていたに違いない。
翌日だった。
チェリー株式会社の組織変更の連絡書が社内に回った。掲示板に張り出された。経営企画室室長の辞令が発令された。網ノ目三郎である。梅岡玄蕃の入社人事も発令された。経営企画室が目指すことも記されていた。みんなでガンバって新製品をである。
網ノ目三郎は神田にいた。梅岡玄蕃に１時間時間をもらっていた。網ノ目三郎がつくっていたチェリー株式会社の新製品の資料を渡していた。商品別の販売実績を渡していた。
「６月15日にお伺いしますので」
「チェリー株式会社の方たちにあいさつをさせてください」
「歓迎はされないかもしれません」
「承知しています」
「私の新製品案をつくって行きますので見てください」

○峠下冴子

大部屋の１／３を占めていた山上郁夫と山上一郎の部屋が一緒になって、山

上一郎の部屋が解体された。アッという間だった。そこに、網ノ目三郎の机と梅岡玄蕃の机が置かれていた。広いスペースにポツンとある感じが、いかにもだった。
「いままでどおり有吉里子がつきますので」
「わかりました」
峠下冴子がやってきた。
「話しがあるんだけど」
峠下冴子は別室に網ノ目三郎を連れて行った。
「コーヒー煎れてくるから待ってて」
網ノ目三郎は、ずっと、食堂の自動販売機で、缶コーヒーを買っていた。コーヒーを煎れてもらったことなどない。40人のリストラ事件以来、誰も、見向きもしない。峠下冴子が、コーヒー煎れてくるからと言ったことには、違和感があった。慣れない違和感だ。
「あなたが書いてあった経営の近代化の目指すことだけど」
「社長の机の上に毎日リアルな試算表を置くっていうのはどういうこと？」
「わたしの仕事のよう思うんだけど」
「もし、みんなの動きがリアルであったならば、それを集計した結果である試算表は、会社をリアルに表現したものになります」
「もし、リアルで正確な試算表が毎日社長の机の上に置かれるならば、フツウは、支払いのジャンプなど頼まないでしょう」
「あれは山上一郎さんのぱパフォーマンスだから」
網ノ目三郎は思わぬことを聞いてしまった。しかし、その場は、なんともなく済ませたかった。
「それでどうしたいのですか？」
「売上は柳株式会社に聞かないとわからないから難しい」
「リアルで正確な試算表など難しいのですか」
「そう」
「柳株式会社に知らせてもらえばいいんじゃないですか？」
「あなた経営企画室の室長だからやって」
「わかりました」
おかしなことになっている。同じ会社なのに、情報がないのだ。会社が分か

れている。
お昼を、やはり１人で食べていた。
千鶴がやってきた。
「元気になったんだ」
「もしあなたのメールがなかったら死んでいたかもしれない」
千鶴は、驚いた顔をした。
「自分で死ぬんじゃなくて何も食べないから死ぬんだけど」
「そうなると思っていたらあなたのメールがきた」
「感謝している」
「私は少しはよろいを捨てた」
ここの食堂は、とり肉ソバが好きなのだろう。またおいしい。食べるのを忘れて、千鶴に話さないといけないと思った。
「食べて」
「お昼過ぎちゃう」
千鶴は、そう言うなり、盆を持って、仲間のところへ行った。仲間に何か言われていた。
いつか千鶴には言わなければならないと思っていた。千鶴は、命の恩人なのだ。多分、網ノ目三郎は、一度死んでしまった。みんなにはわからないが、自分でよくわかる。以前の網ノ目三郎は、どこにもいない。富士山の視界ゼロの中に置いてきた。今いる網ノ目三郎は別人なのだ。
それを千鶴に伝えようと思った。千鶴にしかわからないと思う。先里万丈『よろい』を理解する千鶴にしかわからない。
夕方になるまで、柳株式会社を合併したらどうなるか考えていた。ずっと考えていた。
「お先に失礼します」
有吉里子の声を聞いて、考えるのを止めた。自分に言ったわけではない。有吉里子は、まだ話しかけて来ない。網ノ目三郎も話しかけない。有吉里子だけではない。だれも、網ノ目三郎に話しかけない。
少し暗くなっていた。
今夜のごはんを考えながら歩いていた。50メートルくらいだけ歩道がない道路を通らないといけない。いつも、ここは注意している。後からつっかけら

れるような殺気がする。右側を通った方が安全と思うのだが、50メートルだけだ。多分、先の家が立ち退かないのだろう。
いきなり右の腰に何かがぶつかった。網ノ目三郎は飛ばされてしまった。危うく樹に激突するところだった。スローモーションを見ているかのようだった。左から墜ちた。
「大丈夫ですか？」
最近持ち始めた３８０円のケースを持ってきてくれた。飛ばされたのだ。
「何もないと思います」
「車が当たったのですか？」
「ええ」
「警察に知らせた方がいいです」
そう言って、親切そうな中年の女性が立ち去った。
網ノ目三郎は、何が起こったのか、まだよく飲み込めていない。自分が１歩車道に出たために車と接触したのだろう。なぜ車は止まってくれなかったのだろう。
どこも何もなかった。頭も打たなかった。左から墜ちたが、手をついてもいなかった。衣服も汚れていない。しかし、自分が飛ばされたことは確かである。
この状態をおまわりさんに話しても、とても信じてもらえそうになかった。

○６月**15**日の梅岡玄蕃

「いらっしゃいませ」
はじめて梅岡玄蕃がチェリー株式会社にやってきた。静岡駅でお昼を食べて来たと言った。はじめて山上郁夫と山上一郎が一緒にいる部屋に入った。それでも広い部屋だった。
「どうぞよろしくお願いいたします」
梅岡玄蕃は、60を過ぎていると思われる。それなりの存在感がある。山上郁夫も山上一郎も、丁重だった。
峠下冴子にも紹介した。生産の現場も見学した。柳株式会社の通信販売の現場も見た。斎藤倉庫も見学した。

４時ごろだった。
「販促チーム全員に私を手伝って欲しいのですが」
「どうしてですか？」
「彼女たちはお客さんの近くにいるから」
「他のチェリー株式会社の人達はお客さんから遠くなっています」
「ホントは、通信販売なので、お客さんと近いはずなのに、遠くなっています」
「なぜですか？」
「自分たちの商品を愛していないからでしょ？」
網ノ目三郎は、商品を愛するなど、聞いたことがない。
「彼女たちは柳株式会社の人でしょ？」
「経営企画室の及ばない人達でしょ？」
すごいおかしいことになっているのだ。確かに、見学はできるけれども、柳株式会社の経営会議や社長の山上一郎に了解をとらなければ、どうにもならないことだ。
網ノ目三郎は、梅岡玄蕃を静岡駅まで送って行った。食事を誘ったのだが、早く帰りたいとのことだった。明日の朝早いのだと言っていた。
網ノ目三郎は、アパートに帰って、柳株式会社と斎藤倉庫の合併案を考えていた。チェリー株式会社は、一旦壊さないといけないと思った。柳株式会社も斎藤倉庫も、山上一郎の、湯本化学対策だ。湯本化学が、いくら42%のチェリー株式会社の株を持っていても、柳株式会社や斎藤倉庫のように、別会社にしてしまえば、どうにもならない。なぜこのようなことができたのか、わからない。湯本化学は何も言わなかったのだろう。山上一郎にとって、神部五郎は、ひょっとして、はじめて丸め込めなかった人なのかもしれない。
柳株式会社を元に戻すにしても、大義が必要なのかもしれない。合併する大義などないような気がする。
山上一郎は、マーケティングでは業界で有名だと言っていた。柳株式会社をいじることは難しいかもしれない。
翌日、網ノ目三郎は、南良子に電話をした。お客さまのところへ行くことがあったら一緒に連れて行ってくれないか。

「ごはん食べて１時に玄関で待っていてください」
南良子に意見を聞いてみようと思った。
相変わらず、１人でごはんを食べている。カツライスである。大量のキャベツの千切りを食べている。よほど千切りの上手な人がいるのだろう。しかも千切りが好きに決まっている。
「清水のお客さんですけど」
南良子は、シートベルトを締めながら言った。
「昨日来た梅岡玄蕃という人だけど」
「チェリーの顧問になった人でしょ？」
「あなたたち販促の人に手伝って欲しいそうだけど」
「どうしてですか？」
「こうやってお客さんに接している人だからだそうです」
「お客さんに接している方が商品開発できるのですか？」
「梅岡さんはそう言っています」
「網ノ目三郎さんは商品のことは詳しいのですか？」
「私が詳しければ梅岡玄蕃さんは必要ありません」
「わたしたちは柳株式会社の人間ですから山上社長の指示がなければ何もできません」
「南さんの気持を聞きたいんだけど」
「山上社長がやれって言ったらやりますけど」
「南さんの気持です」
「南さんたちは、チェリーブランドの化粧品を説明して歩いていますが、ここ５年くらい落ち込んでいます」
「どう思っているのですか？」
「わたしたちは、与えられた商品を一生懸命説明するのが仕事ですから」
「意見を求められたことはないのですか？」
「誰にですか？」
「たとえば山上一郎さんとか」
「社長に聞かれたことはありません」
「説明してて〜魅力が少ないって感じるわけでしょ？」
「このままだとチェリー以外の化粧品を買われてしまうんじゃないかって」

「感じているんでしょ？」
「ええ」
「何もアクションを起こさないのですか？」
「私たちの仕事は〜そういう仕事ではありません」
「だけど〜意見聞かれたら話すんでしょ？」
「ええ」
「話したいんでしょ？」
「みなさん一緒ですか？」
「不満はありません」

○当たって砕けろ

翌日、網ノ目三郎は、山上一郎にお願いをしていた。当たって砕けろである。
「なんといっても、新製品を成功させることが、チェリー株式会社にとって重要です」
「柳株式会社の販促の７名は、お客さんに近いところにいますので、新製品の開発に係ってくれれば、プラスになってくれると思います」
「彼女たちにそういうチカラはありませんよ」
「あるものを説明するだけです」
「会社が違うのですから難しいでしょ」
「新しく採用して梅岡さんにつけてあげればいいです」
「山上さんは、チェリー株式会社の化粧品があまり売れないことをどう思っているのですか？」
「通信販売にしたことで良さを伝えることができているんです」
「商品が良くないとは思っていないことですか？」
「梅岡さんが顧問で入社されることを反対はしていない」
網ノ目三郎は、商品については得意ではない。しかし、山上一郎の考えは、なんか、おかしいとは思う。マーケティングでどうにでもなるんだという考えなのだろう。
網ノ目三郎は、山上一郎と話しをした後、なんともやりきれなくなってい

た。梅岡玄蕃が言っていたが、チェリー株式会社の人は、自分の会社の商品を愛せなくなってきている。山上一郎は、自分の会社の商品を愛しているのだろうか。
午後になって、広い、山上郁夫と山上一郎の部屋に仕切りの工事がはじまった。親子である。なのに、どうして仕切るのだろう。
「経営企画室は２人しかいないのに、これですか？」
山上一郎が出てきて、嫌味を言った。
先里万丈『愛が溢れる』を読んでいた。もう22時だ。梅岡玄蕃の言っている、「チェリーの人は自分の商品を愛せなくなっている」を理解しなければと思った。
「愛は人が動く押しボタン」
愛がなければ、商品が売れなくても何もしないことになる。愛が人が動く押しボタンだったら、そうなる。自分の商品を愛せなくなっていることは、会社を愛していないことなのか。山上一郎は、何を愛しているのだろう。よくわからない。自分はどうなのだろう。網ノ目三郎のことばは、神部五郎を動かした。なぜか。自分のよろいのためにチェリー株式会社を考えることを止めたからだと思う。そこが、網ノ目三郎が、少しは生まれ変わったところだ。
網ノ目三郎は、チェリーの商品を愛しているのだろうか。自分でもよくわからない。ただ、５年間も売上が減少していて、何も動かないということは、何かがおかしい。網ノ目三郎には考えられないと思う。
網ノ目三郎が梅岡玄蕃にお願いをしたのは、チェリー株式会社の商品を少しは、愛しはじめたのだろうか。
山上一郎の部屋に飾ってあった、マーケティング研究会からの表彰と盾が、山上一郎にとって、重要なのだろう。それはよろいなのだと思う。山上一郎にとっては、チェリー株式会社の商品よりも、重要なモノがある。多分、それは、山上一郎のよろいだろう。
５年も売上が減っていて何もしないことは、湯本化学にも愛がないのではないかと思ってしまう。これはなんだろう。どうして誰も何もしないのか。０時になっていたが、先里万丈『人と集団を滅ぼすもの』をダウンロードして読みはじめた。

人は、昨日と同じことをする習性があると書いてある。人や集団に宿る見えざる悪魔がいて、人や集団を滅ぼすために、昨日と同じことをするのだと言っている。いまいち、なぜ滅ぼさなければならないのか、よくわからないが、滅ぼされていると考えれば、人は、何もしないことになる。人は滅ぼされるようになっているのか。だから、５年間も売上が上がらなくても、何もしないのか。
今の網ノ目三郎には不思議だった。今の自分には不思議である。しかし、少し前の自分には、フツウだったかもしれない。自分も何もしなかったかもしれない。自分の何かが変わったことは確かである。
翌日、網ノ目三郎は、神田五郎にメールをした。手紙を書いた。
ひょっとして、神田五郎は、誤解するかもしれないとは思った。
「チェリー株式会社を活気ある会社のするためには、新製品がどうしても欠かせません」
「会社は商品を取り扱って暮らしているので、商品がダメだったら、どのようにうまく運営しても、どうにもなりません」
先里万丈の文を使わせてもらっている。ホントに、網ノ目三郎も、そう思っている。商品を販売して暮らしているのが会社である。
「チェリー株式会社全員が、チェリーブランドの新製品に立ち上がらないといけないと思います」
「梅岡玄蕃さんは、柳株式会社の７名の販促の人達に手伝ってほしいと言っていますが、現実は、会社が違うので、うまくいきません」
「山上一郎さんにも相談したのですが、新規に雇って梅岡さんに付けるようにという指示です」
「チェリー株式会社は小さな会社なのに、更に細かく分かれていては、チカラが発揮できないと思います」
「柳株式会社と斎藤倉庫を、チェリー株式会社に合併するための、よい考えはないものでしょうか」
相変わらず１人で食堂でごはんを食べている。サケの焼き魚ごはんである。そうおいしいとも思えないが、お昼を考えなくて済むので、助かる。網ノ目三郎は、朝は、食パン１枚とマーガリンだけである。コーヒーはレギュラーコーヒーである。コーヒーは１杯では済まない。しかし、何も考えることは

ない。パンがなくなれば帰りに買って帰ればよい。やはり、晩ごはんがタイヘンである。今日は何にしようと、考える。
午後になって、神部五郎からメールが来た。柳株式会社の株５株とチェリー株式会社の株１株を交換する。斎藤倉庫も同じ。チェリー株式会社は増資して、交換に応じる。柳株式会社も斎藤倉庫も、全株、山上一郎の持ち株なので、チェリー株式会社の山上一郎の持ち株比率は、８％に上がる。湯本化学の持ち株比率は39％に低下する。山上郁夫の持ち株比率は29％になる。
15％は仕入れ先と銀行で、９％は持ち株会になる。
顧問弁護士の名前があった。湯本株式会社の顧問弁護士だ。
「東京へ行ってきます」
網ノ目三郎は、横辰八郎に声をかけて、静岡駅に向かった。

○新橋の交差点で

２時間もかかってしまった。
そもそも網ノ目三郎は電気技師である。どういうわけだか、経営管理室に転勤になった。経営と会計の勉強のために夜学校に通った。そしてチェリー株式会社に出向になって、チェリー株式会社の経営の近代化に務めている。今は、会社の合併のことを、弁護士と相談している。おかしな人生になった。
手続きがものすごくメンドーである。しかも、書類や契約書がたくさんある。株の評価もお願いしないといけない。もちろん、非上場なのでメンドーだ。
あまりの空腹で、新橋でごはんを食べた。こういうことは珍しい。ビールも飲んだ。
新橋の交差点は狭い。信号が赤なのか緑なのか、見えずらい時がある。まだ新橋は人通りが多い。ひょっとして赤信号だったかもしれない。横断歩道を渡った。左から、交差点を真っ直ぐ凄いスピードで車が寄ってきた。かろうじて少し跳び上がったと思った。どうして跳び上がったのかわからない。網ノ目三郎の身体は、車の屋根を転がって、車の後の道路に墜ちた。みんなが見ていた。しかし20時である。暗かった。黒いセダンは、そのまま走り去った。一斉に車が止まって、誰かが近寄った。

「大丈夫ですか？」
網ノ目三郎は、透明の３８０円のファイルが大事だった。弁護士に教えてもらった内容がすべて入っている。４メートルも向こうに飛んでいた。網ノ目三郎は、立ちあがって、その透明ファイルを拾いに行った。透明ファイルは、ボタンがしてあった。壊れていない。
「どうもありがとう」
網ノ目三郎は、声をかけてくれた若者にお礼を言って、そのまま歩きはじめた。どこも何もない。すこし前に、確かに、車の屋根の上を転がったように思えた。しかし、何もない。そのまま新橋の駅に入って、品川に向かった。静岡に帰らないといけない。
網ノ目三郎は、新幹線であっちこっち触ってみた。どう考えても、どこも何もない。頭は打っていない。背広だって汚れていなし靴だって汚れていない。しかし、車に接触したのは２回目である。偶然であろうか。網ノ目三郎に何もないのも偶然だろうか。
夜中になったが、神部五郎の会社のパソコンに、弁護士に教わったことをメールした。新橋の交差点のことは書かなかった。
翌日は山上郁夫も山上一郎もいなかった。志村直子に聞いた。
「湯本化学に出かけています」
「２人ともですか？」
「そうです」
志村直子は、網ノ目三郎の顔を見ないで言った。志村直子は、人事総務の島に座っている。以前は、山上郁夫の２重ドアの間に座っていた。山上郁夫と山上一郎の部屋を一緒にして、ドアも１重にして、志村直子の居場所がなくなった。すべて、網ノ目三郎のせいだと思っている。網ノ目三郎がいる経営企画室は、ガランとしている。

○経営会議
翌日、山上一郎がやってきた。山上一郎が網ノ目三郎の席にやってくることなどない。志村直子に呼んでくれと言えばいい。
「昨日湯本化学で合併の書類をつくっていた」

「弁護士に来てもらった」
「株価も評価してもらった」
「書類審査だが」
「これをよく精査して来週の月曜日の経営会議にかけてください」
「柳株式会社と斎藤倉庫の取締役会は今日やります」
大部屋である。遠くでは聞こえなかっただろうが、すくなくとも、総務人事は聞こえた。横辰八郎が呼ばれて山上一郎の部屋に入って行った。
網ノ目三郎にはよくわからなかった。どうして山上一郎が妥協しているのだろう。しかも、書類にハンコまで押している。何があったのだろう。
お昼は、相変わらずである。ハンバーグだった。和風のおいしいハンバーグだった。食べながら、どういうわけだか、流れが、網ノ目三郎に来ているように感じる。よくわからないが、思い切ってやっていることが、すべて、功を奏している。なぜだろう。千鶴の捨てることだと言った短いメールだった。よろいを捨てる意味だ。網ノ目三郎は、今は、電気技師と言って、汚れもしない技師服を着ることはない。捨ててしまった。なんといっても千鶴が大きい。思わず、いつも千鶴が仲間とごはんを食べている方を向いた。少し遠いが、目が合った。千鶴と目が合った。３秒くらい目が合っていた。すごいながい時間のようだった。
１時に、横辰八郎がやってきた。
「総務人事と経理はたくさんやることがありますので案をつくります」
「経営会議の説明の方はよろしくお願いします」
ちょうど誰もいなかった。総務人事も誰もいなかった。
「横辰さんにお聞きしたいことがあるのですが」
「私は、この案は、山上一郎さんが拒否すると思っていたのですが」
「自ら合併案を推進しているように思えるのですが」
「社長からなかなか株を譲ってもらえなかったのですが、今回、神部さまの配慮で、８％までになりました」
横辰は、小声で、網ノ目三郎にささやいた。
網ノ目三郎は驚いてしまった。いずれ、山上郁夫の株は山上一郎に移るのだろうに。確かに、山上一郎の持ち株は少なかった。山上一郎が子会社を分離していったのは、このためだったのか。親会社の湯本化学対策ではなかった

のか。
網ノ目三郎は残念だった。これが読めなかったことは残念だった。しかし、神部さんの配慮でと横辰八郎は言った。神部五郎は、よくわかっていたのだ。山上一郎の持ち株を増やすカタチで解決させた。
網ノ目三郎は、まだ未発達だと自分のことを思った。神部五郎の深慮遠望さに敬服するだけだった。

○化粧品
６月月末だった。梅岡玄蕃が、２度目にチェリー株式会社にやってきた。おかしなもので、柳株式会社も斎藤倉庫も、アッという間になくなった。名刺もすぐに変わった。何事もなかったかのように、チェリー株式会社になった。
梅岡玄蕃は、まだ若い網ノ目三郎に感心した。
「通常、このようなことには、手を出しません」
「サラリーマンだし」
「山上一郎さんは権力者です」
「網ノ目三郎さんは山上一郎さんが怖いだろうし」
「下手をすると命だって危ない」
「山上一郎さんにとってはあなたはジャマ者以外の何物でもない」
「神部さんがいなかったらあなたは危なかった」
「今回ように勇気をもって事に当たらなければ変革などできない」
網ノ目三郎は、チェリー株式会社の変革を志したのだろうか。自分でも、まだはっきりしていない。自分の未発達さが、チェリー株式会社の社員に、不安を与えているところもある。山上郁夫と山上一郎に誤解されるところでもある。
「山上一郎さんは、湯本化学が、自分の持ち株比率を上げることには、決して賛成しないだろうと思っていました」
「湯本化学は、山上一族を排除したいのだろうと思っていたと思います」
「ある意味、山上一郎さんは、ホッとしています」
梅岡玄蕃は、網ノ目三郎が、自分自身でよく理解できないことにまで、読み

こんでいたことに驚いた。梅岡玄蕃は、１度しか山上郁夫とと山上一郎に会っていないのだ。
「梅岡さんにお願いされたとおり、チェリー化粧品の販促を担当している７名の社員に、梅岡さんの仕事に協力してもらうことができました」
「そこで、梅岡さんの商品についての考えや、商品開発などについて、話しを伺いたいのです」
「関係者を集めておきますから」
「そこからはじめたいのです」

今日が、その、梅岡玄蕃の、商品の話しの日である。
「商品には、商品と物資があります」
「会社は、商品を創らないとやっていけません」
「一般的に、商品は、時間が経過すると物資になります」
「物資はタダが好ましいものです」
「商品は特別に自分の生活に好ましいものです」
「商品は新しい生活のシナリオライターです」
「その商品を見て、自分の新しい生活がイメージできないといけない」
「化粧品では、自分がキレイになるイメージができないといけない」
「たとえば、くすんだ肌が透明な肌に変わるとか、そういうイメージです」
「実際に、このようなことは、化粧品では難しいのかもしれないけど」
「多分、３時間睡眠を続けていて、透明な肌にすることは、どんな化粧品を使っても難しいのでしょうが」
「チェリー株式会社の化粧品は、メイクが中心になっています」
「顔をつくることです」
「しかし、いくら顔をつくっても、メイクを落とした時の落差が大きいと、ガッカリします」
「やはり、すっぴんがキレイになる化粧品が好ましいと、私は思います」
「ですから、生活の仕方から肌のキレイになり方から、化粧品の使い方まで、お伝えできれば、好ましいのだと思います」
「単に、塗るとキレイに見えるだけではなくて」
南良子たちは、多くの質問をした。

「キレイになる指導をした方がいいのですか？」
「指導と言ったらおかしくなるかもしれないけれど、お勧めすることがいいのではないでしょうか」
「化粧品の使い方だけしかやったことがありません」
「これから学習すればできます」
「チェリーの新製品はスキンケアになるのですか？」
「素肌がキレイな方がいいとは思います」
「チェリーにはクレンジングがないのですが、素肌をキレイにするのでしたらクレンジングからはじめた方がいいと思います」
南良子が言った。

梅岡玄蕃は、やはり、網ノ目三郎の食事の誘いを断った。早く東京に帰りたいのだと言った。
「最初の商品ですが、クレンジングでいいですか？」
「クレンジングもはじめればいいと思います」
翌日、網ノ目三郎は、昨日の梅岡玄蕃の講演会の会議録を、参加者に配った。南良子に参加者をメモしておくように頼んでおいた。
ケミカル実験室はあるのだが、マーケティングの所属になっている。網ノ目三郎には、だれが、ビーカーをいじっているのかわからない。
会議録の最後に、クレンジングの開発に参加したいと思ったら電話してくれるように、書き加えておいた。
網ノ目三郎は、またもや、自分の甘さを思い知らされた。誰も、電話してこなかった。２日が過ぎても誰もいない。このままではどうにもならない。梅岡玄蕃がいても、ビーカーをいじるわけではない。話しだけでは何も進まない。網ノ目三郎は、横辰八郎にお願いをした。
「ケミカル出身の社員の一覧表が欲しいのですが」
「マーケティングになった時に辞めて行きましたから少なくなっています」
網ノ目三郎は品質管理を担当している美鈴千賀子に会いたいと思った。28歳で既婚で子どもが１人で薬学の大学院を出てチェリー株式会社に入社している。すぐに結婚したようだ。梅岡玄蕃の話しは聞いていない。
峰永俊夫に電話をした。

「美鈴千賀子さんと話をしたいのですが」
食堂で待っていると、美鈴千賀子がやってきた。工場作業服を着ている。
「すみません忙しいのに」
「本当はチェリーで化粧品を開発したかったのです」
「マーケティング中心でやることになって品質管理に配属が変わりました」
「辞めなかったのですか？」
「実家がすぐそこですしダンナと子どもがいます」
「ガマンしたのですか？」
「静かにしていれば働けますから」
「お父さんもお母さんもいますし」
美鈴千賀子は現実的だった。
「少し前に、梅岡玄蕃という新しくチェリーの顧問になった先生の話しがあったんです」
「知っていますけどわたしたちは時間中は難しいです」
「これは会議録なんだけど」
「このクレンジングに開発に参加しませんかっていうのは何ですか？」
「そのままですけど」
「わたしは品質管理ですけど参加できますか？」
「月曜と火曜を経営企画室でいいですか？」
「そんなことできるんですか？」

○美鈴千賀子
７月最初の月曜日だった。
「おはようございます」
「美鈴千賀子がやってきた」
「佐藤課長が、月曜と火曜は経営企画室に行けと言われました」
「話しを聞いていた横辰八郎は、慌てて倉庫に机を取りに行った」
人事総務のスタッフも経理のスタッフも、はじめて聞く話しなのだろう。
「クレンジングのことをまとめましたので、見ていただきたいのですが」
横辰八郎は、机とイスを２つ持ってきた。美鈴１人では済まないと思ってい

るようだ。
美鈴は、網ノ目三郎の横に座った。
「ここでいいですか？」
「どうぞ」
「わたし実験室を整理してきますから読んでおいていただけますか？」
美鈴千賀子は、さっさと品質管理と共同で使っているらしい実験室へ行った。美鈴千賀子は、お昼まで帰って来なかった。
「お昼一緒でいいですか？」
12時過ぎて美鈴が帰るなり、網ノ目三郎に言った。
「網ノ目三郎さんはわたしの上司になるのですか？」
「私の方が若いけど、月曜と火曜は上司です」
少し辛いマーボ豆腐だった。
「私はよろいがないから気にしないでください」
「よろいって何ですか？」
「オレは経営企画室長だとか思わないことですけど」
「網ノ目三郎さんはいくつですか？」
「27です」
「エライんですね」
「何もすごいものを持っていません」
「実験室ってどうなっているのですか？」
「品質管理の実験室は毎日使っていますけど、開発のための実験室は蜘蛛の巣です」
「新しい商品を開発しないからですか？」
「説明が良くないと思われているから」
「美鈴さんはどうなんですか？」
「言いたくありません」
「もっとよくできると思っていますか？」
「ええ」
「掃除をしたのですか？」
「使える状態にしました」
「誰が管理しているのですか？」

「今日からわたしが管理します」
こんなことも知らないで梅岡玄蕃を呼んで来たのだと思った。
化粧品のしかもクレンジングのことなど、網ノ目三郎ははじめてである。クレンジングなることばさえも、はじめてのような気がする。１時になって、網ノ目三郎は美鈴千賀子に言った。
「美鈴さんすみませんが、これを私にわかりやすいように説明していただけますか」
「この資料はパソコンですけど」
「土日に自宅でつくりました」
「パソコンですか？」
「私のパソコンで説明していただけますか？」
美鈴千賀子は、筆入れからメモリースティックを取り出して、網ノ目三郎のパソコンに移した。
スライドになっていた。
「網ノ目三郎さんはパソコン得意ですか？」
「ゼンブパソコンです」
「プリンタは持っていません」
「なぜですか？」
「紙がいっぱいになるから」
話の途中で、美鈴は、イライラする場面が何度もあった。あまりにも、網ノ目三郎が化学に弱いからだ。何を美鈴が言っているのかさえもわからない。
「人間の身体は水でできているのにコスメは油でできているから早く落としてしまわないと肌に良くないんです」
網ノ目三郎は、人間の身体が水でできていることなど、聞いたことがない。
美鈴は、実験室の本棚から、化粧品や肌の本を５冊持ってきて、ドサッと、網ノ目三郎の机に置いた。
「わかりました」
「明日はどうしますか？」
「わたしのクレンジングのアイデアを実験してみます」
「網ノ目三郎さんは白衣持っているのですか？」
「明日手伝ってください」

美鈴は、品質管理に戻って、男用の白衣を持ってきた。
「汚れたらわたしにください」
「自分で洗濯しないでください」
美鈴千賀子は、おもしろい人だと思った。
翌日も美鈴千賀子は元気だった。
「おはようございます」
美鈴千賀子は、白衣で現れた。
「美鈴さんのスライドを、梅岡玄蕃さんに送りました」
「美鈴さんが何者か聞かれましたけど、知っていることだけ伝えました」
「早速ですけど実験室に行っていいですか？」
網ノ目三郎は、はじめて白衣を着た。おかしな感覚である。医者の感覚になる。
「これ昨日の帰りに買って来たんですけど、どうやって精算すればいいですか？」
試薬の瓶のようだった。
「レシートをください」

○峠下冴子の忠告
「網ノ目三郎さんは実験室の電源を切ったのですか？」
木曜日だった。美鈴千賀子から電話があった。
「部品倉庫も柳株式会社のようにコンピューター処理にしたいからって言ったのですか？」
「ちょっと行きます」
「食堂で待っててください」
網ノ目三郎は、美鈴が何を言いたいのか、よくわからなかった。
「網ノ目三郎さんはみんなに何と言われているのかわかってるんですか？」
「せっかく落ち着いて静かだったのにあなたが来てから騒がしくなってるんです」
「柳の人もせっかく慣れたのに会社が変わるし」
「あなたは壊してるようにしか見えないんです」

「そんなわたしはあなたに協力してるから」

「いじめられるんですか？」

「網ノ目三郎さんが実験室の電源を切ったのですか？」

「いいえ」

「試料がダメになってまた月曜日同じことしないといけないんです」

「みんな賛成しません」

「新しい商品をつくることですか？」

「人間の肌なんか変わるもんでもないし」

「化粧の説明がダメだって思っているんです」

「美鈴さんは私を手伝っていますがまずいのですか？」

「実験室の電源を切られたりするんです」

「部品倉庫のみんなもコンピューターにするって言われたって驚いています」

「言いました」

「なんでですか？」

「部品の最新の状況がよくわからないからです」

「部品はお金ですから多くあればいいというわけではありません」

「在庫切れると社長に怒られるから困るんです」

「それにリストラするんでしょ？」

「しません」

「ホントですか？」

「新製品の販売などに人員を振り向けたいのです」

「経営企画室に来るのがイヤになったのですか？」

「わたしは薬学勉強したから活かしたい」

「でもいろいろ言ってくれてわかりやすくていいです」

「褒めてるんですか？」

「山上さんとかにも言えばいいでしょ？このように」

「山上本部長には言えません」

「どうしてですか？」

「次の週に人事異動された社員もいるんです」

「私はそういうことはしないんだ」

「しそうもない」

15時になって峠下冴子から電話が来た。
「応接室にいるから」
なにか話しがあるのだ。
「あなたは経営の近代化のために来たって言ってるんだけど」
「単に壊しているだけじゃないの？」
「よく考えてみたら」
「なにもしてないじゃない」
「柳株式会社を壊して斎藤倉庫株式会社を壊して」
「山上一郎の部屋を壊して」
「ゼンゼン経営の近代化とか遠いけど」
「あんた親会社の湯本化学から来てるから27歳なのに経営企画室長だけど」
「こんなんじゃチェリー株式会社はダメになるわよ」
網ノ目三郎は、何も反論しなかった。

網ノ目三郎は昨夜から、先里万丈『ソウルの縄文』を読んでいる。続編の『ソウルのマナティ』もダウンロードしてある。主人公の先ノ岬一葉とヨウミンソは、挑戦者らしい。ダメな組織を変革しているらしい。今日読んだ部分では、変革は、壊すことが難しいらしい。壊さないと新しいものはできない。いかに壊すかにかかっているらしい。網ノ目三郎は、今は、チェリー株式会社を壊している。確かに峠下冴子に批判されているとおりだと思った。

○梅岡玄蕃と美鈴千賀子
美鈴千賀子が月曜日と火曜日に経営企画室勤務なので、梅岡玄蕃に、火曜日に来ていただきたいと連絡した。月曜は、電源が切れてダメになったクレンジングの試料をつくっていた。
「今日は電源は切れていませんか？」
「先週は木曜に切れてたから」
「わたし網ノ目三郎さんを室長とか呼んでないんだけど」

「名前でいいです」
「梅岡さんも名前でいいんですか？」
「私も梅岡さんと呼びます」
「網ノ目三郎さんは山上本部長も山上さんですけどいいんですか？」
「どうしてですか？」
「役職は明日変わるかもしれないでしょ？」
「名前は変わりませんけど」
「湯本化学ではそうしてるんですか？」
「しばらく前から私がそうしてるんです」
「しばらく前って何ですか？」
「私は一旦死んで生き返った時にそうなったんです」
「なにを言っているのかわかりません」
「静岡駅まで迎えに行ってきます」

「前野課長が電話をいただきたいそうです」
「紹介します」
「梅岡玄蕃さんです」
「美鈴千賀子さんです」
梅岡玄蕃と美鈴千賀子は、すぐに、美鈴千賀子のクレンジングの話しをはじめた。網ノ目三郎は、前野完治の席に向かった。
「今日梅岡顧問がおいでになるようですので、マーケティングで調査した結果をお話ししたいと思いまして」
「クレンジングのことです」
「13時からお願いしていいですか？30分でいいですか？」
前川芳則もマーケティングにいる。柳株式会社の社長だった。前川芳則は、網ノ目三郎の顔を見て、手を挙げた。
「なんでしょうか」
「部品倉庫も商品倉庫のようにコンピューター化したいという話しですが」
「リアルにしたいのですが」
「仕入れの伝票を新しく作らないといけませんが」
「払い出しの伝票もです」

「西条朋子さんと阿仁屋和人さんと前川さんで相談させていただいていいですか？」
「時間をお知らせします」
網ノ目三郎は、西条朋子の席に向かった。
「明日水曜日の15時にしてください」
「阿仁屋さんに相談して連絡します」
網ノ目三郎は阿仁屋の席に急いだ。こういうところが、網ノ目三郎の生まれ変わったところだ。少し前だったら、メモにして後で処理した。今は、「鉄は熱いうちに撃て」になっている。
「前川さんすみませんが明日の15時にお願いします」
「すみせんが伝票の案をラフでいいですからつくっておいていただけますか」
「経営企画室のテーブルですか？」
「わかりました」
横辰八郎が、柳株式会社で使っていた会議用のテーブルを運んできた。
「前川さんにお願いして経営企画室に置くことにしました」
「ここでたくさん打ち合わせをしてください」
前川芳則も、こういうことも気に入らないだろうと思った。さっき言ったのは、嫌味だったのだ。
梅岡玄蕃と美鈴千賀子と網ノ目三郎は、同じテーブルでお昼を食べた、食堂である。
梅岡玄蕃と美鈴千賀子は、ずっと化粧品の話しをしている。美鈴が、これほどおしゃべりだとは思わなかった。どちらかというと、暗い感じだと言われていた。品質管理でも、ほとんどしゃべらないらしい。黙々と仕事をするタイプらしい。しかし、網ノ目三郎に映る美鈴千賀子は、ゼンゼン違う。
13時になって、前野完治がやってきた。クレンジングのマーケティング調査資料をコピーしていた。美鈴も一緒に聞いた。
「２００人の若い女性にアンケート調査したものです」
「クレンジングはみなさん使っています」
「クレンジングはＡ社の商品が圧倒的に強くて80％になります」
「残り２社が少しで、それで１００％です」

「最近は、クレンジングの売場はドラックストアーになってきていて価格も低下してきています」
「チェリー株式会社にクレンジングがあっても、買っていただけないだろうと思います」
「通信販売ではクレンジングは難しいです」
「いつ調査したものですか？」
梅岡玄蕃が聞いた。
昨年８月です。
「調査会社に発注したものですか？」
「そうです」
「いくらですか？」
「１００万円です」
「年間にいくら予算があるのですか？」
「１千万円です」
「この資料はいただいていいいのですか？」
「どうぞ」
まだ15分しか経っていなかった。
「チェリー株式会社がクレンジングを独自ブランドで開発すべきではないという意見ですか？」
「そうです」
「チェリー株式会社では、ここ５年間売上が減少し続けていますが、どうすればいいとお考えですか？」
「柳株式会社の販促部隊７名をもっと増やして底辺から底上げしないといけないと思います」
「商品に問題はないとお考えですか？」
「問題はないとは言いませんが、お客さんに良さを知っていただいていないと思います」
「社長が精魂込めてつくられた化粧品ですから」
前野完治のこのことばを聞いて、網ノ目三郎も美鈴千賀子も梅岡玄蕃も、何も話さなくなった。
「他にも調査しているようなので、来週また聞かせてください」

「承知しました」
美鈴千賀子がコーヒーを煎れてきた。
「なんでタイヘンなのかわかりました」
梅岡玄蕃の商品論の話しになった。２００名のアンケートにあるようなページで勝負をしたら、誰でもが、同じ結論を出す。勝ち目がない。しかし、商品は、新しい生活のシナリオライターだから、今のページと異なることをしないといけない。網ノ目三郎も美鈴千賀子も、そうだと思った。商品とはそういうものだと思った。
「そしたら〜新しいクレンジングがいいですか？」
「ホントはメイクは油だから、油は油でないと落ちないから、次に水で落とすといいんですけど」
「ダブルですか？」
「一般的になりました」
「クレンジングを油でやってセッケンを仕上げに使ったらまずいのですか？
「それでいいと思いますけどフツウになります」
「フツウですか」
「クレンジング箱とセッケン箱を重箱のように重ねて使うことはメンドーですか？」
美鈴は、マジマジと梅岡玄蕃を見ていた。クレンジングに重箱が出てくるとは思ってもみなかった。
「メンドーかもしれないけどおもしろいからやってみます」
クレンジング箱とセッケン箱の２つを試作してみることにした。

○部品在庫のコンピューター処理

水曜日の15時になった。前川芳則と西条朋子と阿仁屋和人が、経営企画室の会議用のテーブルに来た。
「部品在庫をコンピューターにしたら、私は常に部品の在庫を見れるの？」
いきなり、西条朋子が聞いた。
「柳では商品の在庫が見れないと注文を受けられませんので」
「じゃ〜お願いします」
「工場事務も部品の在庫を見れるのですか？」
「そのつもりです」
「これは仕入れ伝票のサンプルですけど」
「これは払い出し伝票のサンプルです」
「支払先を入れるんだから支払いがコンピューターになるんですか？」
「そのつもりです」
仕入れ伝票と払い出し伝票は持って帰って詰めることにした。
「また来週水曜日の３時にここに来ていただいていいですか？」
「前川さんお聞きしたいことがあるのですが」
「商品の在庫は数量だけですか？」
「そうです」
「在庫金額を入れたいのですが」
「どうするんですか？」
「標準原価を使います」
「４半期その標準単価で計算します」
「実際の原価ではないでしょ？」
「原価差額の計算を４半期に行って再計算します」
「原価の計算を行っているのはどこですか？」
「西条さんのとこだと思います」
「標準単価があって常に数量に標準単価を掛けて金額を計算するように修正

できるかどうか検討していただけますか？」
前川芳則は、仕方がないという態度で帰って行った。
網ノ目三郎は、忙しそうにしている西条朋子のところへ行った。
「わたし出かけるんですけど」
「明日時間ありますか？」
「11時からだったら」
「お待ちしています」
翌日木曜日に、西条朋子がやってきた。
「わたしのところコンピュータ化するのはいいけど、リストイラしたら刺しますから」
少し離れたところに座っている総務人事のみんなが、一瞬驚いた。
「刺してもいいです」
「約束します」
「それで何ですか？」
「商品の標準原価を計算したい」
「期末じゃまずいのですか？」
「ええ」
「期末にやっていることを４半期末にやって、都度再計算するのです」
「再計算って？」
「原価差額です」
「都度都度売上原価を計算したいのですか？」
「そうです」
「毎日？」
「都度都度です」
「わたし今より忙しくなるじゃないですか」
「そうかもしれません」
「前期末に手書きで商品の原価を計算したと思うのですが、それを見せていただけませんか」
「来週の水曜日の３時に見せていただけますか？」
「こんなんじゃリストラとかできませんよ？」
「刺してもいいです」

網ノ目三郎は、会計のことなど実践がない。学校だって夜学に通ってやっと卒業したばかりだ。必死になって本を読まないといけない。標準原価のやり方など、やったことがない。いかにも詳しいフリをしているわけではないが、西条朋子とはコミュニケーションがとれる。クレンジングの美鈴千賀子よりもコミュニケーションがとれる。今日は、先里万丈『ソウルの縄文』を読んでる場合ではなくなった。必死で原価計算を勉強している。標準原価も自動計算しないといけないとは思う。

○金曜の夜土曜の夜

金曜の夜だった。
いつものようにスーパーマーケットに寄って、カツオを買って帰った。何かがおかしかった。それが何であるのかわからなかった。カギがうまく入らなかったのだ。
部屋に入っても、何事もなかったかのように思える。習慣になっている。パソコンを立ち上げてメールを確かめる。パソコンがおかしい。網ノ目三郎は、白い、少し小さいブックタイプを使っている。何かがおかしい。幸いなことに、昨晩、メモリースティックに退避させておいた。メモリースティックは背広の中にある。取り出してみた。間違いない。立ちあがったが。何もない。しかし、何かおかしい。カンである。外部記憶装置が残っている。多分、クリックすると消えるだろう。何も差し込まれていない。自分が処理を誤ったのかもしれない。しかし、昨晩だ。今朝も立ち上げたが、何もなかった。だれかが侵入してこのパソコンから、何かの情報をコピーした。
網ノ目三郎は、すぐに、ロックをした。油断だった。そんなことなど、夢にも考えない。しかし、パソコンを持って行けばいいのに、なぜだろう。もしかして、これまでも、あったかもしれない。昼間にやってきて、パソコンから情報をコピーしたのだろう。
明日は、もう、このパソコンは立ち上がらない。ロックされている。そしたら、持ち去るのだろうか。
網ノ目三郎はこのアパートの管理会社に電話をした。

22時だった。やっと２つ目の部屋のカギがついた。電子ロックである。自分で番号が決められる。一致しないと開かない。証拠はないのだが、部屋に入られている。
「網ノ目三郎さんが負担してください」
仕方がなかった。アパートの管理会社に侵入されて証拠を示せなかった。
土曜日だった。
「空いていませんか？」
梅岡玄蕃に呼び出された。
渋谷を歩いた。化粧品を見て歩いたのだ。
「化粧品は得意ではない」
「だから現場見ないとわからない」
３時頃カフェに入った。まだ20そこそこの女性３人に近寄った。
「その化粧はいつ落としているの？」
いきなり梅岡が聞いた。おかしなことになった。しかし、３人の女性は、フツウに梅岡と話している。
「帰ってシャワー」
「帰ってお風呂で」
「帰って洗面台で」
「すぐに落とさないと気持がワルイ」
「１番困るのは、落としてまた出かけることになった時」
「彼でもブチ切れる」
「すっぴんではゼッタイ人前には出ない」
「どんなクレンジングを使っているんだ？」
「お金がないから安いのを使っている」
「ホントはこれを使いたい」
雑誌を見せてくれた。２４００円である。
梅岡玄蕃は封筒を３つ出して渡した。
「どうもありがとう」
「こういうのはチェリーで払います」
「友達だから領収書ももらえないからいいです」
梅岡玄蕃は60を過ぎていると思うのだが、あの若い女性３人を友達と言っ

た。よくわからない人だと思った。
お礼にと食事を誘ったのだが、いつものように断られた。
それでも19時30分になっていた。まだスーパーマーケットが開いていた。
今日もカツオにした。ごはんを炊かないといけない。駐車場から黒いバンが出てきた。ライトがきつかった。アッという間に近寄った。まさかと思ったが遅かった。新橋の時と同じように、車にはね上げられた。多分跳んだのだと思った。一瞬気を失った。
「網ノ目三郎さん」
誰かが叫んだ。千鶴だった。
「飛ばされるの見ました」
立ちあがってみた。
「何かあったらいけないから病院に行きましょう」
「平気だと思う」
「わたしの車で行きましょう」
千鶴は、カツオの買物袋を持っていた。
「服も汚れていなしホントですか？」
看護師は、忙しいのにやっていられないという態度だった。それでも、診察らしいことはしてくれた。
「何かあったらいけないので診察券を渡しておきます」
22時になっていた。誰かがやってきた。
千鶴だった。
「ごはん食べてないでしょ？」
「お母さんごはん食べて眠ったから」
網ノ目三郎は、部屋に入って何もしていない。ショックが大きかった。多分、新橋で起こったことも、今日と同じだったのだろう。誰かが襲っている。たまたま気づくの早くて、車に跳び上がっているが、はねられたら、死んでいるかもしれない。
「お米はどこですか？」
「汚いな〜」
「カツオはどうしたのですか？」
「冷蔵庫です」

千鶴は、冷蔵庫から豆腐を出して味噌汁をつくっている。カツオを切りはじめた。
不思議な光景だった。網ノ目三郎は、ただテレビを見ていた。
「気分でもワルイのですか？」
「いいえ」
「どうしてごはん炊かなかったのですか」
「ありがとう」
おかしな返事だったが、ありがとうしかなかった。
先里万丈『ソウルの縄文』のとおりだ。挑戦者は狙われる。生き残れない。
網ノ目三郎は怖くなったのだ。急に怖くなった。３度あることは４度ある。
「わたしも一緒に食べる」
「ホントに１人で住んでるのね」
どんぶりにごはんをよそった。
網ノ目三郎は、ほとんど食べることができなかった。
「先日新橋でも同じことがあった」
「先日帰りの車道でも右腰に当てられて飛ばされた」
「あなたは狙われてる」
「怖くてごはんも食べられないのか」
千鶴は、フツウのようにどんぶりのごはんを食べていた。
「おにぎりにしておくから」
「お刺身は冷蔵庫」
「シャワーできるの？」
千鶴は、シャワーを出してきた。
「身体よく視てきて」
「看護師さん脈診ただけだから」
もっともだと思った。
網ノ目三郎は全身よく視た。どこにも傷はない。
「え？」
網ノ目三郎は驚いてしまった。千鶴が入ってきた。全裸だった。
「視てあげるから」
千鶴は髪の中をよく視た。

「どこも痛くないの？」
「よくあれで頭打ってないよな〜」
千鶴に全身を見られて、網ノ目三郎はガマンできなくなっていた。
「ダメダメ」
「どこかぶつけてないか探してるんだから」
「こんだけ元気いいから何もないかもしれない」
「頭洗って身体洗って」
「わたしも洗う」
網ノ目三郎はもうずっとおかしい。ずっとおかしいのだが、眠気も襲ってくる。
「何かない？」
パジャマを出した。千鶴は、何も着けずにパジャマを着た。
網ノ目三郎は、千鶴がどうするのか、よくわからなかった。自分の服を着ない。網ノ目三郎は、今日が土曜日で助かったと思った。急にめまいのような睡魔に襲われた。
千鶴は、フトンを開けた。網ノ目三郎は、そのまま崩れるようにフトンに入った。
息苦しかった。何時かわからない。千鶴の唇が網ノ目三郎の唇を塞いでいた。
「ワルイ〜うなされててウルサイ」
汗がビッシリだった。
千鶴は、バスタオルで網ノ目三郎を拭いた。網ノ目三郎は元気になっていた。お腹も空いていた。千鶴は、拭くのを止めて、パジャマを脱いで、フトンに入ってきた。

２人でシャワーを浴びた。
網ノ目三郎は、ことばがない。どうしたらいいのかわからない。お腹がペコペコだった。千鶴はすごい美人だが、身体もキレイだ。少し前まで抱いていたかと思うと、惜しくなってしまう。
「あなたのオンナになったとか思わないで」
「今日は、こうしたかっただけだから」

「あなたのお腹は鳴るのか」
千鶴は、さっさと出て行った。網ノ目三郎は、あまりのキレイさに後姿を見とれてしまった。
千鶴は、自分の服を着てラーメンをつくっていた。
「あなたはおにぎりとカツオにして」
「あなたは挑戦者っぽいから狙われる」
「挑戦者やるんだったら覚悟しないといけない」
「今日みたいに、怖くなってごはん食べられないようじゃ殺られる」
「あなたが殺られたらわたしはしらん顔はしないから」
「どうするんですか？」
「亡骸引き取ってあげる」
「ありがとう」
「人間って〜そういう人がいないと覚悟できないから」
「わたしのことはゼッタイに内緒にしないとダメ」
「あなたは、わたしが狙われたら命差し出す」
「車はどこに置いているのですか？」
「タクシーで来た」
網ノ目三郎は時計を見た。４時だった。そろそろ明るくなる。
「わたしはこのまま揚げ物屋さんに行く」
「働く」
「ここから近いから誰にもわからない」
「いただきます」

○会計伝票
千鶴は日曜なのに、揚げ物屋で働いていると思った。網ノ目三郎は、パソコンで、先里万丈『ソウルの縄文』を読んでいた。多分、千鶴は、先里万丈をすべて読んでいる。まだ19歳である。チェリー株式会社に勤めていながら日曜は揚げ物屋で働く。苦難の人生だったのだろう。母親は入院している。先里万丈『よろい』を教えたのも千鶴だった。捨てることを教えたのも千鶴だった。網ノ目三郎は富士山から帰った時に、蘇った。生き返った。生まれ

変わったと思った。しかし、昨日は、なんともいえない恐怖に縮こまった。千鶴は、そういう網ノ目三郎を、たまたまだろうが、観ていた。そして、挑戦者を教えた。世の中に、挑戦者がいることを教えた。挑戦者は殺られることを教えた。挑戦者やるんだったら覚悟しないといけないことを教えた。19歳の千鶴はなんなんだ。
お昼を揚げ物屋で食べたいと思った。千鶴の顔が見たい。一旦は、着替えたのだが、止めた。千鶴の言ったことを、よく考えないといけない。千鶴が狙われたら苦しい。
「あなたはわたしが狙われたら命を差し出す」
なぜ千鶴は、こういうことがわかっているのだろう。読めるのだろう。しかも、可能性があることを知らせることができるのだろう。不思議である。網ノ目三郎は27年生きてきたが、命を狙われたことなどない。苦しいことばかりだが、昨日のことに較べたら、平穏である。たいしたことではない。
網ノ目三郎は、千鶴に、安易に会ってはいけない。いつものように、ラーメンをつくった。
翌日、美鈴がおもしろいものを持ってきた。５センチ四方くらいの重箱が２つである。おそば屋さんのダシの入れ物で買ったといった。２つで８００円だったといって、レシートを差し出した。そのまま、美鈴千賀子は、実験室に向かった。試作したクレンジングができているらしい。
網ノ目三郎は、西野八郎田のところに向かった。経理部長である。峠下冴子が後で聞いていた。
「経営企画室でお金を使いはじめて気がついたのですが」
「会計伝票があった方が便利だと思うのですが」
「一覧表に記入してまとめて現金をもらっているのですが、立て替えしている人も違う人だし」
「小野君に話してください」
「わたしと峠下取締役は銀行に出かけますので」
小野天智は、30半ばだと思われるが、どういう考えを持っているのかわからない。
「おうかがいします」
すごい女性っぽいと思った。男に、「おうかがいします」と言われたことが

ない。
「会計伝票は４年くらい前から検討しています」
「これが案です」
「どうして伝票にしなかったのですか？」
「やり方が変わるとイヤがるから」
「誰がイヤがるのですか？」
「社員です」
網ノ目三郎は、前川芳則のところへ向かった。
「１分で済みますので」
忙しくて困るという顔をする前川芳則に話した。
「柳株式会社では会計伝票があったのではないですか？」
「手書きの一覧表になって不便です」
「これが経理でつくっていた会計伝票の案ですけど、前川案をつくっていただけませんか」
「コンピューターで処理するのですか？」
「ええ」
「明後日の水曜日にまとめて話しましょう」
忙しそうな前川芳則に会計伝票案を預けてきた。
「お昼ですけど」
「後で食べます」
美鈴は、実験室で何かをやっていた。測定しているのかもしれない。網ノ目三郎に手伝ってくれとは言わなくなった。頼りにならないことがわかったのかもしれない。ジャマになるだけだ。
網ノ目三郎は、１人で食堂でごはんを食べた。ナスの味噌煮だった。おいしかった。遠くで、千鶴の声がしていた。仲間と話している。千鶴の声だけが耳に刺さる。

○部品在庫と会計
「これ１回目の試作だけど梅岡玄蕃さんに送っていいですか？」
美鈴は、油性クレンジングの試作ボトルを、梅岡玄蕃に送った。自分が買っ

て来た、重箱のようなおそばのつゆ入れの写真を送った。どういう意味なのか、梅岡玄蕃はわかる。
月曜も火曜も、網ノ目三郎はバスに乗って帰った。バスが安全である。アパートも、侵入された形跡はない。二重のドアにした。防備を固くすれば固くするほど、自分が狙われるかもしれないと思った。それにしても、誰が襲っているのだろう。何のために襲っているのだろう。さっぱりわからない。自分が、チェリー株式会社で、挑戦者っぽい動きをしていることは、理解している。意識している。しかし、先里万丈が言っている、見えざる悪魔がわからない。何の悪魔なのかわからない。その悪魔が、網ノ目三郎を襲っている。３度も襲った。多分、４度目もある。
水曜日３時に、前川芳則と西条朋子と阿仁屋和人がやってきた。西条朋子は、仕入れ伝票を持っていた。
「仕入先２４０社あるから０００01から００２４０まで書き出しておいた」
「部品は３２０あるから同じようにジャンルに分けて書き出しておいた」
「単位って何ですか？」
「個もあるし枚もあるしグラムもあるしキログラムもあるから」
「仕入れ単位」
「その単位で仕入れ単価が決まっている」
「値引きとかあるでしょ？」
「だから仕入れ伝票には仕入れ単価が必要」
「毎回変わる可能性もあるんだ」
「じゃ〜部品在庫の金額はすべて実際の仕入れ金額でいいのか」
「払い出す時は平均単価に数量を掛け算して払い出します」
「部品在庫の金額はこれでいいんだけど商品在庫の金額はどうしますか？」
「これは３月末時点での商品単価です」
「商品の数は90あるから部品毎に積み上げました」
「期末に評価に使った単価だ」
「これを４半期毎に計算し直せますか？」
「コンピュータにやってもらわないとできない」
「じゃ〜こっちでやります」

「原価差額にしないといけないから」
「売上の払い出し数量に掛ければいいのですか？」
「４半期末毎に」
「網ノ目三郎さんメモしてくれてますか？」
網ノ目三郎は、パソコンに直接会議録を書いていた。
「部品の払い出しの数量は単位と合ってるんですか？」
「それは合っています」
「生産事務は払い出し伝票に替えるだけです」
「払い出し金額はコンピューターが計算するのでいいです」
「品質管理で使ったりするから経費になる払い出し伝票も必要です」
経理の小野天智が来た。
「会計伝票もやりますのでお願いします」
「これは柳株式会社の時に使っていた会計伝票です」
「このまま使えます」
「部署だけつくりました」
「人事総務が01で経理が02です」
「交通費や交際費などもそのまま使えます」
「毎回この伝票を書くのですか？」
「レシートか領収書を添付してください」
「個人に払うのでしょ？」
「今は部署に払ってますけど今度は個人です」
「個人番号があるんだ」
「総務人事にお願いして全員の番号が必要になります」
「私がお願いしておきます」
「来週水曜日の３時でいいですか？集まっていただいて」
網ノ目三郎は、そばで聞いていたであろう総務人事に行った。
「すぐ来ると思っていました」
横辰八郎が言った。
横辰八郎は、有吉里子にメモを渡していたらしい。
「柳株式会社は給与の計算もコンピューターでやっていたので、同じようにしてください」

「個人のコードはつくってありますから」
有吉里子は、ずっと、網ノ目三郎と話しをしないようにしていた。食事券を渡す時も、黙って受け取っている。やっと話しをしてくれた。
「給与の計算の仕方は同じですか？」
「同じです」
網ノ目三郎は驚いてしまった。柳株式会社が、給与の計算までコンピューターを使っていたとは知らなかった。

○現金で払うからコストを下げてくれ
おかしな話なのだが、柳株式会社の持っていた現金と預金が、チェリー株式会社に合算されて、１億２千万円になった。完全な遊び金だった。このお金を使えば、親会社の湯本化学への支払いのジャンプをしなくて済む。網ノ目三郎は、違う道を考えていた。
金曜日だった。西条朋子のところへ向かった。いなかった。
「16時に帰るから経営企画室に行きます」
網ノ目三郎は、何度も計算をしていた。
「仕入れ伝票をコンピューター処理するんですけど」
「買掛金もやりたい」
「柳株式会社で持っていた１億２千万円の現金預金が浮いているので、それを使って、支払いを現金にしたい」
「交渉して単価を引き下げて欲しい」
「湯本化学は金額が大きいので次回にする」
「未払い費用も同じようにやって欲しい」
「柳にそんなお金が眠っていた？」
「斎藤倉庫にも？」
「斎藤倉庫は収入があるわけではないので現金預金は少なかったんです」
「湯本化学にジャンプしてもらっている金額と同じでしょ？湯本化学が返せって言います」
「私が交渉します」
「網ノ目三郎さんの交渉がうまくいったらわたしが責任もってコストを下げ

ます」
「１億２千万円で足りますか？サイトをゼロにするんだけど」
「足りるでしょう」
その夜、網ノ目三郎は、神田五郎に、手紙を書いた。
思わぬ合併の浮き金なのだが、本来なら、湯本化学に返すお金だが、今回は、買掛金と未払い金の現金支払いに使わせて欲しいという内容である。合併してもっとスリムになるので、遠くない時期に１億２千万だけではなくて、湯本化学への支払いも、現金にできると考えているという内容だった。
翌日、神部五郎からメールがきた。
「決して、１億２千万以上に、ジャンプの金額を大きくするな」
「１億２千万より大きくなったら、私も責められる」
チェリー株式会社のメールを自宅に転送している。
ここのところ、バス通勤をしている。少し遅くまでやっていたい時もあるのだが、暗くなると危ない気がする。バスが安全である。
梅岡玄蕃からメールがきた。
「明日の土曜に渋谷で待っている」
「10時に待っている」
「場所はこの前のカフェだ」
「遅くなると襲われるから朝にした」
網ノ目三郎は驚いてしまった。先週の土曜日に、網ノ目三郎が近所のスーパーマーケットで襲われたことを言っている。どうなっているのだろう。
「おはようございます」
すでに梅岡玄蕃はカフェにいた。
「お昼とも朝ともつかないごはんなんだけど」
「もうすぐこの前の３人が来ますから」
「メールで、遅くなると襲われるとありましたが、あれは何ですか？」
「襲われたんでしょ？」
「どうして知っているのですか？」
「話せません」
「３度も襲われています」
「４度もあります」

「どうしてですか？」
「わかっているんでしょ？」
「私のやっていることが、誰かにとってよくないことなんだ」
「誰かではなくて、その集団か個人の見えざる悪魔にとってです」
「よく考えてみてください」
「ゼンゼンわかりません」
「わからないと防げません」
「どうすればいいですか？」
「あなたに勇気があれば、肉を切らせればわかります」
これはタイヘンなことになっている。梅岡玄蕃は、すべてを知っている。
「こうなることがわかっていたのですか？」
「あなたはこうなると思っていました」
「どういう意味ですか？」
「未発達な挑戦者だから」
「挑戦者は生き残れない」
３人の渋谷の娘がやってきた。
「けっこう化粧落ちがよい」
「もっといっぱいくれないか」
「これだったら洗面台でも短時間にできる」
網ノ目三郎は、多くつくって梅岡玄蕃に送る約束をした。美鈴千賀子の油性クレンジングは、初回から好評だった。
「今日はお昼代だけにしてくれないか、お金がないから」
「いいよ？」
60を過ぎている思う梅岡玄蕃が、渋谷の娘と、こういう会話をしていることが、網ノ目三郎には不思議である。この日の支払いは、すべて網ノ目三郎が払った。

○肉を切らせてみる

遅くなったら襲われるからと、早い時間にしてくれた梅岡玄蕃だったが、勇気があったら肉を切らせろと言った。わざと襲わせろという意味だ。しか

し、網ノ目三郎には、全くわからない。誰かが跡をつけていることすら、読めない。カンも働かない。
渋谷から山の手線で品川に向かおうとした。まっ昼間である。１時頃だ。上野方面の電車が止まった。品川方面の電車もやってきそうである。何気に、止まっている上野方面の山手線を見ていた。窓ガラスが鏡のようになっていた。誰か、素早く動いた。黒っぽい服装をしている。網ノ目三郎に向かっている。瞬間に網ノ目三郎は振り向いた。黒っぽい服装の男は、帽子をかぶっていてマスクをしていた。網ノ目三郎にぶつかった。
「失礼」
若者ではなかった。失礼とは言わない。もし網ノ目三郎が振り向かなかったら、線路に落されていたのだろうか。危なかったが、少しはわかった。網ノ目三郎は、若くはない、「失礼」と言う男に狙われている。
網ノ目三郎は新幹線の中で、考え込んでしまった。たまたま、渋谷で、肉を切らせることになってしまった。「失礼」と言う男に襲われている。しかし、なぜだろう。網ノ目三郎がやっていることは、命がどうとかいうようなことではない。単に、チェリー株式会社のゴタゴタだ。網ノ目三郎は、チェリー株式会社を近代化しようとしている。ひょっとすると、みんなに良いことではないか。殺されるようなことではない。

○セッケン
もし千鶴を抱かなかったら、こう強くなれてはないかもしれないと、最近思う。おかしなことだが、千鶴を抱いて思い残すことがないかのようだ。
「あなたは覚悟ができない」
やっと覚悟ができたのかもしれない。ほんの少し前まで、怖くてごはんも食べられなかった。誰かが狙っているのだ。それも、命だ。怖いのがあたりまえだろう。
「亡骸を拾ってあげるから」
千鶴とは何だろう。
日曜日は午前中にスーパーマーケットに行った。ハンバーグをつくった。少し小さ目のハンバーグを作って冷凍した。午前中は、何かしら安全な感じが

する。
「まだ乾燥してないんだけど」
美鈴千賀子は、試作したセッケンを持ってきた。
「コストを無関係にしたらいいセッケンがつくれる」
網ノ目三郎には、よくわからない。
「材料とかあるのですか？」
「セッケンつくってるんだから」
現在生産しているセッケンと新しく美鈴が試作しているセッケンの何が違うのか、よくわからない。
「油性クレンジングをもっと欲しいと頼まれましたけど」
「今日つくります」
「重箱とどうするのですか？」
「重箱押したら出てくればいいんでしょ？クレンジングが」
「プラスチックの箱なんだ」
「セッケンはセッケン箱なんだ」
「モデルつくりたいけど」
「いくらくらいかかるのですか？」
「２つで６万円くらいかな」
「じゃ〜お願いします」
「いいのですか？」
「ええ」
網ノ目三郎には、重箱を押したら出てくるクレンジングなど、イメージができない。イメージができなかったら任せるしかない。
「これ梅岡玄蕃さんに送りますから」
「セッケンだから網ノ目三郎さんも使えますけど」
「このセッケンはどこが違うのですか？」
美鈴は、メモリースティックを取り出して、網ノ目三郎のパソコンにコピーした。スライドである。
保湿に優れているらしい。
「洗い流してキレイにして保湿してが大事です」
網ノ目三郎は、美鈴が試作したセッケンを使うことにした。ヒゲそりだっ

て、なんだって、セッケンはたくさん使う。
網ノ目三郎は、残念なことに、商品の価値がわからない。
「これは売れるだろうな〜」
渋谷を歩いていて、時々、梅岡玄蕃が言うことばを、すぐに理解することができない。どうして、そういうことが閃くのか、わからない。この、美鈴が試作している油性クレンジングやセッケンが、売れるかどうか、判断できない。
梅岡玄蕃が持っているものも、１つのノウハウなのだろう。

○西条朋子の凄さ

７月最後の水曜日３時だった。前川芳則と西条朋子と阿仁屋和人と小野天智と有吉里子がやってきた。
「まだ２４０社ゼンブと交渉したわけではないが、現金支払いとコスト引き下げの交換は、うまくいく」
「いつから実行するのか」
「峠下冴子さんには話した」
「１億２千万円は浮き金なので銀行に話してもらった」
「来月の支払いから実施してください」
「経営会議の議題にしないでいいのか」
「来週月曜日の経営会議で説明させていただきます」
「未払いの経費の支払い先も同じですか？」
「同じです」
「湯本化学だけは従来のサイトでお願いします」
「30日延ばしていますのでそれを通常にしてください」
「支払一覧表がつくれるけど」
前川芳則が言った。
「お願いします」
西条朋子は、３２０社すべてに出した、支払いを現金化する調査検討願いのコピーを全員に渡した。
「みなさん、支払いが滞るかもしれないと恐れているから、この文書にビッ

クリです」
確かにそうなのだ。何年も、販売数量が増えない。もう、新しい会社を発掘しないと、チェリー株式会社に頼っていては、工場が成り立たない。そこに、この西条朋子の文書である。驚いただろう。
「仕入れ伝票は９月１日から新しくしてコンピューターで処理して、支払一覧表をつくります」
「部品在庫も同時にはじめます」
「工場事務の部品在庫の払い出し伝票も、９月１から実施します」
前川芳則が言った。
「これは商品の単価の計算用紙ですけど」
前川芳則がみんなに渡した。
「西条朋子さんの期末計算を、コンピューターでできるように工夫したものです」
多分、前川芳則は、土曜も日曜も出勤している。どうしてだろう。網ノ目三郎は、不思議ではあった。
「まだ資材費の積み上げだけなので商品原価にするには、人件費や償却費を配布しないといけませんが」
「来週の水曜日に、経費の配布の相談をすることでいいですか？」
「商品原価の資材費の積み上げはできるのでその数値は確定させていただけますか」
「４半期の最終日に自動計算するということで」
「そこまでやるのですか？」
「部品の仕入れや払い出しが、実際の単価になっていますので」
「来週の水曜日までにやっておきます」
「毎日の商品の生産数はやっているのでしょうから」
「それがなければ通信販売の受注ができません」
「じゃ〜積上げ計算ができますから」
「これは新しい会計伝票です」
「９月１日からこの会計伝票に変更します」
前川芳則は、小野天智に新しい会計伝票の記入の仕方を説明してもらった。
「全員に個人口座をつくりますので、月曜に、経営会議が通ったら、社内に

案内します」
小野天智が話した。
「給与の振込も同じ講座でお願いします」
有吉里子が話した。
「社員の番号は、封書で全員にお知らせします」
「給与の計算も柳株式会社の方式ではじめます」
「社員の方は、いままでどおり、タイムカードでお願いします」
「１番変わるのは、給与振り込みになることです」
網ノ目三郎は、現金封筒でもらう給料に困っていた。助かる。
事実上、社内の処理をコンピューターに変更する作業が進んでいる。集まるともなく集まってしまった。湯本化学だったら、プロジェクトチームの結成について、起案書を出せと総務に言われる。網ノ目三郎は、そんなことは何もやっていない。しかし、仕事は、どんどん進んでいる。
しばらく前に、三枝伸治の40人削減案のコンピューター化計画を、自分が持ち上げて沈没したことが、遠い昔のようである。
あの頃といっても、ほんの少し前なのだが、まるで違う人間だったように思えるし、恥ずかしい。
あそこで、ひょっとすると、網ノ目三郎は、餓死したかもしれない。餓死してもいいと思ったかもしれない。それくらいに、落ち込んだ。すべては千鶴だ。千鶴がいなかったら、網ノ目三郎は餓死していた。
どうして山上一郎と三枝伸治の話しに乗ってしまったのか、不思議である。思い出したくもないが、事実だ。
それにしても、あれだけ嫌われて無視されて、誰も話しをしてくれなかったのに、今は、どうなったのだろう。どこでどうなったか、網ノ目三郎には、よくわからない。なぜ、みんな、水曜日に集まるのだろう。どうしてどんどん作業を進めるのだろう。ゼンゼンわからない。

○静岡の男
支払いの現金化など、よく説明しないと反対が出る可能性がある。経営会議の説明のスライドをつくっていた。

「渋谷に出てきませんか？」
「セッケンの使用感を聞こうと思うんだけど」
「暗くなると襲われるから11時に待っています」
「５人に昼をご馳走しないといけない」
「私がもちます」
最近は、土曜日は、いつも梅岡玄蕃と一緒である。誰かが、またどこからか視ているのだと思った。監視されている。今日も危ない。
美鈴は、セッケンの試作を５個送ったのだろうか、５人やってくると言っていた。梅岡玄蕃は、よくわからない。どういう人間なのか、さっぱりわからない。網ノ目三郎とは、かけ離れたところに位置する人であることは確かである。
網ノ目三郎には、渋谷で５人も、若い娘をカフェに集められない。みんな、嫌がっている風でもない。お金になるから来ているわけでもない。この前の土曜日には、３人の娘にお昼をご馳走しただけだ。今日も、多分、５人の娘に、お昼をご馳走するだけだろう。
新幹線の品川駅で降りて、１両歩いて、ベルが鳴ったので、また新幹線に乗った。２両先に、慌てている男がいた。網ノ目三郎には、それが誰だかわかっていた。先週の土曜日、「失礼」と言った男に間違いない。
「品川で降りないで東京駅まで行きますから、少し遅れます」
「静岡の男ですか？」
「そうだと思います」
梅岡玄蕃は、まるで、一緒にいるかのように、状況が読めている。多分、網ノ目三郎が、今日も狙われることを知っているのだ。そして、今の電話で、その男が、静岡の男であることを知ったのだろう。
「遅くなりまして」
「お先にいただいています」
網ノ目三郎が遅くなりそうなので、先にお昼を食べていた。
特性ハンバーガーらしい。中身を選択できるようである。
「向こうで選んできてください」
先週もいた若い娘が、網ノ目三郎に言った。
豪華なハンバーガーである。

網ノ目三郎は、こういう席にいたことがない。若い娘が５人いるような場面がない。どう考えても、網ノ目三郎よりも10歳か７歳か、若い娘だ。それにしても、梅岡玄蕃は、60を越えていると思えるのだが、違和感がない。特別、若向きのファッションをしているわけでもない。よくわからない。
「このセッケンで顔を洗って寝たらクリームが必要ないかな」
網ノ目三郎は、意味がよくわからない。
「保湿がすごいという意味です」
梅岡玄蕃が、いかにもわからないという顔をしている網ノ目三郎を見て、手助けした。
「フツウは、寝る前に保湿クリームをして寝ます」
「もしセッケンのままだったら、朝は、顔がカラカラです」
誰からとなく言いはじめた。
「顔の角質に水があるかどうか重要です」
「美顔のポイントです」
慌ててメモを取り出そうとしたが、梅岡玄蕃が止めた。
「夕方、先週のクレンジングと一緒に、わたしが、メモをメールしますから」
録音でもしてるのだろうか。よくわからない。
おかしなもので、土曜日に、こうやって若い娘の話しを聞いていると、次第に、自分がリアルになってくる。机上で化粧品市場なるマーケティング資料を読んでいる感覚ではなくなる。
「左を見て、わたしの軽がある」
「その隣の黒いセダンがあなたがスーパーマーケットから出るのを待ってる」
すき焼きをしようと思った。牛肉を買っていた。千鶴から電話である。どうして千鶴がここにいるのかよくわからない。
支払いをして、袋を持って、外に出た。左を見た。千鶴の軽があった。かなり遠い。黒いセダンが発進していた。千鶴は、どうしてこの男だとわかったのだろう。忘れ物をしたフリをしてスーパーマーケットに振り向いて止まった。黒いセダンも急ブレーキをかけて止まった。黒のサングラスにマスクだった。渋谷で「失礼」と言った男だ。今日の朝の品川の新幹線の男だ。お

互いに、顔を合わせていた。
「どうもありがとう」
「あの服装はワルだと思った」
「今日の朝も品川で会いました」
「あなたの仕事が進めば諦めるから」
それだけ言うと、千鶴は電話を切って、車を発車させた。この男に千鶴を知られたら、この男は千鶴を襲うだろうと思った。それにしても、「あなたの仕事が進めば諦めるから」とは、どういう意味だろう。千鶴も、よくわからない人だ。
すき焼きを食べていた。梅岡玄蕃からメールが来た。先週のクレンジングと今日のセッケンのメモである。ワードで長文だった。録音でもしていたのだろうか。

○経営会議
「重箱のモデルが完成しました」
美鈴は、６万円の納品書と請求書を持ってきた。
「これです」
上の重箱は、ポンプのようなモノが出ている。丸い重箱だ。
「輪島クレンジングと輪島セッケン」
「輪島の重箱」
「輪島は重箱のイメージだけですか？」
「プラスチックですから」
「輪島塗りの人が怒るかな」
「じゃ～重箱と言うのは止めます」
「輪島クレンジングと輪島セッケンはいいです」
「どういう意味ですか？」
「輪島のプラセンタを使いますから」
「え？」
網ノ目三郎は、何を言われているのかわからなかった。
「これ８セットつくったんです」

「簡易金型だから多くはつくれないけど」
「輪島のプラセンタを入れました」
「これがコンセプトシートです」
美鈴は、コンセプトシートとワードらしきものを、自分のメモリースティックから網ノ目三郎に移した。
「プラセンタって胎盤のことですか」
「輪島のブタさんの胎盤です」
「プラセンタってどういう意味があるんですか？」
「ワードにしましたから読んでください」
「梅岡玄蕃さんにも送りますから」
「５セット送ってください」
「このコンセプトシートとワードも送ってください」
神部五郎も来て、経営会議がはじまった。
柳株式会社の現金預金の１億２千万円を現金支払いの資金にする案は、神部五郎の「わかりました」で、そのまま、通過した。給与振り込みも、会計伝票のコンピューター化もなにもなかった。仕入れと払い出しは、専門の部署がやることなので、反対もなかった。誰も、リストラ案など出さなかった。
「それはいいけど、新しい商品が出なければやってる意味がないのだが」
神部五郎が言った。
網ノ目三郎は、美鈴を呼びに行った。
「申し訳ないんだけど、さっき私に話した話しを、経営会議でしてほしいんだけど」
「まだ決まりではありません」
「わかっています」
「まだ決まりではありませんし、修正もすることになるのでしょうが」
「クレンジングとセッケンを手掛けていますので、進行状態を美鈴さんに説明してもらいますので」
網ノ目三郎には、自信があった。美鈴について自信があった。美鈴は、化粧品について、自分の考えを持っている。網ノ目三郎が、よくわからないから説明が少ないだけだ。
「10分でお願いします」

「スライド使っていいですか？」
経営会議でＰＣスライドを使うのは、２度目である。前回、網ノ目三郎が、チェリー株式会社と柳株式会社と斎藤倉庫の合併案の説明で、はじめて使った。
さっきは、美鈴のコンセプトシートをよく見なかった。美鈴千賀子は、キレイに、パワーポイントでコンセプトシートがつくれる。
現在のチェリー株式会社の化粧品は、すべてが、社長の山上郁夫の開発したものだ。新製品が出ないのも、当然と言える。何をやっても、山上郁夫に逆らうことになりそうだからである。
「社長いかがでしょうか」
永田峰雄が聞いた。一瞬、だれも声を出さなかった。
「試作ができたら私が使ってみます」
意外な反応だった。
「ここに１セットあります」
「輪島プラセンタを使っています」
「後で説明に来てください」
おかしなことになっている。みんな、山上郁夫に拒否されると思っていた。どんな商品をつくっても、山上郁夫には敵わない。チェリー株式会社をここまでにした人だ。
「社長だからってハイと言わないでください、美鈴さんが納得しているのだったらいいけど」
「梅岡さんがダメって言うんじゃないですか？社長がおかしなこと言っても」
美鈴は、やはり、フツウではない。吹っ切れている。

○８月に入って固定資産
水曜日の３時になった。前川芳則と西条朋子と阿仁屋和人と小野天智と有吉里子がやってきた。
「現金支払ですが、まだ価格交渉が間に合わないところがありますが、９月30日支払いからすべて振込にします」

「未払い費用の支払先も同じです」
「仕入れ伝票は印刷に回していますから、３２０社の仕入れ先に案内します」
「納品書と仕入れ伝票が一緒に綴られています」
「９月１日からコンピューターで処理します」
「12台のパソコンを発注しました」
「１人１台です」
「部品の払い出し伝票も印刷しています」
「こちらは社内でしか使わないので簡単なモノです」
「パソコンを４台発注しました」
「会計伝票も印刷しています」
「社内で使うだけなので簡単なモノです」
「総務人事から個人番号が連絡されています」
「銀行口座を全員新しくつくりますが現在進行中です」
「９月１から経費を使った人に伝票を書いてもらいます」
「上司のハンコが必要です」
「自分でコンピューター処理します」
「経理に５台のパソコンを発注しました」
「給与計算は９月15日締めのタイムカードからコンピューターで計算します」
「人事総務は４台のパソコンを発注しました」
「人事総務では、未払いでモノを購入する時に、経費になるか、資産になるかの判断をする文書をつくりました」
有吉里子は、その文書を全員に配った。
会計伝票で、資産になる場合だけ、この伝票も記入していただくことにしました。
「資産もコンピューターにするのですか？」
「原価償却もコンピューターで計算します」
「部品在庫と同じように、８月末にたな卸しをやって、帳簿を、コンピュータに入れます」
「償却費は経費になりますが、原価に係る償却費の場合は、原価計算で、配

賦される商品を決めておきます」
「工場人件費は、工場生産商品の全商品に均等に配布します」
「人件費や償却費の仕訳伝票は、コンピューターが月末に自動でつくります」

かなり大事なことをやっているのだが、１時間半くらいで打ち合わせが終わってしまう。たまたまだが、柳株式会社と斎藤倉庫で、コンピューターをフル使用していたとはいえ、こんなにスムースに、チェリー株式会社の中でのコンピューター化が進行するとは、予想しなかった。すでに８月に入ったとはいえ、９月１日からの実行については、誰も、ムリだは思ってもいない。反対もない。
網ノ目三郎には、不思議だった。自分が山上一郎や三枝伸治の意向を受けて、湯本化学で、40人のリストラ案で、チェリー株式会社のコンピューター化を提案して沈んだことが、とても昔のように思えてしまう。チェリー株式会社の全員が、網ノ目三郎を無視した。網ノ目三郎も、大きな挫折感を味わった。
それが、８月の最初になって、このような事態になっていることに、驚かないわけにはいかないだろう。何がどうなったのだろう。網ノ目三郎は、まだ、事態がよくわかっていない。
西条朋子は、網ノ目三郎に何かを聞いてくるわけでもなく、３２０社の仕入れ先と現金支払いとの引き替えでの、価格の交渉を行っている。新しい仕入れ伝票処理ついて、分散して仕入れ先の担当者を集めて、記入の仕方の説明会を行っている。有吉里子は、社員への説明会を、毎日行っている。給与が振り込みに変わるのだ。経費だって、自分の口座に振り込まれる。網ノ目三郎に応援に来てくれという依頼などない。

○輪島クレンジングと輪島セッケン
「網ノ目三郎さんは、経営の近代化のためにチェリー株式会社に来ましたと言っているそうだけど」
「今はどう言うのですか？」

梅岡玄蕃から、また渋谷に来ないかというメールがあった。輪島クレンジングと輪島セッケンの意見を聞きたいからだそうだ。
「今日は５人の渋谷の娘に来てもらう、お昼をご馳走するので、お願いしたい」
網ノ目三郎は、10時にカフェに来るように、梅岡玄蕃に頼んだ。聞いてみたいことがあるからだ。５人の渋谷娘は、11時にやってくる。
「私がチェリー株式会社にお世話になって、経営の近代化が進んだと言われるようだと、非常にうれしいです」
「どうして最初から、そのように言わなかったのですか？」
「微妙だけど、人は、あなたのよろいを見てしまいます」
「網ノ目三郎さんが、自分の達成感のために、自分の成績のために、自分のよろいのために、チェリー株式会社を使ってしまうということを、感じます」
「私のように、言葉にはしませんが、人は、微妙に感じ取ります」
「網ノ目三郎さんの意欲は買うけど、不純だと感じ取ります」
「網ノ目三郎さんの、そういうよろいを、山上一郎さんと三枝伸治さんに利用されたのでしょう」
「梅岡さんは、どうして、そこまで知っているのですか？」
「話せません」
「今のあなたは、別人になっているから」
「なんといっても、あなたからよろいの目が消えたんでしょうね」
「あなたは、自分のために、何かをやることがなくなった」
「人は、微妙です」
「そういうあなたを視ます」
「あなたのやっていることが、将来の自分たちのためになると感じれば、動きます」
「あなたのために動くのは、ゴメンです」
「物事には流れというものがあります」
「今のチェリー株式会社は、網ノ目三郎さんの流れです」
「少し前は、あなたはジャマ者でした」
「あなたは、今は、流れを維持するだけでいいのです」

「いいとかワルイとかいうものではありません」
「人が集団で生活しているのですから、どうしても、流れというものが出てきます」
「チェリー株式会社は、流れができないという、淀んだ空気の状態でしたでしょうから、それだけでも、大きな意味があります」
「そこに、ある方向づけられた流れができました」
「それは網ノ目三郎さんの流れです」
「この流れを嫉妬する人も出てきます」
「この流れが、網ノ目三郎さんの功績だと思えば、あなたを消したくもなるでしょう」
「網ノ目三郎さんがこれからどうするかです」
「もしチェリー株式会社が立派になって社員も働きがいもできて、将来に希望が持てるようだったら、網ノ目三郎さん自身は、何も望まないというのでしたら、今、網ノ目三郎さんがやっていることは、成就するでしょう」
「物事とは、そういうものです」
「そのためには、あなたを消したがっている悪魔とも、戦わなければなりません」
「あなたのよろいが問題です」
「私も、あなたのよろいのために、チェリー株式会社の顧問をやるのは、ゴメンです」
「いま、どんどん、ある方向に向かっている流れを動かしている、チェリーの人達も、同じです」
「私のように言葉にはしませんが、みなさん、微妙に感じとっています」
「同じ私がやっていることなのですが」
「同じ網ノ目三郎さんではありません」
「よろいがあるとないでは、全く違う人になります」
「私には、まだよくわからないところがあります」
「まだ修業中なのでしょうけど」

「この重なってるボトルが低くていいです」
「お風呂なんかで使いやすいし洗面台でも使いやすい」

「しっとりしていて使った後の感じもいいです」
高評価である。
クレンジングは、詰め替えどうするのですか？
網ノ目三郎は聞いていない。詰め替えがなければもったいないと思ってしまうだろう。
「いくらですか？」
これもまだ聞いていない」
「友達にも紹介しようと思うんだけど」
網ノ目三郎は、10セット梅岡玄蕃に送ることを約束した。

○網ノ目三郎を襲う男

網ノ目三郎は、輪島クレンジングと輪島セッケンが、うまくいきそうな気がしてきた。はっきり言って、網ノ目三郎には、商品がよくわからない。梅岡玄蕃のように、渋谷のお店を見て、「これは難しい商品だ」などと、簡単にことばにはできない。商品の価値がわかるには、それなりのノウハウがありそうである。
輪島クレンジングと輪島セッケンは、そんな網ノ目三郎にも、少しは理解ができる。それは、渋谷の５人の娘のことだ。彼女たちが使う商品である。彼女たちは、チェリー株式会社を知らない。彼女たちのお母さんでなければ、チェリー株式会社を知らないかもしれない。
品川まで、網ノ目三郎は、賑わいの中にいた。隙がないはずである。品川からの新幹線でも、網ノ目三郎は、混んでいる自由席の中ほどに座った。そして、静岡でも、人ごみに紛れて駅を出て、すぐにタクシーに乗り込んだ。
スーパーマーケットにも寄らなかった。今日は、昨日つくった、ピザ生地がある。今日もピザを焼こうと思った。しばらく、隙をつくらないでおこう。
網ノ目三郎を襲う男のことも考えようと思った。
ピザを焼きながら、網ノ目三郎は、自分を襲う男のことを考えていた。
自分は、逆の立場になれるのだろうか。誰かを、レンタカーで襲うなどということができるのだろうか。今は、全くイメージできない。どういうわけだか、全くイメージできない。しかし、電気技師なのに経営管理室に異動に

なって、仕訳を仕分けと書いてバカにされた時などは、コーヒーに塩を入れたくなったものだ。実行してはいない。今回の網ノ目三郎は、コーヒーに塩を入れるどころではない、命がかかっている。悔しいからいじめてしまいたいといった、簡単なことではない。網ノ目三郎が、この世からいなくなってほしいのだ。尋常ではない。
先里万丈『よろい』によると、見えざる悪魔は、崩壊させることだけが存在理由だと言う。網ノ目三郎を襲う男に命じているのは、チェリー株式会社の見えざる悪魔なのだろうか。網ノ目三郎をこのままにしておいては、せっかく崩壊しかけているチェリー株式会社を蘇らせることになると考えているのだろうか。だから、網ノ目三郎はどうしても消さないといけない。
網ノ目三郎を襲う男は、単に、利用されているだけに過ぎないのだろう。
チェリー株式会社の見えざる悪魔に利用されているだけだ。
多分、ピザは、網ノ目三郎にとって、大事なごはんの１つになる予感がする。やってみると、ピザ生地も簡単につくれる。ピザソースも、簡単である。ピザソースは、瓶に詰めて保管できる。ピザソースで、ナポリタンにして、スパゲティを食べてもおいしい。まだお店のピザほどではないが、スーパーマーケットで販売している、焼くだけピザよりはおいしいと思う。
確かに、網ノ目三郎を襲う男がよくない。殺人未遂である。新橋で網ノ目三郎が車に飛ばされてビルにでも頭をぶつけていれば、交通事故なのだろう。ひき逃げである。多分、犯人は捕まるだろう。なのに、なぜやるのだろう。
考えてみれば、網ノ目三郎も、湯本化学の会議で沈んで、チェリー株式会社のみんなにも白い目で見られて、もう餓死してもかまわないと思ってしまった。死を選んだ。よろいが傷ついた。今、網ノ目三郎を襲っている男も、同じなのだろう。網ノ目三郎に悔しい思いをしている。網ノ目三郎を傷つけることができれば、たとえ、自分の身に何があってもかまわないと思っているに違いない。あわよくば、ひき逃げ犯人が見つからなければ、幸いだろう。
網ノ目三郎を襲っている男に、やすやすと犯行させてはよくない。網ノ目三郎にも、非はないが、弾きがねはある。
翌日の日曜は、10時にスーパーマーケットに行った。豆腐を買って、マーボ豆腐に挑戦しようと思った。さすがに、朝の10時では、人を襲う雰囲気ではない。

そのまま終日、アパートに籠っていた。

喫水

○渋谷の娘**10**人
「その後襲われていないようだけど」
「ものすごく注意しています」
「あの男に犯行をさせることも、私に非があるわけではないが、私が弾きがねになっていることは確かだから」
「チェリー株式会社の見えざる悪魔は焦っているから、挑戦者を狙う刺客をつくる」
「網ノ目三郎さんは、まだ若いから、自分でよくわかっていないかもしれないけど、明らかに、挑戦者になっている」
「チェリー株式会社を崩壊させる役割を持っている見えざる悪魔に狙われている」
「刺客を放たれた」
「ここまできたら、もう諦めることは、かえってよくない」
「もっと前だったら、怖くなって、湯本化学に返してもらえればよかった」
「自ら消えていなくなっても良かった」
「一旦は、そういう選択をしたのでしょうが」
「もう遅い」
「網ノ目三郎さんは、存在するだけで、周りが動いてしまう」
「あなたに何かがあっても、この変革は進んでしまう」
「フツウは挑戦者は、見えざる悪魔に殺られます」
「例外がない」
「あなたが言う、チェリー株式会社の近代化ができたら、あなたは、自らの気を消して、存在を薄くしなければなりません」
「死んだと思わせるのですか？」
「チェリー株式会社の変革が成功しても、チェリー株式会社の見えざる悪魔は存在するから」
「私は、まだ狙われるんですか？」

「挑戦者とは、そういうものです」
「梅岡玄蕃さんは挑戦者ですか？」
「チェリー株式会社では、顧問を引き受けましたが、ラクです」
「網ノ目三郎さんが挑戦者をやってくれたからです」
「挑戦者がいなければ、私が挑戦者をやるので、何度も、襲われます」
「よく命が繋がっていますね」
「自ら気を消すことがポイントです」
「どうだ凄いだろうオレがやったと言いたくなりますが」
「言ったら終わります」
「あのフランスの英雄だって、皇帝になって終わった」
「あなたは、狙撃されて終わりです」
11時に、渋谷の娘が10人来ると言っていた。10人お昼を食べるスペースが空いていない。どうするのだろう。
「今日は娘たちが多いので部屋を貸してくれます」
梅岡玄蕃は、奥の部屋に向かった。まるで、自分のオフィスのように、勝手に入って行く。ギリギリ10人くらいがごはんを食べられる部屋だ。
梅岡玄蕃は、溜まっているのだろう、電話をはじめた。まだ20分ある。網ノ目三郎は、今の話しを整理したかった。
今週は、美鈴千賀子に、ムリを言って、10セットつくってもらったのを、梅岡玄蕃に送ってもらった。輪島クレンジングと輪島セッケンは、どんどん良くなっている。商品ぽくなってきている。
水曜日の、前川芳則と西条朋子と阿仁屋和人と小野天智と有吉里子の集まりは、それぞれの、現状報告だった。何も支障がない。９月１日には、スタートできる。パソコンも、設置された。ブックの大きくないものだ。多分、網ノ目三郎が何も言わない方がうまくいく。毎週水曜日に、１時間くらい集まって、お互いの進行状態を報告すれば、それで済む。
気になるのは、前川芳則だ。前川芳則は、コンピューターの仕事ではなくて、通信販売の仕事をしたい。今は、仕方なく、チェリー株式会社のコンピューターの仕事を兼務している。先行き、このままでは困るという顔をしている。
「わたしもうこれを使うけどまだ売ってないんでしょ？」

「どこで売るんですか？」
「通信販売です」
「メンドーだな」
「もっとデカイ重箱みたいなのないんですか？」
「セッケンはいいけどクレンジングはすぐなくなっちゃうから」
「もっといろんな匂いのクレンジングがあった方がいいかも」
「いくらですか？高かったらわたし買えない」
「輪島って何ですか？」
「輪島ブタのプラセンタ使ってるから」
「プラセンタが入っているのですか？」
「高くなるな〜そしたら」
「いいけど高いと買えない」
10人もいたら、終わらない。パスタにピザが運ばれて来て、ワイワイ、パーティーのようになった。

○ドラックストアーのバイヤー

前川芳則と美鈴千賀子と問屋さんと、静岡のドラックストアーを訪問した。静岡だけでやっているドラックストアーだ。渋谷の娘たちが、通信販売だと買いにくいと言っているので、ドラックストアーでの販売も試してみようと思った。網ノ目三郎の単純な想いである。
「なんでも試してみるといいのではないですか？」
梅岡玄蕃もこう言ってくれた。
まだ試作品だが、ドラックストアーのバイヤーは、どう言うのだろう。興味があった。前川芳則は、もしドラックストアーで販売するようになっても、営業は自分がやると言った。
網ノ目三郎は、バイヤーなる職業の人に会うのははじめてである。問屋さんは、前川芳則が探してきた。探してきたというより、説得してきた。ドラックストアーが販売することになれば。物流は、やってもよいという態度である。
君津峰子と名刺に書かれてあった。バイヤーである。

美鈴の説明を聞いて商品を見て言った。
「わたしが１週間使ってみますので」
「来週またおいでいただけますか？」
15分もいなかった。
「ドラックストアーのバイヤーの方は、どなたも忙しくて、会うことも難しいです」
問屋をやってくれるという50歳くらいの実直そうな男性が言った。
網ノ目三郎には、これからどうしてよいのかわからない。
「多分、扱ってもよいと言う返事が来ます」
「交渉になります」
「価格を指定してきます」
「最初ですし押しこまれるとは思います」
「商品は、一括して、ドラックストアーの倉庫に納入してくれになります」
「物流経費を出してくれです」
「問屋さんは何をするのですか？」
「商流と物流をやります」
「今回は物流はないでしょう」
「どうしてですか？」
「その静岡のドラックストアーは、自分でセンターを持っているから」
網ノ目三郎には、よくわからないところがある。前川芳則に任せるしかないだろうと思った。
「いつから出せるのか聞かれなかったのですが」
「金型もつくってないから」
「どうすればいいですか？」
「来週もう１度来てみて、君津さんの反応が良ければ金型つくりましょう」
「どのくらいかかるのですか？」
「３００万円くらいかな」
「時間は？」
「スタンバイしてくれてるけど１カ月はかかります」
「通信販売はどうするんでしょうか」
「通信販売はやりますよ？クレンジング持ってないし」

「セッケンはもちろん持っているんだけど、今回は、輪島クレンジングとセットになっているから」
前川芳則は、コンピューターの仕事をしている時よりも、イキイキしている。マーケターなのだろう。
網ノ目三郎は、今日の朝から、ずっと気にかかることがある。９時30分にバイヤーと会ったのだが、黒のセダンが、後にいる。一旦チェリー株式会社に出て、そこから、前川芳則が運転して、会社の車で出た。会社を出て以来、ずっと、黒のセダンがついている。
前川芳則も美鈴千賀子も、何も言わない。気づかない。ここのところ、網ノ目三郎は、注意している。自分の身もあるが、自分を襲う男の将来を奪うようなことをさせてはいけない。
「時間は早いんだけど、どこかで食事をして行きますか？」
「今日はお昼を頼んでないし」
「おすしのおいしいところがあるから」
網ノ目三郎は黒のセダンを見ていた。
駐車場には入って来なかった。今日は、諦めたのかもしれない。

○喫水
９月１日になった。網ノ目三郎は、昨日は、自宅に帰ってない。前川芳則も帰っていない。
「部品も商品もたな卸しやりました」
「どうでした？」
「かなりの差異があります」
「部品も商品も正式帳簿になっているから差異は経費処理する以外にありません」
「どのくらいあるのですか？」
「金額で１２０万円です」
「わかりました」
前川芳則は、山上一郎の大学の後輩である。山上一郎に引っ張られて、チェリー株式会社の通信販売の仕事をすることになった。柳株式会社の社長であ

る。株は持っていなかった。雇われ社長である。網ノ目三郎は、注意はしていた。山上一郎に、何から何まで通じてしまうだろうと思っていた。
まだ朝の５時だった。
「山上一郎さんはなんか言っていますか？」
前川芳則は、急に何を聞くのだろうといった顔をした。
「山上さんは何も聞きません」
「先輩なんでしょ？」
「チェリー株式会社の自分の持ち株が８％になって満足しているんですよ」
「そのうち８％は少ないと、また不満に思うのかもしれませんけど」
思ってもみなかった。前川芳則が、山上一郎のことを、このように思っているとは知らなかった。客観的に視ている。
「前川さんは、なにか望みがありますか？」
「通信販売のマーケティングやりたかったのですが、私を拾ってくれた山上一郎先輩には感謝しています」
「自由にやらせてもらっているし、報酬もワルクないし満足しています」
こういう話しができるようになったのだと、網ノ目三郎は感じた。どういうわけだか、前川芳則は、網ノ目三郎が感じるほど、網ノ目三郎を嫌っているわけでもなさそうである。
「網ノ目三郎さんがやっていた、今期の前半５か月の経費のまとめはどうですか？」
「月別に一括して、１枚の伝票で入れました」
「４月から８月の４か月ですか？」
「そうです」
「固定資産のたな卸しも終わっています」
「わかりました」
「昨日の現金も確認しました」
「預金もです」
「借入金もです」
「株もですか？」
「そうです」
「前期末の剰余金もセットしました」

「試算表出してみますか？」
「お願いします」
「昨日の試算表を今日の朝見てみる人なんかいないでしょうけど」
前川芳則は、おもしろそうに言った。
確かにそうだ。
昨日の夜の試算表を、今日の朝見れる会社などないだろう。しかも、リアルな試算表である。たな卸しを同時にやっている。間違いはない。
「フ〜ン〜まずいな」
赤字になっている８月末の試算表を見て、前川芳則が言った。
「ちょっとチェックしますから」
「私もやります」
前川芳則は、売上のチェックをはじめた。４月１日から８月末までの売上と入金と未収入金をチェックしていた。何度もチェックをしていたのだろうが、網ノ目三郎が、これを正式帳簿にしますと言ってしまったら、そこからは、勝手に修正などできない。
網ノ目三郎も、経費の確認をはじめた。８時半までには終わらせたいと、網ノ目三郎は思った。
試算表の今期利益に、すべてが集約される。カンだが、多分、こんなものだろうとは思っていた。４月から８月末では、若干だが、赤字である。こうやって一覧で見ると、部品在庫も、多い気がする。気になるが、今は、チェックして確定させないといけない。
チェリー株式会社の社員は、10人くらいが徹夜をしている。たな卸しをやった。それぞれ、けっこうタイヘンな作業をしているのだが、これが、どれほど凄いことなの、多分、誰もわからない。網ノ目三郎自身も、学校で教わったことを、リアルにやればこうなるということはわかる。
８時30分になった。峠下冴子がやってきた。
「どうですか？」
「８月月末の試算表です」
峠下冴子は、経営企画室のテーブルで、座って読みはじめた。
「わたしはじめて見た」
「どういう意味ですか？」

「こんな一覧になった試算表はじめて見た」
網ノ目三郎は、不思議だった。峠下冴子は、ずっと経理の仕事をしていたのだろうが、これを見るのははじめてだと言った。
「これで喫水がわかるわね」
多分、誰も、峠下冴子が言った、喫水の意味がわからないだろうと思う。網ノ目三郎自身も、チェリー株式会社の喫水を知りたいために、ここまでやったわけではない。しかし、峠下冴子に、喫水だと言われると、なるほどと思ってしまう。
多分、峠下冴子は、センスがある。60を過ぎているとは思うが、これを見て、喫水と言ってしまうセンスがある。このセンスで、この喫水を使ってもらったら、チェリー株式会社が、おかしな道に、迷い込むことはないのではないかと思う。せっかくの喫水も、センスの良くない人が担当するれば、ムダな道具になってしまう。
「これどうするの？」
「どういう意味ですか？」
「正式帳簿にするの？」
「税務署が来てもこれを見せるの？」
「もしそうだったらあなたが宣言しないと誰もできない」
「峠下冴子さんがいますけど」
「わたしは単なる経理担当役員だから」
「じゃ〜これを、今から正式帳簿にしていいですか？」
「わかったけど、みんなに伝えないといけない」
「もう伝票でしか動かないって」
「たとえたな卸しが間違っていてもダメだから」
峠下冴子は、経営企画室長として、網ノ目三郎が、１時間以内に発信すべき文書のポイントを、箇条書きにして、網ノ目三郎に渡した。
「社長はどうするのですか？」
「今からわたしが話しておくから」
「山上親子には、この価値がわかんないわよ」
網ノ目三郎は、峠下冴子の発言に驚いてしまった。多分、まだ、山上郁夫も山上一郎も、出社していない。

いろいろなことがわかってくる。
全社員宛ての文書を急いだ。
９時45分だった。
「今日９月１日から、チェリー株式会社は、すべての業務を、コンピューターのチカラを借りて、便利に簡単に行うことになりました。商品の在庫も部品の在庫も、現状を、正確に把握できますので、自分の仕事にも、うまく使ってください。売上の状況も、毎日リアルにわかりますので、参考にしてください。大事なことは、経費もコンピューターを使って処理していますが、溜めこんで、後でまとめて処理するといったことでは、せっかくの便利な道具が、うまく使えません。みんなで、この便利な道具を、便利なまま使いたいものです。今後は、毎月月末に、商品と部品と固定資産のたな卸しを行って、内容が、リアルに正確になるように、作業を行うよう、お願いいたします。この新しいチェリー株式会社の仕事は、峠下冴子さんによると、喫水と言われるもののようです。喫水とは、船の喫水のことです。船は、不具合があって沈みそうになると、喫水が船端ギリギリになってしまいます。喫水がどの程度であるのか、船乗りは、常に把握しています。しかし、会社の場合は、なかなか、会社の喫水を把握することが難しく、日本の会社でも、リアルに正確に、自分たちの会社の喫水を把握しているケースは、少ないと思われます。わたしたちは、この喫水だけでも、誇りにしてもいいのだと思います。みんなでがんばりましょう」

○三枝伸治を迎えて

「よくわかっていると思うが、私を雇うとはどういうことなのか」
「前川さんは、通信販売の責任者です」
「チェリー株式会社のシステムゼンブに責任を持つ気がありません」
「クレンジングとセッケンをたくさん売ることに興味があります」
「誰かが、ここまでやってきたチェリー株式会社のシステムを、維持して進化させないといけません」
「網ノ目三郎さんがやればいい」
「私は湯本化学の人間です」

「ひょっとすると、他の子会社に派遣されるかもしれません」
「湯本化学に帰って来いと言われるかもしれません」
「チェリー株式会社に骨を埋める人が必要です」
「私は、あなたを襲った人間ですよ？」
「あなたは警察にも届けない」
「それでいいのですか？」
「私は、あなたを視ているのではなくて、あなたの背後にある嫉妬心や権力欲や名誉欲のような塊である、あなたのよろいを視ています」
「もし、そういうものがなかったら、あなたは、私にとって、安心できる人です」
「チェリー株式会社にとっても安心できる人です」
「山上一郎本部長もワルだけど」
「私は、親会社の湯本化学の人間です」
「私は、多分、山上一郎さんを辞めさせせることもできるのでしょう」
「でも、三枝さんが、今、私に、そういう危険がありながら、すべてを話していることに、意味があると思います」
「もし、山上一郎さんが、またしても、おかしなことを言いはじめたら、三枝さんが、止めるか、投げ出すか、どちらかができるかどうかです」
「最悪なのは、三枝さんが、自分の保身のために、チェリー株式会社にとって、よくない行動をすることです」
「私も、他者のことは言えない」
「山上一郎さんとあなたに同調して、湯本化学で40人のリストラとコンピューター化計画を説明しました」
「恥ずかしい」
「網ノ目三郎さんは、なんですか？」
「私は、１度死んで、生き返ったんです」
「今の私は、全く違う人間なんです」
「あなたに襲われたけど、あなたを怨んでいるわけではありません」
「あなたに仕返しをしようなどとも思っていません」
「あなたが私を襲う理由もありません」
「私は違う人間だから」

網ノ目三郎が、三枝伸治を、チェリー株式会社の、システム担当部長にすると経営会議で説明した時、山上一郎の顔色が変わった。山上一郎は、明らかに、三枝伸治から、何も聞いてはいなかった。
三枝伸治のことは、山上一郎と網ノ目三郎にしかわからない。湯本化学でも、網ノ目三郎案として、チェリー株式会社の40人のリストラとコンピューター化案を、説明した。三枝コンピューターなる会社は、どこにも出ていない。三枝伸治の名前も出ていない。ましてや、三枝伸治が、何度も網ノ目三郎を襲ったことなど、誰も知らない。
経営会議があって、人事の発表があって、夜に、梅岡玄蕃から電話があった。
「何があったのだ」
「脅迫に屈したのか」
「網ノ目三郎を襲った男だ」
「承知している」
「三枝伸治は、チェリー株式会社にとって、今、どうしても必要な人だ」
「三枝伸治の嫉妬心や名誉心や存在心や金銭欲などが薄くなってくれれば、何も問題はない」
「人は、そんなに簡単には変われない」
「網ノ目三郎だって１度死んでいる」
「私は前から不思議だったのだが、どうして私のことを詳しく知っているのですか？」
「どうして三枝伸治が私を襲う人だと知っていたのです？」
「どうして今日私が三枝伸治をチェリー株式会社に招いたことを知っているのですか？」
「なんでも知っている」
「網ノ目三郎さんの覚悟のことを聞いている」
「覚悟はできています」
「人は、よろいがなければ、みんな立派な人だということがわかったからです」
深夜になって、千鶴から電話があった。
「日曜日揚げ物屋さんで働く日だから、土曜日網ノ目三郎のアパートに泊め

て」
「すき焼き２人で食べたいと思ってる」
「もうあなたを狙う人はいなくなった」
「わたしも時々網ノ目三郎のアパートにごはん食べに行く」
「今日は月曜だけど忘れないで」
千鶴は、返事も聞かずに、勝手にケータイをしてきて勝手に切ってしまった。

○９月末日
三条朋子がやってきた。
「今日支払いをゼンブ振込にしたから」
「金利安いのにコスト２％下げられて儲かっちゃったわよ」
「来月は部品を少し詰めるから」
「３千万くらい在庫落とす」
「峠下冴子さんが毎日ウルサイわよ」
「なんですか？」
「３千万円部品在庫落とせじゃない」
「輪島クレンジングと輪島セッケンだけは少し厚めにしてある」
「毎日売上見てるけど」
静岡だけしかないスーパーマーケットで、輪島クレンジングと輪島セッケンは販売をはじめた。もちろん、通信販売でも、販売をはじめた。まだ、ヒットしそうな動きではない。しかし、みんな、興味を持って毎日見ている。リアルにみんなが販売実績を見れるようになったことも大きい。
網ノ目三郎は、久しぶりに歩いて帰った。しばらく歩いて帰っていない。いつ襲われるかわからないからだ。朝もバスに乗った。少し寒くなりそうな澄んだ空気が、こんなにおいしいとは思わなかった。この半年、網ノ目三郎にとっては、凝縮された半年だった。まだ、未発達者だ。恥ずかしかったことが山ほどある。半年で、少しは学んだ。そして、一旦死んだ。一旦壊れないと新しいことは生まれないことも、身をもって理解した。しかし、まだ、自分のことなのに、自分をうまく語れない。経営企画室長なのに、明日からの

チェリー株式会社をどうすればよいのか、まだ自信を持って語れない。１つだけ自信がある。喫水をリアルに毎日読めるようになったことが大きい。多分、チェリー株式会社が浸水することはない。それだけは、自信がある。ただ、船を浮揚させることがわからない。それは、これからなのだろう。会社が成長するとは何だろうか。さっぱりわからない。

『喫水-変革者』

２０１２年春

２０１９年

げんじあきら

『喫水ー変革者』の続編『ブルーセダンとの戦いー変革者』『リモデリングー変革者』も読んでいただきたい
『ソウルの縄文』『ソウルのマナティ』を読んでいただきたい
『人と集団を滅ぼすもの』を読んでいただきたい
『よろいってなんだ』『壊れるよろい』『脱げないよろい』『ルイハシのよろい』『ちかのよろい』『よろいってなんだ』を読んでいただきたい
『ヒット商品』を読んでいただきたい
『売上を目指すと滅びる』も読んでいただきたい

喫水ー変革者

著者　　　げんじあきら